福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1162 集

中 南 部 10

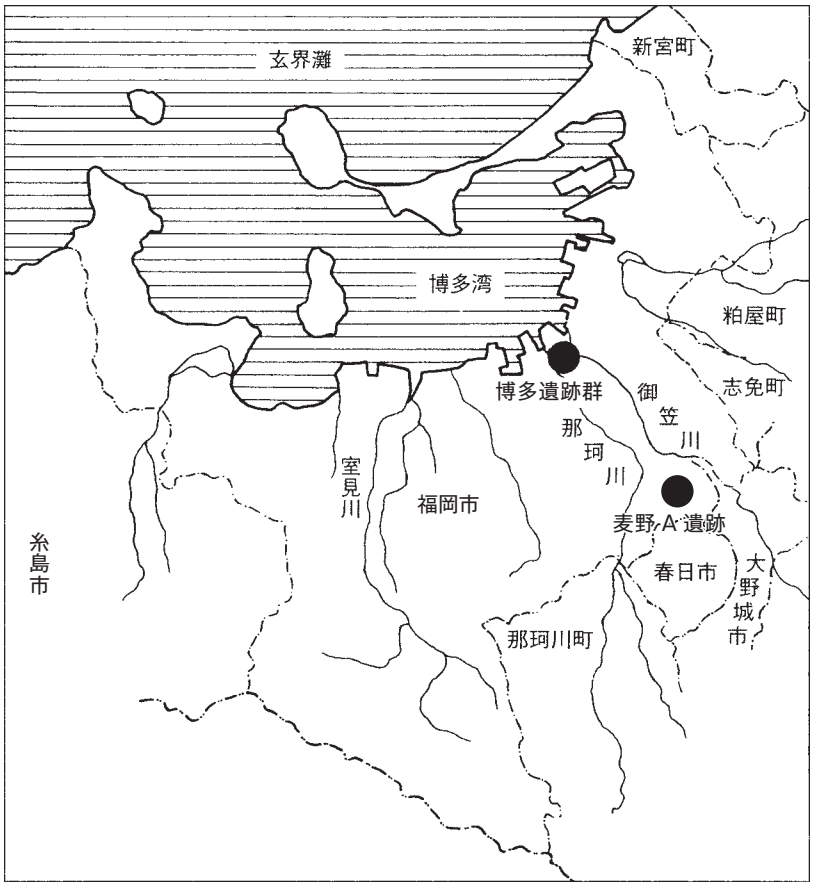
－博多遺跡群第 146 次調査報告・麦野 A 遺跡第 2 次調査報告－

２０１２
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1162集

中南部（ちゅうなんぶ） 10

－博多（はかた）遺跡群第146次調査報告・麦野（むぎの）A遺跡第2次調査報告－



博多146次：遺跡略号　HKT－146
遺跡略号　0357
麦野A2次：遺跡略号　MGA－2
調査番号　8337

2012

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。

博多区は、奴国の中心地であり、中世の国際交易拠点の博多遺跡など数多くの重要な遺跡が分布しています。本市教育委員会では、遺跡内の開発については、事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、事業者による開発に先立って、昭和 58 年と平成 16 年に同区内に所在する麦野 A 遺跡と博多遺跡群で調査を行った成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成 24 年 3 月 16 日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

凡　　例

⑴　本書は、福岡市教育委員会が昭和58年（1983）と平成16年（2006）度に、福岡市博多区内で調査を実施した発掘調査報告書である。

⑵　発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は博多遺跡群第146次調査を山崎龍雄、麦野A遺跡第2次調査を山崎・田中壽夫が行った。

⑶　遺構・遺物の実測は博多遺跡群第146次調査が山崎が行い、一部平川敬治が行い、麦野A遺跡第2次調査については遺構を山崎・田中、遺物を平川が行った。

⑷　本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。

⑸　調査で出土した中･近世輸入陶磁器の分類については『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－（2000年　太宰府市教育委員会)』を参考にした。近世国産陶磁器については『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会2000年)。

⑹　遺構の撮影は山崎･田中（麦野A遺跡第2次調査)、遺物の撮影は力武卓治（埋蔵文化財センター文化財教育普及専門員）が行った。

⑺　博多遺跡群第146次調査出土の動物骨の分析報告は屋山洋（埋蔵文化財第2課）が行った。

⑻　本書に使用した方位は磁北であり真北とは6°18′西偏する。また国土座標は旧日本測地系である。

⑼　本書Fig.2の調査区地点位置図は「福岡市文化財分布地図　東部Ⅰ」（平成7年3月現在）を使用した。

⑽　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。

⑾　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

⑿　本書の執筆・編集は山崎が行った。

博多遺跡群第146次調査基本情報

遺跡略号	調査番号	調　査　地　番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
HKT-146	0357	福岡市博多区店屋町125・126番	260.60㎡	79㎡×2面	専用住宅	2003.11.26～2004.1.13	山崎龍雄

麦野A遺跡第2次調査基本情報

遺跡略号	調査番号	調　査　地　番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
MGA-2	8337	福岡市博多区麦野5丁目24・42・81	1457.94㎡	142.6㎡	共同住宅	1983.7.15～7.25	山崎龍雄・田中壽夫

本　文　目　次

博多遺跡群第 146 次調査

第１章　はじめに…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査の組織…… 1
第２章　遺跡の立地と歴史的環境…… 2
　1　遺跡の立地と歴史的環境…… 2
第３章　調査の記録…… 4
　1　調査の概要…… 4
　2　第１面の遺構…… 4
　3　第２面の遺構…… 22
　4　まとめ…… 38
　5　第 146 次調査出土動物遺存体について…… 39

麦野 A 遺跡第２次調査

第１章　はじめに…… 51
　1　調査に至る経緯…… 51
　2　調査の組織…… 51
　3　立地と歴史的環境…… 51
第２章　調査の記録…… 52
　1　調査の概要 …… 52
　2　Ⅰ区の調査…… 52
　3　Ⅱ区の調査…… 52

各遺跡挿図・図版目次

博多遺跡群第 146 次調査

Fig.1　博多遺跡群と周辺の遺跡（１/25,000）…… 3
Fig.2　第 146 次調査地点位置図（1/6,000）…… 3
Fig.3　調査区現況図（1/250）…… 5
Fig.4　遺構全体図（1/100）…… 6
Fig.5　SD08・15 出土遺物（1/3）…… 7
Fig.6　SD08・15・20 出土遺物（1/3）…… 8
Fig.7　SK10・16・19・26・30（1/40）…… 10
Fig.8　各土坑出土遺物（1/3）…… 11
Fig.9　SX09・11、SK34 と SX11・13・21 出土遺物（1/30・1/50・1/3）…… 13
Fig.10　SX09 出土遺物１（1/3・1/4）…… 14
Fig.11　SX09 出土遺物２（1/3）…… 15
Fig.12　第１面出土遺物（1/3）…… 16
Fig.13　SX12 出土遺物１（1/3・1/4）…… 18
Fig.14　SX12 出土遺物２（1/3）…… 19
Fig.15　SX12 出土遺物３（1/3）…… 20
Fig.16　SX12 出土遺物４（1/3・1/4）…… 21
Fig.17　SX01 ～ 03 出土遺物（1/3）…… 23
Fig.18　SE24・31（1/50）…… 24

Fig.19　SE24 出土遺物１（1/3）…… 25
Fig.20　SE24 出土遺物２（1/3・1/4）…… 26
Fig.21　SE31 出土遺物（1/3）…… 27
Fig.22　SK32・42（1/40）…… 28
Fig.23　各土坑出土遺物（1/3）…… 29
Fig.24　SK35・37・39、SX25・28・29・38 出土遺物（1/3）…… 30
Fig.25　SK40 ～ 42・44 出土遺物（1/3）…… 31
Fig.26　各ピット出土遺物（1/3）…… 32
Fig.27　２号トレンチ土層（1/60）…… 33
Fig.28　SE43 出土遺物（1/3）…… 34
Fig.29　遺構面・2 号トレンチ出土遺物（1/3）…… 35
Fig.30　各遺構出土石器（1/3）…… 36
Fig.31　各遺構出土金属製品（2/3・1/2）…… 37
第1図　第 146 次調査出土骨角器実測図（1/1）…… 40
第2図　博多遺跡出土サメ・エイ椎骨製骨角器実測図（1/1）…… 41
写真　第 146 次調査出土骨角器 …… 41
表１　第 146 次調査出土動物遺存体一覧 …… 42
PL.1　⑴ 第 146 次調査区全景（東から）⑵ 第１面調査区全景近接（東から）…… 43
PL.2　⑴ 第１面調査区西側（東から）⑵ 第１面調査区東側（東から）
⑶ SD08 東側完掘（東から）…… 44
PL.3　⑴ 第２面全景（東から）⑵ 第２面調査区西側（東から）…… 45
PL.4　⑴ 第２面西側ピット群（南東から）⑵ 第１面 SX09 近接（北から）⑶ SX09（西から）
⑷ SD15（SX09 下）（西から）⑸ SX09、SK34 土層断面（東から）…… 46
PL.5　⑴ SD15（北西から）⑵ SK19（東から）⑶ SK22（南東から）⑷ SX11（東から）
⑸ SP18・25・26 礎石建物か（東から）⑹ SE24(南から) ⑺ SE24 井筒（北から）… 47
PL.6　⑴ SE31（南から）⑵ SK26（南から）⑶ SK27（北から）⑷ SK32（南から）
⑸ SK37（北から）⑹ SK34(南東から) ⑺ SK42（南東から）⑻ SX28（西から）… 48
PL.7　⑴ 第２面２トレンチ出土遺構（東から）⑵ 第２トレンチ北壁土層断面（南から）
⑶ 各遺構出土遺物１ …… 49
PL.8　各遺構出土遺物２ …… 50

麦野 A 遺跡第 2 次調査

Fig.1　麦野 A 遺跡第 2 次調査地点位置図（1/6,000）…… 51
Fig.2　調査地点現況図（1/500）…… 54
Fig.3　調査区遺構全体図（1/100）…… 55
Fig.4　Ⅰ区溝・Ⅰ区西壁、Ⅱ区北壁土層図（1/60）…… 56
Fig.5　Ⅱ区 SE03・04（1/60）…… 56
Fig.6　Ⅰ区 SD01・02、Ⅱ区 SD03 出土遺物（1/3）…… 57
Fig.7　Ⅱ区 SD04・05 出土遺物（1/3）…… 58
Fig.8　Ⅱ区 SE01・03 出土遺物（1/3・1/4）…… 59
Fig.9　Ⅱ区 SE01・04、各土坑出土遺物（1/3・1/4）…… 60
PL. 1　⑴ 調査区全景（西から）⑵ Ⅰ区全景（南から）…… 61
PL. 2　⑴ Ⅱ区全景（西から）⑵ Ⅱ区東側（南西から）…… 62
PL. 3　⑴ Ⅰ区 SD01・02（東から）⑵ Ⅰ区 SD02 西壁土層（東から）⑶ Ⅱ区 SD04・05（南から）
⑷ Ⅱ区 SD06（南から）⑸ Ⅱ区 SE01・02、SD03（南から）⑹ Ⅱ区 SE03・04（東から）
⑺ Ⅱ区 SX02（西から）⑻ Ⅱ区 SX03（南から）…… 63
PL. 4　⑴ Ⅰ区 SD01 遺物出土状況 ⑵ Ⅱ区 SE04 遺物出土状況 ⑶ 各遺構出土遺物 …… 64

博多遺跡群第 146 次調査

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

平成 14（2002）年 8 月 7 日に、福岡市博多区店屋町 125・126 番の土地所有者より、現地に自宅ビル建設の為の埋蔵文化財事前審査願い（事前審査番号 14 － 2 － 306、15 － 2 － 306）が福岡市教育委員会に提出された。これを受けて、事前審査担当者が確認調査を実施して遺跡の有無を確認した。試掘調査の結果、遺跡の存在を確認した。平成 15 年度、土地所有者から開発計画が具体化したので、再度の申請（事前審査番号 15 － 2 － 33）があり、申請者側とその取り扱いについて協議を行ったが、協議で地下の遺跡を保護する設計変更は困難であるということから、個人住宅建設ということで、国から補助金を受けて、記録保存のための調査を実施する事となった。調査にあたっては、調査区の土留め矢板施工、遺構面までの表土の鋤取り、調査中の廃土の搬出、調査終了後の埋め戻しは申請者側が行った。本調査は平成 15 年 11 月 26 日に開始し、平成 16 年 1 月 13 日の発掘機材等の撤収で調査を終了した。調査実施面積は申請面積 260.60㎡中の 79㎡（2 面）である。調査は第 3 面以下に工事が及ばないことや、遺構面が深く、現状の矢板では調査を実行することが危険であるということから、一部トレンチを入れ、遺構の有無を確認し、第 3 面以下は、現状保存ということで調査を終了した。

調査報告書作成作業は平成 23 年度に実施した。

調査にあたっては、事業者及び工事担当業者の方々に表土の鋤取り・廃土の搬出などで多大な協力を受けました。記して感謝の意をします。

２．調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財課長	山崎　純男（前）
	埋蔵文化財第 2 課長	田中　壽夫（現）
	埋蔵文化財課調査第 2 係長	田中　壽夫（前）
	埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係長	菅波　正人（現）
調査庶務担当	文化財整備課管理係	御手洗　清（前）
	埋蔵文化財第 1 課管理係	古賀とも子（現）
事前審査担当	埋蔵文化財課事前審査係	久住　猛雄（前）
調査担当	埋蔵文化財課主任文化財主事（現 埋蔵文化財センター主任主事）	山崎　龍雄
整理作業	木藤直子　長尾紀久子　増永好美	

調査は多くの作業員の方の協力を得て行った。文末ではありますが、記して感謝の意を表します。

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１.遺跡の立地と歴史的環境（Fig.1・2）

博多遺跡群は、玄界灘に開口した博多湾のほぼ中央部、那珂川・御笠川の河口部に形成された砂丘上に立地する、弥生時代前期から現代まで連綿と続く複合遺跡である。遺跡の範囲は南北長 1.5km，東西幅 1km を測る。遺跡群が立地する砂丘は現在の微地形から推定して大きく三列認められる。三列の砂丘は内陸側から砂丘 1、砂丘 2、砂丘 3 と仮称され、砂丘 1・2 は博多浜、砂丘 3 は息浜と呼ばれている。博多遺跡群の始まりは内陸側の砂丘 1 の一帯に弥生時代前期の甕棺墓地や中期の集落跡が営まれる。古代にかけても砂丘 1・2 の博多浜が中心となる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、東の東海地方の土器をはじめ、西日本各地の土器が出土しており、奴国の玄関としての特色を見せ始める。古墳時代中期には前方後円墳を含む古墳群が造営され、家形埴輪などを含む埴輪が出土している。海浜砂丘上の古墳は市域では箱崎遺跡や唐原遺跡でも確認されている。

古代は博多浜砂丘上に 100 メートル四方の区画溝で囲まれた官衙的施設が築かれたようで、官職にあった人が付けた帯金具や石帯、官職を示す墨書土器なども出土しており、鴻臚館に関連する外交施設の存在が考えられている。古代末、平和台にあった鴻臚館が衰退するのに替わって、博多が海外交渉の窓口として発展しはじめ、遺跡は砂丘３の息浜部へと拡大してゆく。

中世前半には「博多津唐房」と中国の史料に見られるような中国人居留区なども造られ、中国を中心とする東アジアとの交易が大々的に始まり、交易によってもたらされた多量の輸入陶磁器が出土する。鎌倉時代には文永の役によって博多は壊滅的被害を受けるが、再度の元軍襲来を防ぐために息浜北辺海浜上に石塁が築かれる。その石塁と思われる遺構が第 111 次地点で見つかっている。また幕府の出先機関の鎮西探題が置かれる。探題の場所は櫛田宮周辺が推定されている。

中世後期、室町時代から戦国時代にかけては、博多浜は守護（戦国）大名の大内氏、息浜は大友氏の支配下に入る。両大名の庇護のもとで、博多商人は中国の明との貿易を発展させ、大内氏滅亡以降は大友氏のもとで、息浜が中心的に発展していく。キリスト教教会なども息浜に建てられる。大友氏が衰退する戦国時代末期以降、肥前の龍造寺氏、薩摩の島津氏など他地域大名の焼き討ちにあい、荒れ果てる。天正 15 年（1587）の豊臣秀吉の九州平定以降は、石田三成を総奉行として、太閤町割りといわれる博多再建が始まる。これは、文禄１(1592)に始まる、朝鮮出兵の兵站基地も意図した都市の復興でもあった。秀吉による九州国割りで筑前国は小早川氏が国主となり、慶長５年（1600）の関原合戦後は黒田氏が筑前国主となり、両大名のもと近世博多の町並みに再整備されていく。

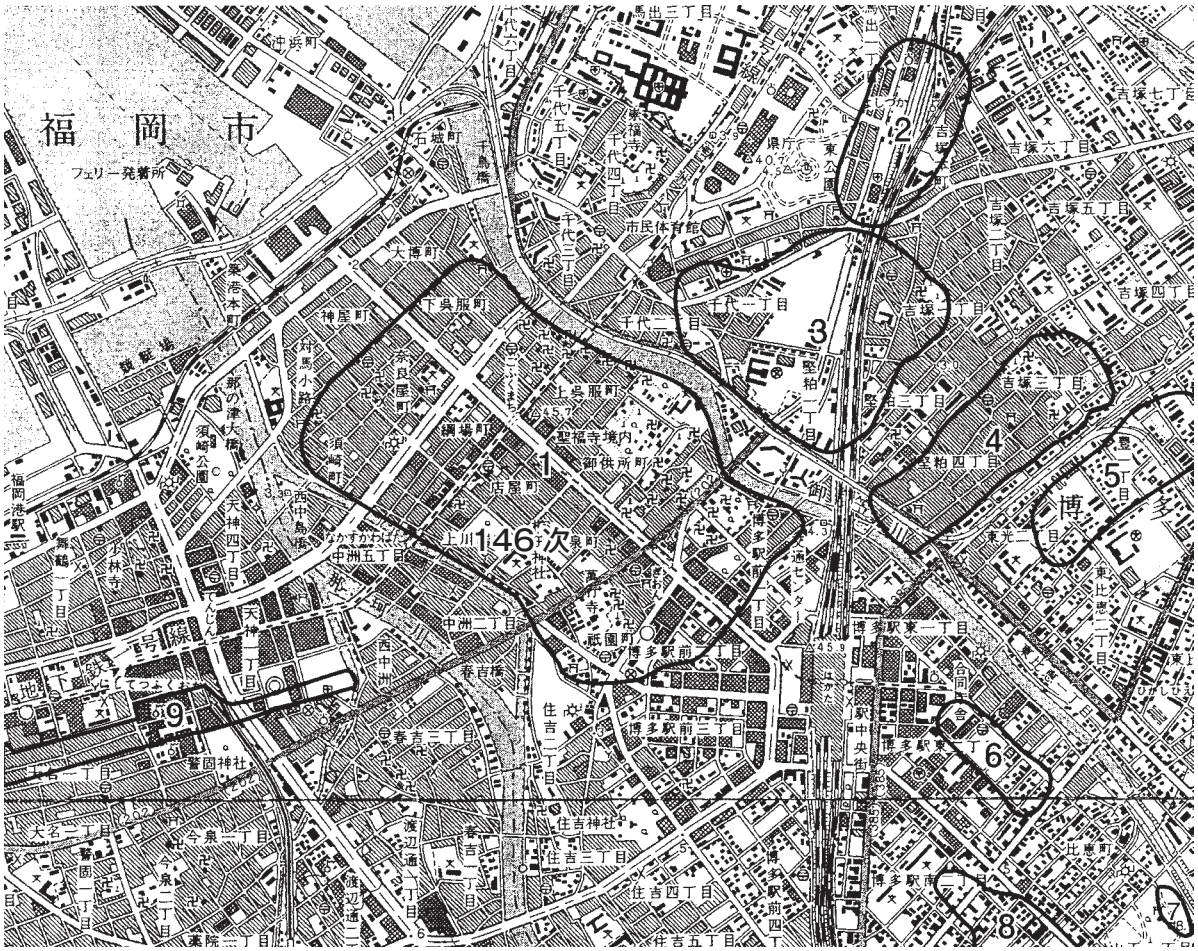


Fig.1　博多遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）

1．博多遺跡群　　3．堅粕遺跡　　5．豊遺跡　　7．山王遺跡　　9．福岡城肥前堀

2．吉塚本町遺跡　　4．吉塚遺跡　　6．駅東生産遺跡　　8．比恵遺跡群

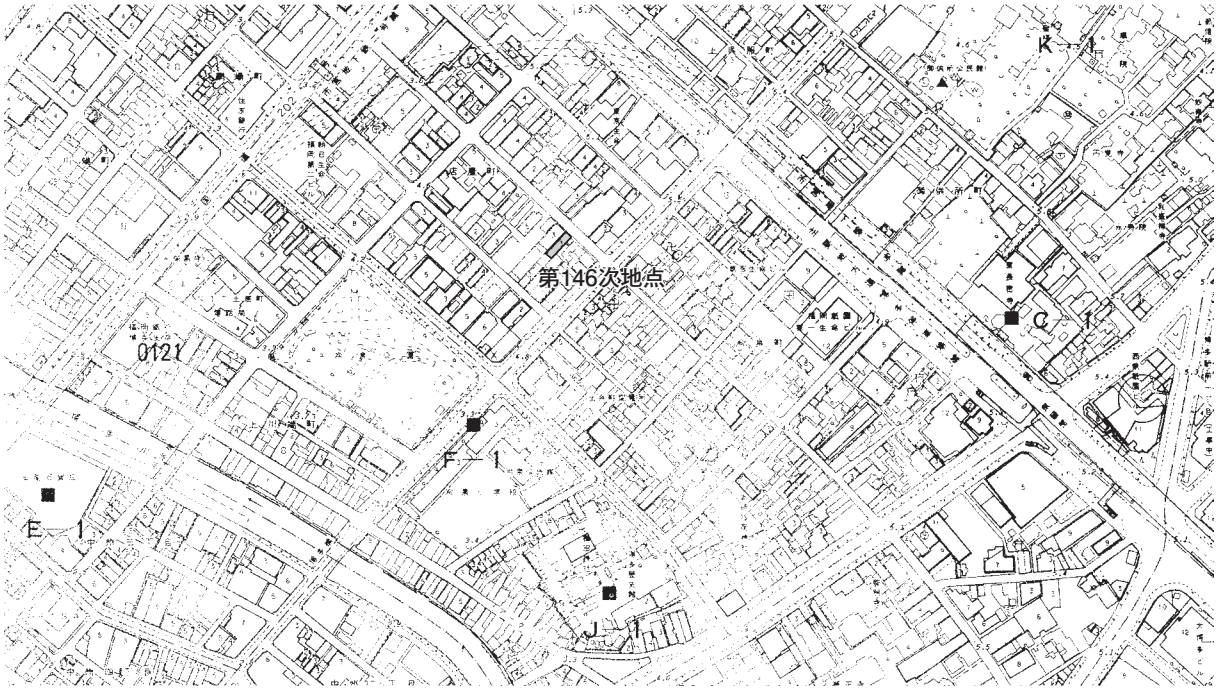


Fig.2　第 146 次調査地点位置図（1/6,000）

第３章　調査の記録

１．調査の概要（Fig. 4、PL. 1 ～ 3）

調査地は博多区店屋町 125・126 番地である。旧博多街区の地割りの細長い敷地で、その部分に RC 造の専用住宅が建てられるため調査を実施した。調査対象範囲は土留矢板が設置された 5 × 16 mの範囲である。調査地の現況は宅地で、既設家屋解体後調査を実施した。調査は試掘成果の結果を基に GL － 1.5 ～ 1.7 mの面まで重機で掘削し、その廃土を場外搬出した。第 1 面は中世後期（14 ～ 16 世紀）で、道路の側溝と思われる並行する溝・土坑・鉄滓廃棄遺構・ピットなどを検出した。第 1 面には明確な遺構ではないものの、鉄滓や礫石が多く出土した。第 2 面は 1 面より － 0.5 m前後で、中世前期（12 ～ 13 世紀頃）の面である。井戸や焼土坑・土坑・ピット・建物の一部と思われる礎石列などを検出した。事前調査では四時期の遺構面を想定していたが、土留施工の具合から全面の調査は危険が予想されたことや、工事が第２面以下に及ばないことから一部に基盤面までの試掘トレンチを設定し、遺構の存在と深さを確認し調査を終了した。従って下層の遺構については現状保存である。各面からは、古代から近世の遺物が出土した。特に鍛冶遺構からは鉄滓・フイゴの破片などが出土した。

２．第１面の遺構

１）遺構と遺物

①　溝

SD08・20（Fig. 5 ・ 6 ・31、PL. 2 － 3）

調査区主軸方向を N － 84° － E に取る溝。東側は上層に鉄滓や黒色灰を含む SD20 とした層が続く。SD08 は SD20 部分下にも東に続く。全体の確認規模は 10.9 m、溝幅は最大で 0.7 m、深さは 0.2 m程を測る。埋土は暗褐色土で、焼土・灰・鉄滓などを含む。SD20 とした部分の確認規模は 4.3 m、幅 0.4 ～ 0.6 m、深さ 0.1 m前後である。鉄滓混じり黒灰層で部分的に灰色粘土が混じっていた。報告では SD20 部分も SD08 の一部と考え、**出土遺物**もここで報告する。

出土遺物　SD20 も含めて、中世土師器、瓦質土器、中国産陶磁器、フイゴ片、鉄滓、動物骨などが出土する。僅かに弥生土器細片も出土している。時期は出土遺物から 14 ～ 15 世紀と考える。

SD08 部分出土遺物　１～８は土師器。**１～６**は小皿。残存率は 4/5 片・1/2 片・9/10 片・1/5 片・1/4 片・底部片。口径 6.2 ～ 10.0㎝、器高 1.0 ～ 1.9㎝を測る。**７**は坏。1/2 片で口径は 11.1㎝を測る。**１～７**の調整は体部回転ナデ、外底部は糸切り。**８**は口縁部小片で盤か。内外面細かいハケ目。外面口縁部直下に指押え痕が残る。胎土は石英・長石・雲母粒子多く含む。**９～ 13** は白磁。**９～ 11** は皿。**９**は小型の皿か碗の 1/5 片。復元口径 10.6㎝を測る。口縁が丸味を持った体部から外反し開く形態。素地に白化粧土を施した上に、光沢を持った透明釉がかかる。**10** はⅢ類。1/6 片で、復元口径 12.8㎝を測る。内面沈線が巡る。表面光沢を持つ釉がかかり、表面貫入が入る。**11** はⅢ類の底部 1/3 片。復元底径 5.0㎝を測る。白化粧土を施した上に透明釉がかかる。**12・13** は碗。**12** はⅡ － 1 類の 1/10 片。復元口径 13.4㎝を測る。光沢を持った灰オリーブ色の透明釉がかかる。**13** はⅤ － 4a 類の 1/10 片。復元口径 15.4㎝を測る。光沢を持った乳白色釉がかかる。**14** は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗 1/7 片。復元口径 14.8㎝を測る。表面灰オリーブ釉が厚目にかかる。**15** は古代の須恵器坏。口縁部 1/6 片で復元口径 12.2㎝を測る。体部内外面は回転ナデ。**16** は薄手の平瓦小片。残存長 9.9㎝、幅 8.5㎝、厚み 1.0 ～ 1.5㎝を測る。凹面は布目が残る。側面はヘラ切り調整を行う。中世の時期のもの。色調は鈍い橙色から橙色を呈すが焼成は良い。**17** ～ **19** は瓦玉。**17** は径 4.7 × 4.9㎝で、黒褐色釉がかかる陶器の口

縁部片利用したもの。**18** は土器片利用。大きさ 2.2 ～ 2.7cmで、粗割後削り仕上げ。**19** は瓦片利用。2.2 × 2.5 × 1.9cm。**46・47** はフイゴ羽口片。**46** は直径 8.5 m、孔径 2.1cmを測る。先端は焼けガラス質に溶融している。**47** は復元径 8.0cm、孔径 2.4cmを測る。表面は焼け硬く変質し、ガラス質に溶融していると考える。

SD20 部分出土遺物　**39・40** は土師器の皿か小型の坏。**39** はほぼ完形、**40** は 5/6 片。口径 10.9cm・10.8cm、器高 2.3cm・2.4cmを測る。体部調整は回転ナデ、外底部は回転糸切りで **39** には板目が残る。**41** ～ **43** は白磁。**41** は小碗底縁部 1/4 片。復元口径 11.0cmを測る。表面光沢のある灰黄色釉がかかる。**42** は大きく開く鉢の口縁部 1/8 片。復元口径 16.6cmを測る。光沢を持つ灰色釉が薄めにかかる。**43** は壺などの底部 1/4 片。復元底径 6.0cmを測る。底部は上げ底で、器壁は薄く丁寧な作り。底部端段を作り高台風を成す。光沢を持つ透明釉がかかる。**44** は青白磁の皿 1/5 片。復元口径 9.4cm、器高 2.0 cmを測る。上げ底で全体に薄手の作り。見込み陽刻の文様が入る。光沢を持つ明緑灰色釉がかかる。**45** は須恵器片を利用した瓦玉。長径 2.5cm、厚さ 0.8cmを測る。

SD15（Fig. 4・5・6、PL. 4 − 4,　5 − 1）

SD08 の南側、幅 2.2 mを挟んで並行して延びる小溝。西側は鉄滓廃棄遺構の SX09 の下で確認した。規模は幅 0.6 m、深さ 0.45 mを測る。断面逆台形又は箱堀である。埋土は上層は黒褐色粘質土、下層は暗オリーブ褐色砂質土である。

出土遺物　中世の土師器、中国産陶磁器、瓦質土器、瓦器などが出土。**20** ～ **33** は土師器。**20** ～ **27** は小皿。**24** はほぼ完形であるが他は破片。口径は 6.6 ～ 8.4cm、器高 1.1 ～ 1.6cmを測る。調整は体部回転ナデ、外底部糸切りである。**28** ～ **33** は坏。**33** は口縁を 1/6 欠く。他はいずれも破片である。

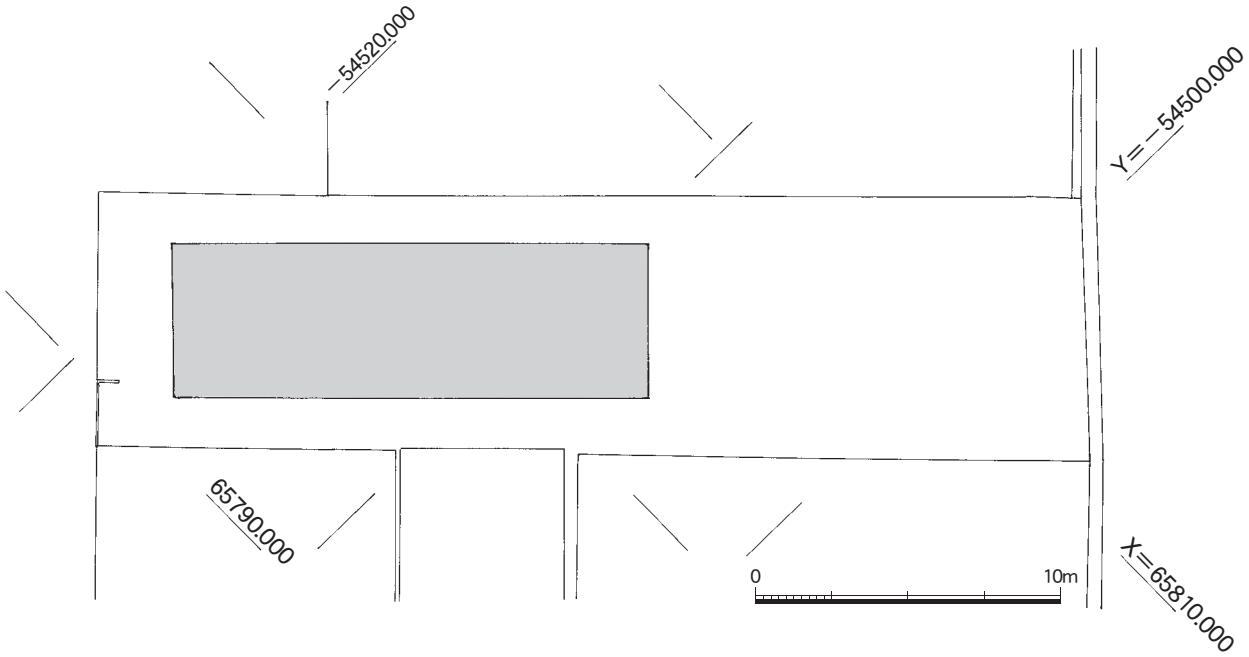


Fig.3　調査区現況図（1/250）（日本測地系の座標値）

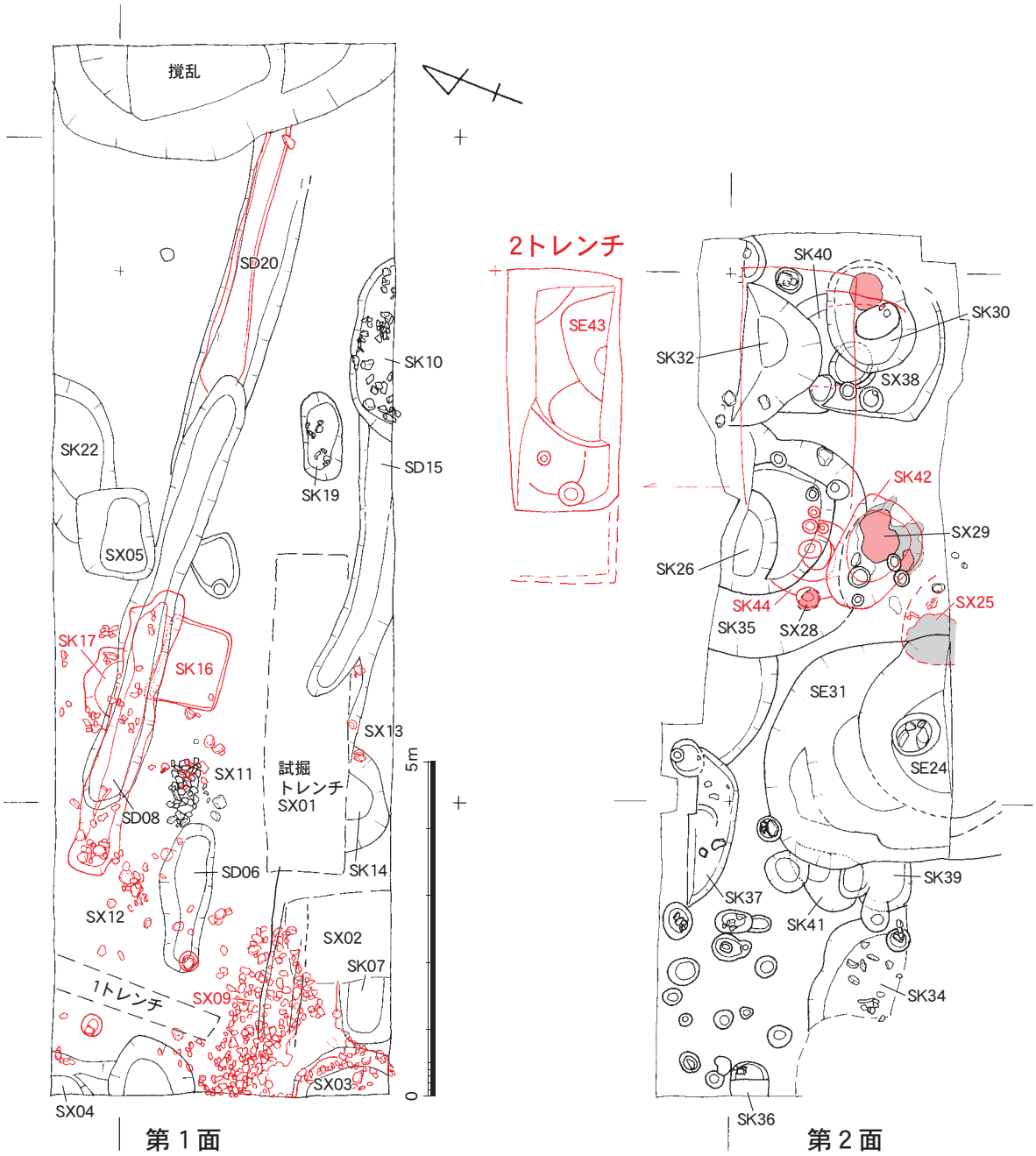


Fig.4　遺構全体図（1/100）

口径 11.0 ～ 13.6cm、器高 2.2 ～ 3.4cmを測る。いずれも調整は体部回転ナデ、外底部は糸切りである。**34・35** は中国産磁器。**34** は白磁皿Ⅶ－ 1b 類 1/7 片。復元口径 10.0cm、器高 2.5cmを測る。内底見込みに沈圏線とヘラ片切り文様がある。灰オリーブ釉がかかる。**35** は龍泉窯系青磁碗 1/6 片。復元口径 13.6cmを測る。体部外面ヘラ切りの雷文が巡る。内外面オリーブ灰釉が厚めにかかる。**36** は瓦質土器鉢底部。底径 11.0cmを測る。内外面の調整はハケ目、外底部ナデ。内外面無釉である。**37** は褐釉陶器甕口縁 1/5 片。復元口径 21.0cmを測る。内外面施釉であるが、口縁部表面釉が剥げ、重ね焼きの痕跡がある。**38** は素焼の陶器と思われる鉢底部 1/2 片。器壁は傷みがひどい。遺構の時期は出土物から 14 ～ 15 世紀と考える。

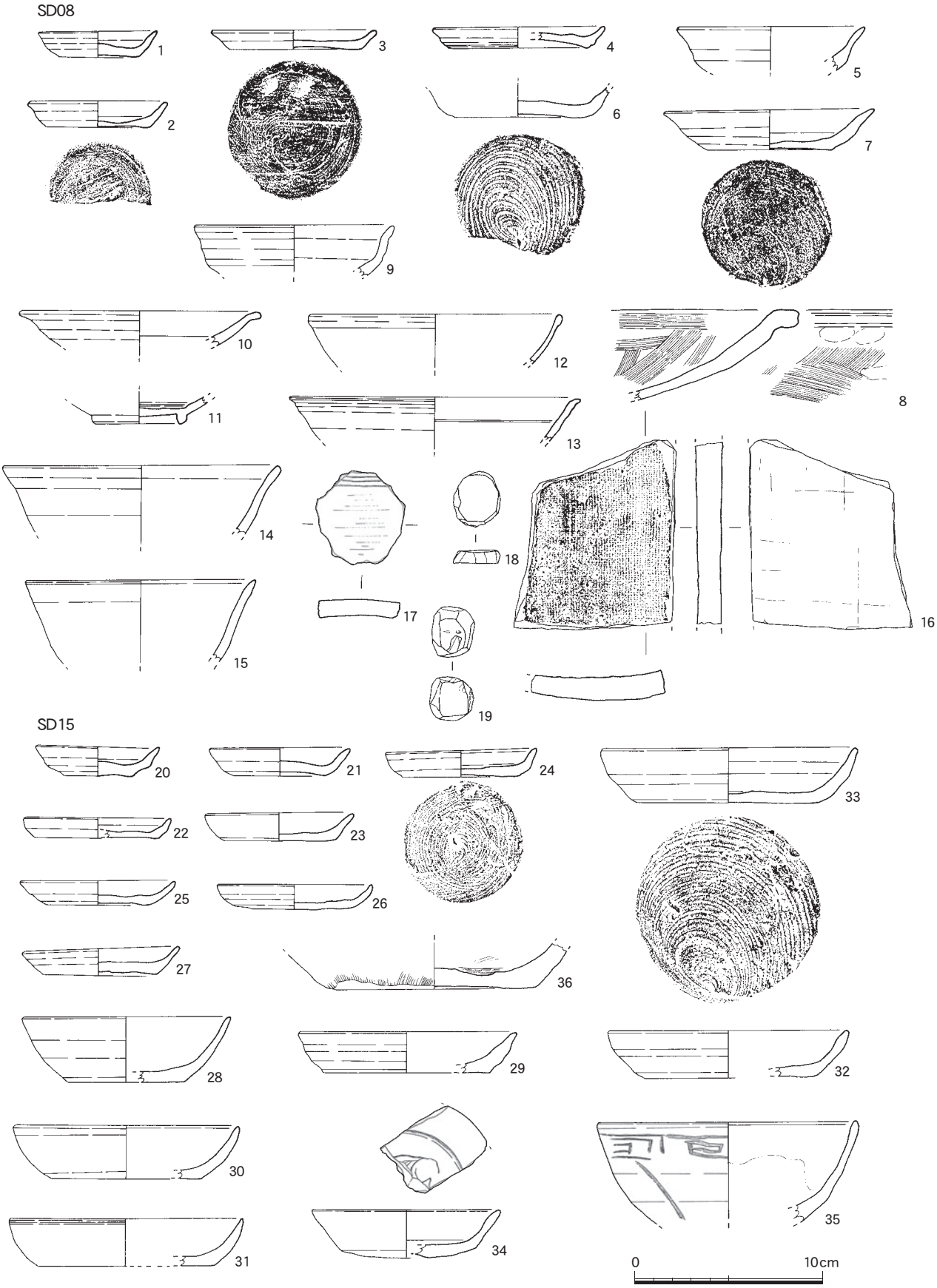


Fig.5　SD08・15 出土遺物（1/3）

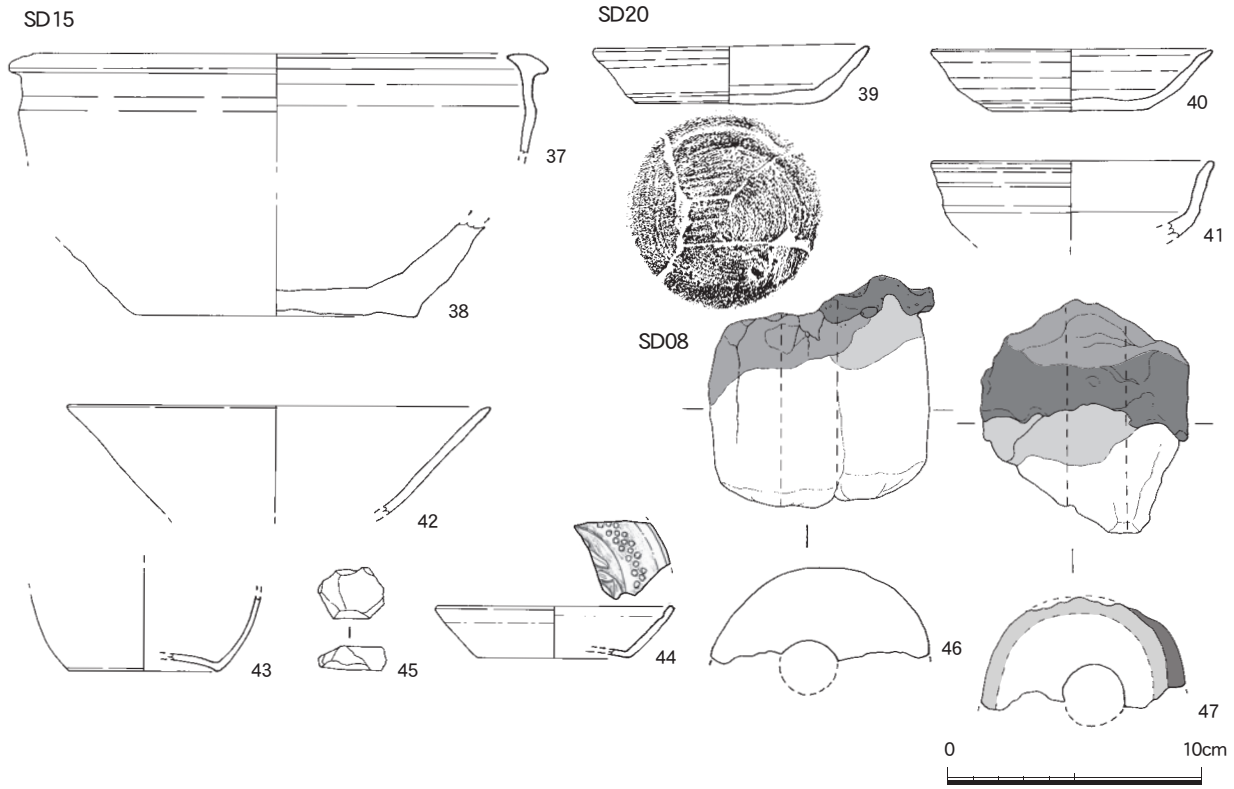


Fig.6　SD08・15・20 出土遺物（1/3）

②　土坑

SK07（Fig. 8）

調査区南西隅、攪乱土坑SX02に切られる長方形土坑。残存長0.95m、幅0.6m、深さ10cmである。

出土遺物　中世の土師器･中国産青磁、鉄滓、動物骨などが出土。煉瓦片など近代遺物が混入する。**48・49**は土師器小皿。1/4片・1/2片弱で、口径7.0cm・9.6cm、器高1.8cm・2.5cmを測る。調整は体部回転ナデ、外底部回転糸切り。中世末から近世初にかけての時期のものか。**49**は内外面黒化する部分があり、灯明皿に使われた可能性がある。

SK10（Fig. 7・8）

調査区南壁で検出した土坑。一部で全容は不明であるが､平面は弧状を呈す。確認規模は最大長2.73m、深さ0.62mを測る。底面はほぼ水平である。埋土は上面で、明褐色砂で硬く締まり、埋土は骨片混じりで焼けた割石などが多く入っていた。

出土遺物　中世の土師器・瓦質土器・瓦器・中国産陶磁器・瓦類、鉄釘や骨、炭化物・焼土塊などが出土。近世の国産陶磁器も2片出土しているが、混入と思われる。**50** ～ **53**は土師器。**50･51**は小皿。いずれも1/3片で復元口径9.0cm、器高1.5cm･1.7cmを測る。体部調整は回転ナデ、外底部糸切りである。**52･53**は坏。2/3片と1/6片。復元口径12.2cm･12.8cm、器高2.7cm･2.5cmを測る。体部の調整は回転ナデ、外底部回転糸切り。**54**は白磁碗底部。底径7.2cmを測る。内面輪状の釉掻き取り、外底は露胎で高台はスリ。淡黄色釉がかかるが、焼成は不良。**55・56**は瓦玉。**55**は白磁碗Ⅴ類の底部片の縁辺を打欠いて再利用したもの。6.7×6.5cmを測る。光沢を持つ灰白色の透明釉がかかる。**56**は須恵器片を打欠いて再利用したもの。2.6×2.3cmを測る。表面には叩き痕が残る。以上の遺物から遺構の時期は15世紀頃と考える。

SK14（Fig. 8）

調査区南西際で、表土除去したレベルより10cm程下げた面で検出した。試掘トレンチSX01に切ら

れる半円形の土坑で、長軸径1.6m、短軸径0.6m、深さ0.4mを測る。

出土遺物　中世の土師器・須恵器・中国産輸入陶磁器、朝鮮陶器・瓦、鉄釘などが破片で出土した。**57**は土師器坏。底部片で口縁部が一部残る。復元口径11.7㎝、器高2.8㎝を測る。調整は器壁は摩滅するが、体部回転ナデ、外底部は回転糸切りで、雑な仕上げ。**58**は瓦器椀底部1/4片。復元底径6.3㎝を測る。調整は丁寧なナデ。**59**は須恵器擂鉢口縁部小片。東播系のもの。**60**は白磁碗。Ⅷ－Ⅰ類の底部2/3片で釉色はやや緑味をおびる。底径は6.1㎝を測る。見込みは段が付き、輪状に釉を掻き取り、重ね焼きの粘土塊が付着する。外面体部下半から高台部は露胎でケズリ、畳付き付近は粘土が付着する。灰オリーブ釉がかかるが、発色は悪く、素地は明赤褐色に発色する。以上の遺物から遺構の時期は14～15世紀と考える。

SK16（Fig. 7・8）

調査区中央、SD08に切られる長方形の土坑。長軸長1.27m、短軸幅1.07m、深さ0.25mを測る。壁面はほぼ直立する。埋土は暗灰黄色粗砂混じり土で、底面は鉄分が沈着し硬く締まる。

出土遺物　中世の土師器の坏・小皿、中国産青磁・白磁などの輸入陶磁器、鉄滓、焼けた礫石、骨片などが出土。**61**～**63**は土師器の皿か。**61**・**62**はいずれも1/3片で、体部が底部よりまっすぐ開く形態。口径10.8㎝・11.0㎝、器高2.6㎝・2.5㎝を測る。**61**は口縁内面に段が付く。**63**は底部片。底径6.6㎝を測る。いずれも調整は体部回転ナデ、外底部は回転糸切り。

SK17出土遺物（Fig. 8）

調査区中央部で検出した平面形が半円形の土坑。SD08に切られる。

出土遺物　中世の土師器・須恵器、瓦器、中国産白磁・青磁、滑石製品などが出土したが、図示出来たものは少ない。**64**は土師器小皿。1/3片で、復元口径8.0㎝、器高1.1㎝を測る。体部の調整は回転ナデ。

SK19（Fig. 7・8、PL. 5－2）

調査区南東側で検出した隅丸長方形を呈す土坑。長軸長1.29m、短軸幅5.7m、深さ0.46mを測る。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土で暗灰黄色砂ブロック混入、下層は暗灰黄色砂質土である。埋土内には礫石を含んでいた。

出土遺物　中世の土師器・瓦器、中国産白磁・青磁、瓦、鉄滓などが出土。**65**～**67**は土師器小皿。**65**は1/4片、**66**は4/5片・**67**は1/3片で、復元口径6.2㎝・6.6㎝・7.4㎝、器高は**66**が1.4㎝、他は1.3㎝を測る。調整は体部回転ナデで、底部は糸切り。**68**は龍泉窯系青磁の浅形碗底部か。明緑灰色釉がかかるが、高台部は露胎。見込み片彫り文か。

SK22（Fig. 8、PL. 5－3）

調査区北側攪乱SX05に切られる不整楕円形を呈する土坑。一部調査区外にかかり全容は不明。確認長2.6m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。

出土遺物　中世の土師器、中国産陶磁器、朝鮮陶器などが出土。**69**は土師器小皿1/3片。復元口径6.6㎝、器高1.3㎝を測る。**70**は土師器の小型の坏か。1/5片で復元口径10.8㎝、器高2.6㎝を測る。**69**・**70**の調整は体部回転ナデ、底部は糸切りである。**71**は土師質の擂鉢か捏鉢。1/9片で復元口径32.0㎝、器高11.5㎝を測る。口縁部には注口が付く。内面は表面の剥落が著しい。胎土は4㎜以下の石英・長石粒子を多く含む。**72**・**73**は瓦質土器の足鍋などの口縁部小片。調整はヨコナデ。色調はオリーブ黒から灰色を呈す。**74**は瓦質土器の火舎か。外面突帯があり、同心円の連続スタンプが続く。内外面ナデ。**75**～**79**は白磁。**75**はⅨ類2/3片。復元口径11.0㎝、器高3.0㎝を測る。見込みに浅い沈圏線が巡る。外底部は低い高台が付き、口縁部は二重に釉かけするが、高台部は露胎。**76**・**77**は皿か碗の口縁部小片。**78**・**79**は底部。いずれも碗の底部か。**78**は低い高台を持つ。底径6.2㎝を測る。高台部以外は施釉。

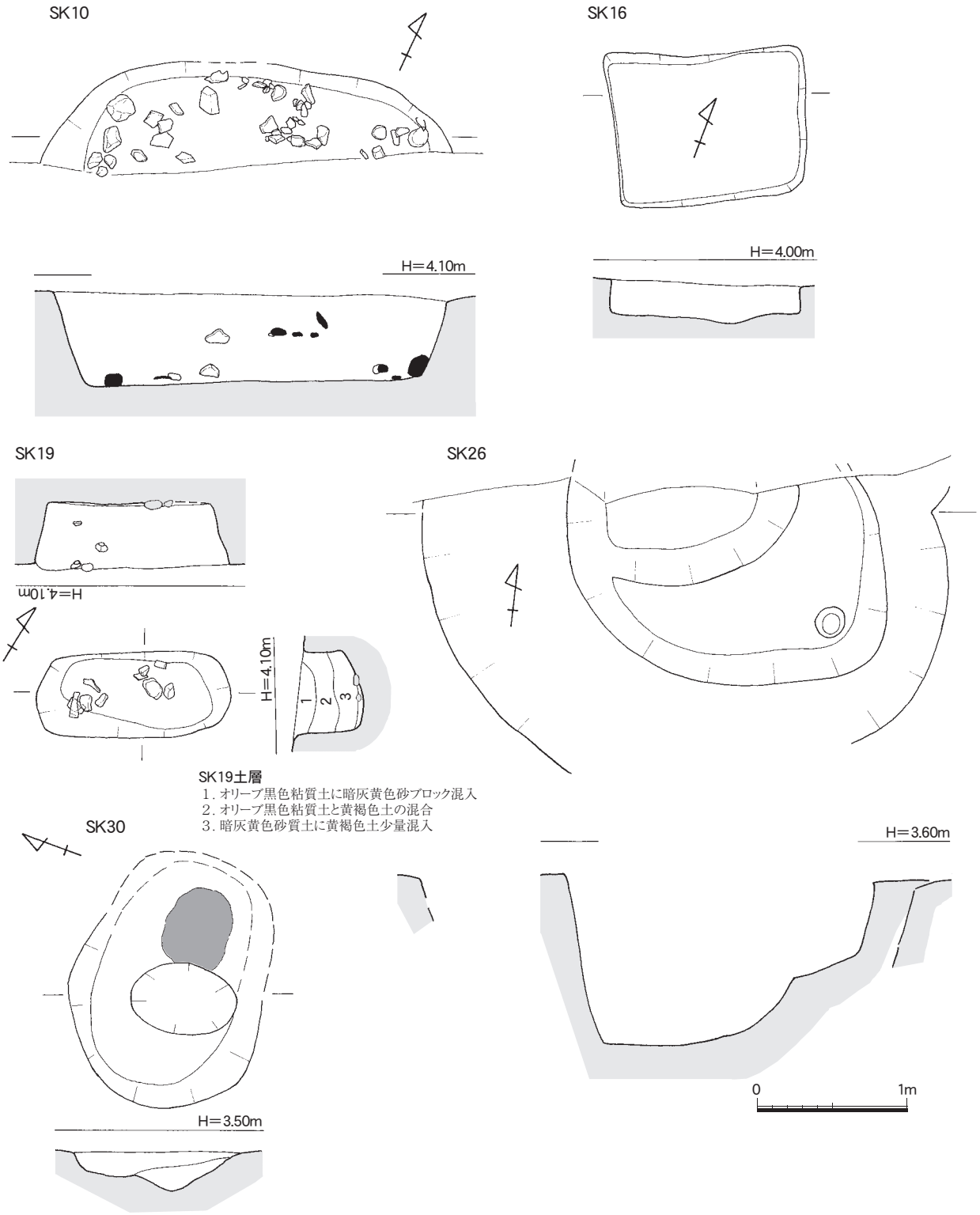


Fig.7　SK10・16・19・26・30（1/40）

79はⅡ類碗か。1/2片で復元底径5.6cmを測る。高台部内は露胎。**80**は龍泉窯系青磁の皿小片。口縁部は輪花状を呈す。見込みヘラ彫りの文様がある。**81**～**85**は陶器。**81**は中国産陶器壺の口縁部。口径9.6cmを測る。黄褐色～明黄褐色釉が内外面かかる。**82**は小碗か。1/3片で復元口径12.0cmを測る。外面鋭い工具で、切り込みが入る。薄い器壁で灰白色釉がかかる。時期は新しいか。**83**は褐釉陶器の甕口

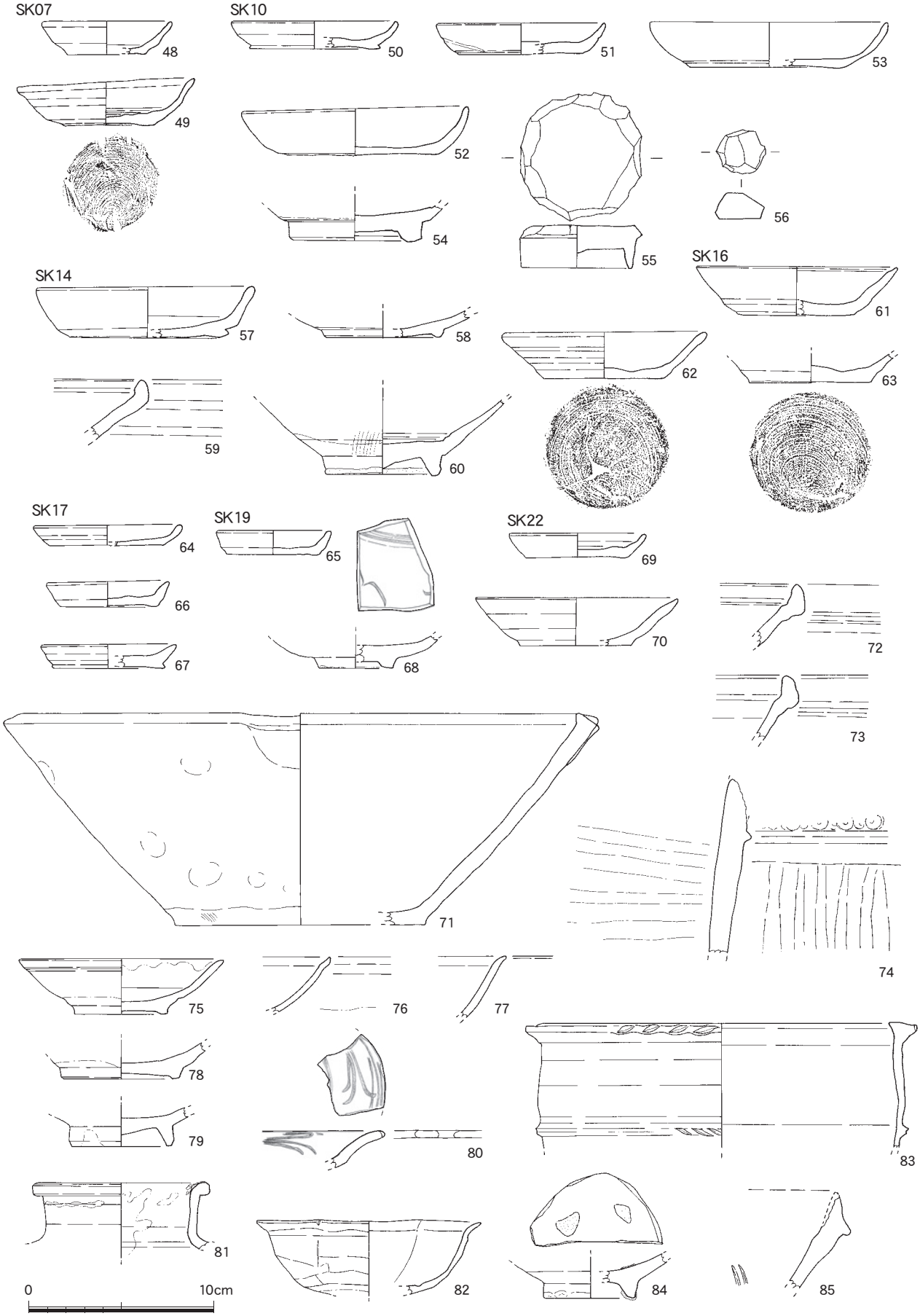


Fig.8　各土坑出土遺物（1/3）

縁部。1/6片で、復元口径21.0cmを測る。胴部に一条の突帯が巡り、口縁と突帯には刻目が付く。内外面暗褐色釉がかかる。**84**は朝鮮王朝の碗底部。1/2片で、復元底径4.8cmを測る。見込み重ね焼き粘土目跡が2個所残る。内外面黄灰色釉がかかる。**85**は備前焼擂鉢小片。擂鉢のⅣ類のもの。暗赤褐色釉がかかる。以上の遺物から遺構時期は15 ～ 16世紀と考える。

③　その他の遺構

SX09鉄滓廃棄遺構（Fig. 9 ～ 11・31、PL. 4 －2 ～ 5, 7 － 3）

調査区南西隅で検出した。確認範囲は2.6×2.7mである。この範囲に多量の鉄滓と焼けた礫石・焼土などが廃棄されていた。鉄滓は南側で溶融し平面的に広い範囲に固まっており、南側隣接地に製鉄・鍛冶施設の存在が予想される。北側はSD15の中に鉄滓・礫石が流れ込んでいる。またこの遺構の下でSK34を確認した。

出土遺物　中世の土師器・瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器、鉄滓、フイゴ羽口、割石・銅銭、動物骨などが多量に出土した。**86** ～ **96**は土師器。**86** ～ **88**は小皿。いずれも1/2片、口縁1/2欠、口縁一部欠である。口径6.4cm・7.0cm・8.2cm、器高1.6cm・1.6cm・1.4cmを測る。**89** ～ **91**は坏。1/2片・1/3片・口縁1/3欠。口径は**89**・**91**が12.6cm、**90**は11.4cm、器高2.7cm・2.4cm・3.3cmを測る。**86** ～ **91**の調整は体部回転ナデ、外底部糸切り。**92**は蓋1/6片で、復元受部径14.7cmを測る。調整はナデ。**93**・**94**は鍋口縁部片。**93**は1/4片で、復元口径30.4cmを測る。口縁が僅かに外折する形態で、内外面細かいハケ目を施す。外面使用によるススが付着する。**94**は口縁部に断面三角の突帯が付く。調整は外面ナデ、内面はハケ目のちナデ。外面は使用によるススが付着する。**95**は土師質の片口の擂鉢。口縁2/3片ほどの破片があるが接合しない。復元口径34.2cmを測る。調整は外面ナデであるがピンホール状の小孔が多数体部下半に入る。内面使用による摩滅で傷むが、タテ櫛目が２条入残る。胎土は2 ～ 3mm大の石英･長石粒子多く混入。**96**も土師質の湯釜。上半1/6片で、口径16.0cmを測る。体部上半には耳が付く。外面は使用による傷みがひどくススが付着し、内面は口縁部ヨコハケ目で、体部はナデ。胎土は石英･長石粒を僅かに含む程度で比較的精良。**97**・**98**は瓦質土器火舎。**97**は底部1/10片。復元底径34.0cmを測る。外面下半に１条の小さな突帯が巡る。調整は外面傷みがひどく不明であるが、内面は斜めハケ目で使用によるものかススが付着する。**98**は口縁部近くの小片。外面二条の突帯の間に渦巻き状の連続するスタンプ文が付く。内面ハケ目。**99** ～ **101**は中国産磁器。**99**・**100**は白磁。**99**は高台が付く皿底部1/3片。復元底径4.4cmを測る。外底部以外は施釉。**100**は碗Ⅳ－1a類。口縁部片で復元口径16.2cmを測る。**101**・**102**は青磁。**101**は龍泉窯系青磁碗。口縁部1/6片で、復元口径14.6cmを測る。外面鎬蓮弁である。灰緑色釉が厚めにかかる。**102**は碗底部。底径6.8cmを測る。高台部釉の掻き取り。**103**・**104**は陶器。**103**は鉢Ⅰ－2類で、口縁部内面に２条の突起が巡る。調整はナデ。**104**は甕か壺の底部。1/6片で復元底部径16.0cmを測る。底部は上げ底気味。外面褐灰色釉が垂れ、内面ナデ。**105**・**106**は朝鮮王朝のもの。**105**は粉青沙器碗。1/2弱片で復元口径14.0cm、最大高6.2cmを測る。体部外面に白粘土による象嵌で圏線と縄簾文、内面は６条の圏線状に白化粧土が施され、その上にオリーブ褐色釉が上掛けされる。焼きが不良なのか釉の発色は不良。**106**は鉄絵碗底部1/2片。高台部は露胎であるが、見込みには鉄絵の上にくすんだ乳白色釉がかかり貫入が入る。**107**は備前陶器。備前擂鉢Ⅳ期で1/4弱残る。内面9条の櫛目が入る。色調は淡赤橙色を呈す。**108**は軒平瓦瓦当片。瓦当文様は唐草の一部が残る。調整はナデ。**109** ～ **112**はフイゴ羽口先端部片。復元で径7.5 ～ 9.5cm、孔径2.1 ～ 2.9cmを測る。いずれも先端部は高熱により変色し、熱黒～黒褐色色のガラス質化し溶融している。**113**は土製の紡錘車。僅かに欠けるがほぼ完存。紡錘形を呈し、径4.5cm、高さ2.7cm、孔径0.8cm、重さ50.13ｇを測る。

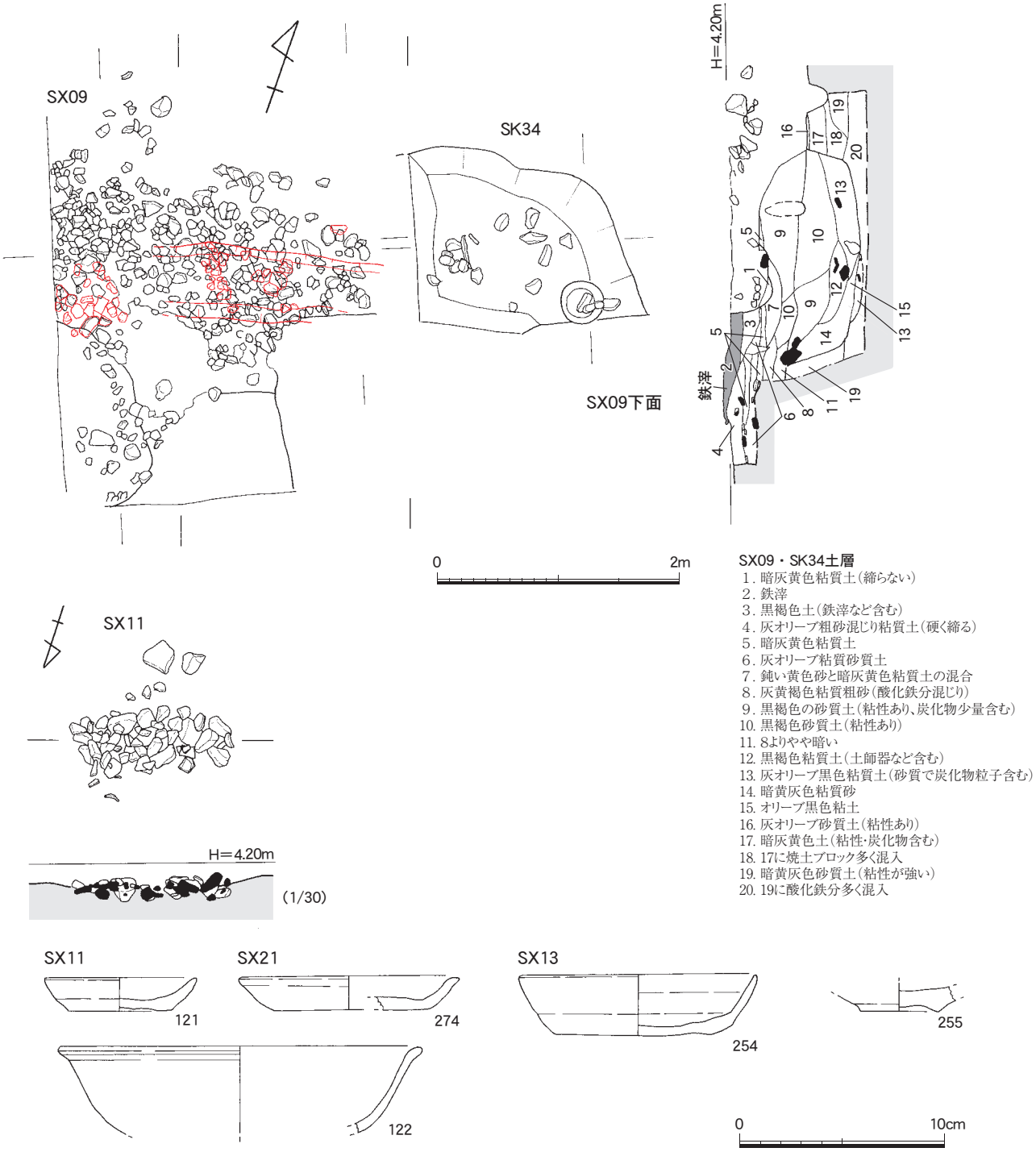


Fig.9　SX09・11、SK34 と SX11・13・21 出土遺物（1/30・1/50・1/3）

調整はナデ。**114** ～ **116**は瓦玉。**114**・**116**は土器類、**115**は瓦片を再利用したもの。側面は打欠き後、磨りを加える。長径2.5 ～ 3.2cm、厚さ1.5 ～ 1.9cmを測る。**117**は土製の管状土錘。一部欠くが長さ2.8cm、径1.2cm、孔径4.5mmを測る。調整はナデ。**118** ～ **120**は椀型滓。法量は径15.9×15.7cm、15.2×10.9cm、11.6×10.2cm、最大高8.5cm、5.9cm、6.2cmを測る。**118**・**119**の表面には部分的に炭が付着する。以上の遺物から遺構の時期は16世紀頃と考える。

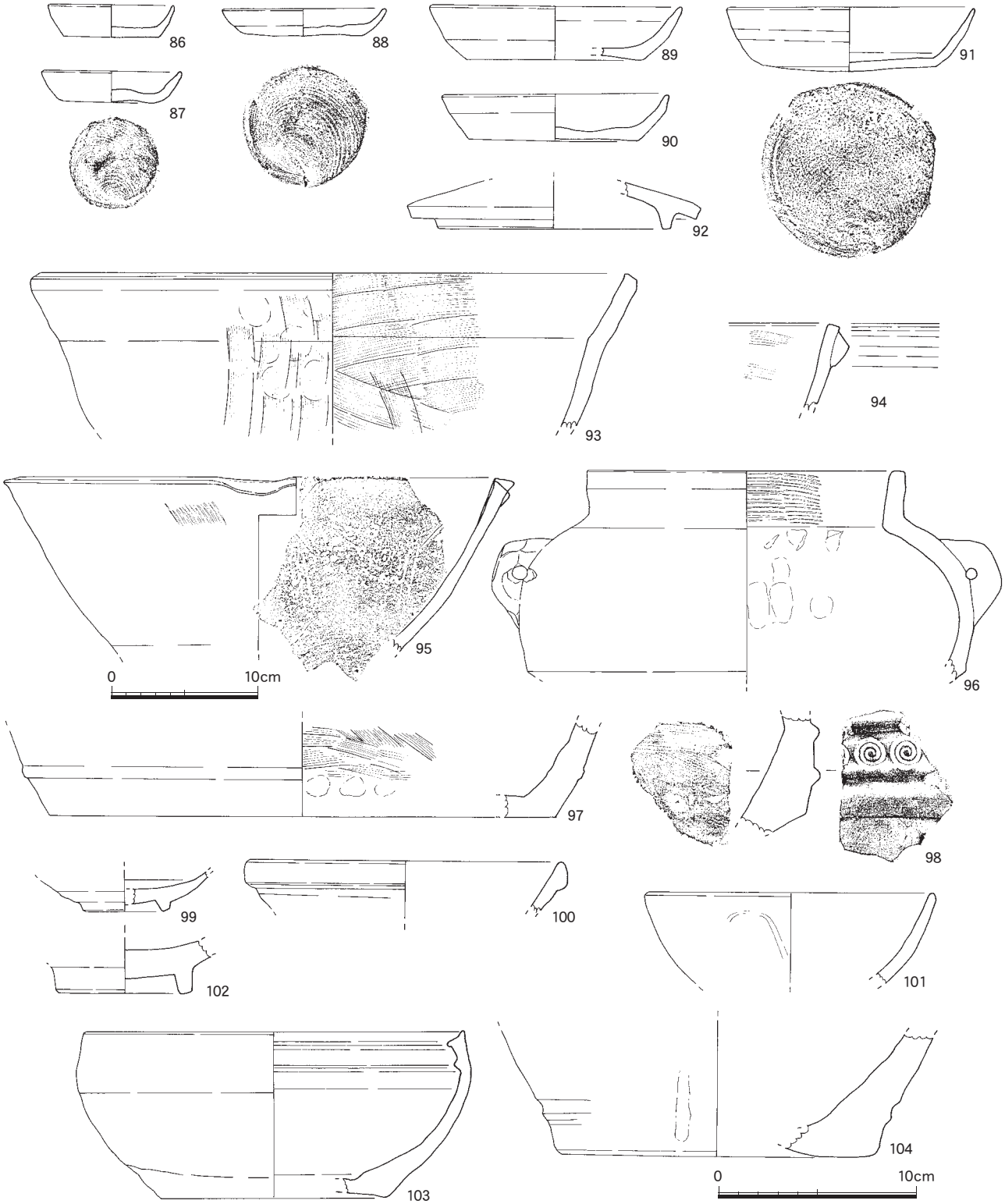


Fig.10　SX09 出土遺物 1 （1/3・1/4）

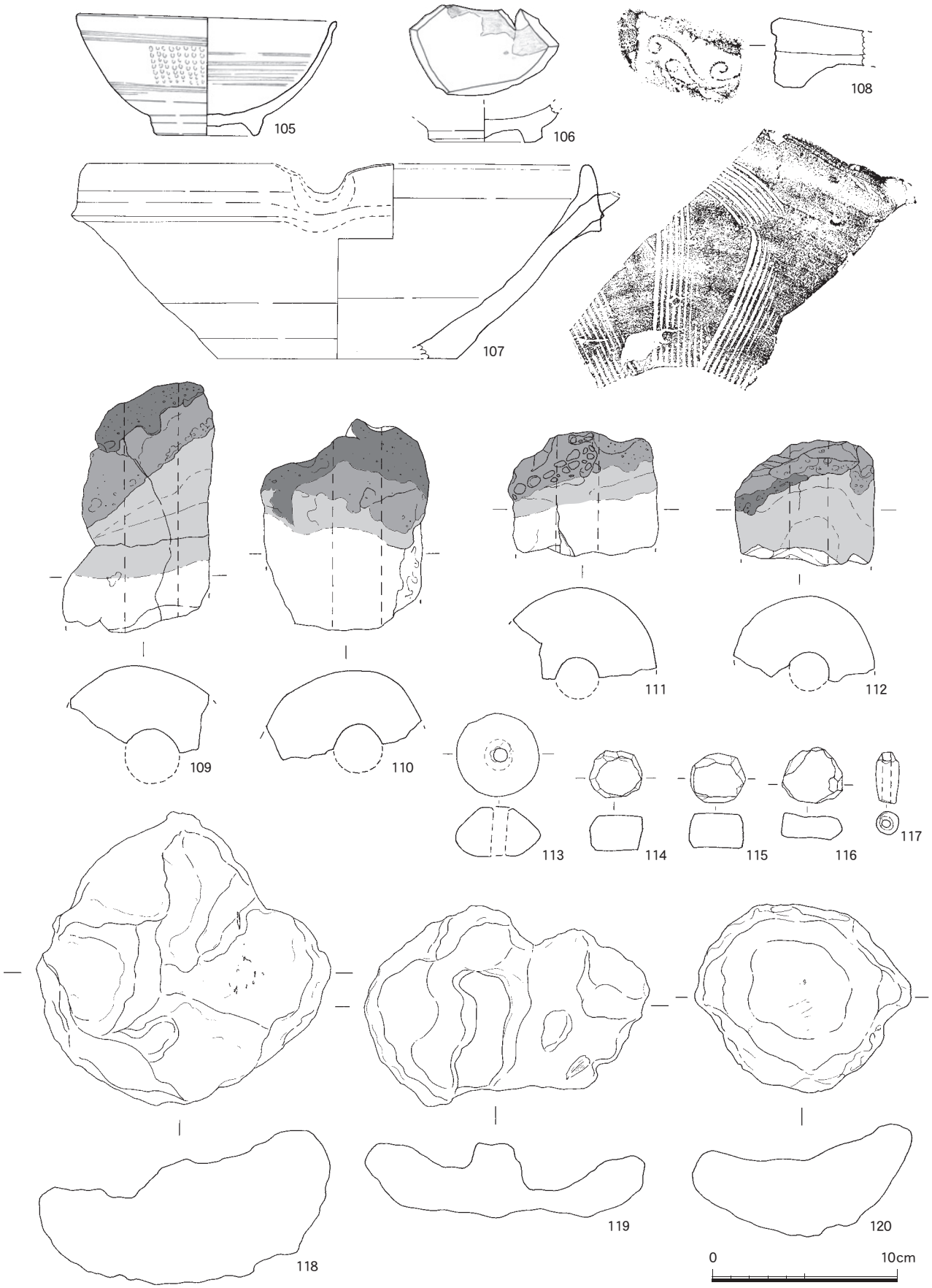


Fig.11　SX09 出土遺物 2（1/3）

SX11集石遺構（Fig. 9、PL. 5 －4）

調査区西側、黒灰色砂質土面で検出した礫群。明確な掘り込みは確認出来なかったが、自然礫・割石・焼石・焼土・炭化物を交えたまとまりで、周囲縁辺が揃い水平堆積であるため、遺構として考えた。礫石の集中する範囲は長軸長1.08m、短軸幅0.4mを測る。礫石は最大でも20cmである。

出土遺物　中世の土師器、中国産陶磁器、瓦玉が少量出土。**121**は土師器小皿。1/3片で復元口径7.4cmを測る。調整は体部回転ナデ、外底部糸切り。**122**は龍泉窯系青磁坏Ⅲ－2類。1/8片で復元口径17.6cmを測る。内外面緑灰色を呈す釉がかかる。

④　第１面遺構面出土遺物（Fig.12・31、PL. 7 － 3）

第１面とした遺構面で出土した遺物。**123** ～ **132**は土師器。**123** ～ **127**は小皿。**123**は僅かに欠損、**124**は完形、**125**は1/2弱、**126**は底部で口縁が一部残る、**127**は1/3片。口径6.8 ～ 7.4cm、器高1.1 ～ 1.9cmを測る。**128** ～ **131**は坏。**128**は完形、**129**は1/2弱、**130**・**131**は1/3片。いずれも口径12.2 ～ 13.0cm、器高2.2 ～ 2.7cmを測る。小皿･坏とも調整は体部回転ナデ、外底部は糸切り。**132**は土師質の擂鉢口縁部片。外面細かい斜めハケ目、内面は3条のタテ櫛目が入る。**133**・**134**は瓦質土器。**133**は擂鉢1/2弱片で復元口径26.6cmを測る。外面荒れがひどく調整は不明。内面は使用により摩滅がひどいが4条の櫛目が入る。二次的に火を受け断面は赤みを帯びる。**134**は火舎か火鉢の口縁部小片。外面菊花のスタンプが付く。**135** ～ **140**は青磁。**135**は青磁輪花皿。1/6片で復元口径11.8cmを測る。灰緑色釉がかかり、表面気泡が

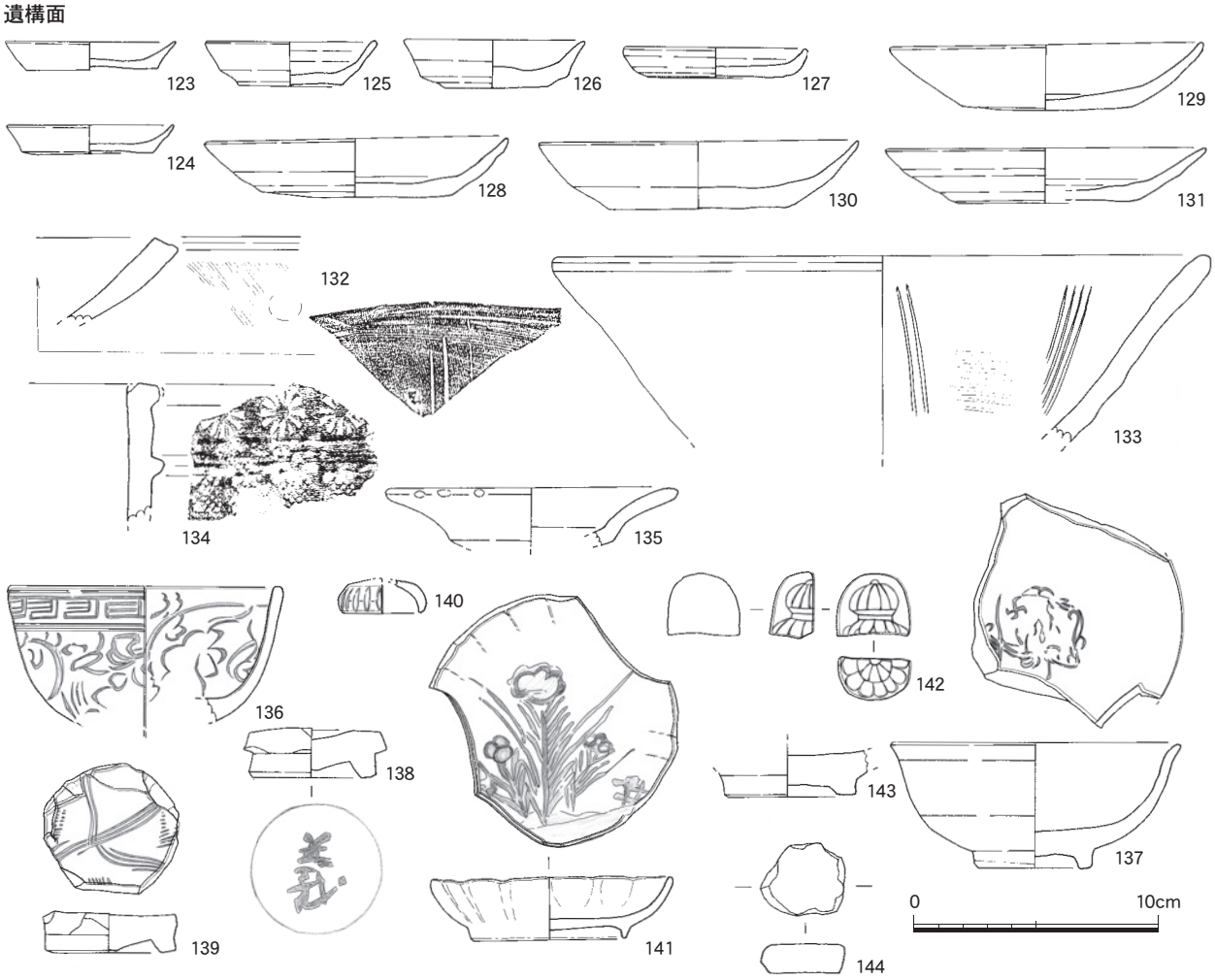


Fig.12　第１面出土遺物（1/3）

多く入る。**136・137**は碗。**136**は口縁1/3強片、**137**は口縁から底部1/2片。復元口径11.0cm・11.7cmを測る。**136**は灰緑色釉がかかり外面雷文帯とヘラ片切り花文、**137**は見込み花文と卍の線刻があり、高台部は露胎。**138・139**は底部。**138**は同安窯系青磁碗底部で、高台内は「義」と読める墨書がある。**139**は龍泉窯系青磁碗の底部。いずれも瓦玉の可能性が強い。**140**は青白磁合子蓋1/2片。復元口径3.6cmを測る。明青灰色釉が外面かかるが、内面は露胎。**141**は肥前磁器の染付輪花皿。見込み花文を呉須で描く。**142**は宝珠形摘みの須恵質の版型。摘みは蓮花状を呈す。外径2.9cm、高さ2.5cm、内径2.7cm、高さ2.0cmを測る。胎土は精良で、焼きは軽い。**143・144**は瓦玉。**143**は青磁碗底部利用。**144**は2.9×3.3cm、厚み1.2cmを測る。須恵質の平瓦片を再利用したもので、片面は縄目叩き、片面は布目痕がある。

⑤　整地面・包含層

SX12（Fig.13 ～ 16・31、PL. 7 － 3）

第１面下の包含層で、調査区北西側を中心とする。礫石や鉄滓、焼土・炭化物などが集中して出土した部分。明確な遺構の掘方は確認出来なかったので、包含層として遺物を取り上げた。遺物は当初深さごとに取り上げたが、深さで明瞭な区別はないので、種類ごとに報告する。

出土遺物　中世の土師器・中国産陶磁器、瓦質土器、国産陶器、古代土師器・須恵器、瓦玉、鉄滓、フイゴ羽口などが多量出土。時期としては16世紀までのものを含む。

145 ～ **182**は土師器。**145** ～ **165**は土師器小皿。**146・147・155・162・165**はほぼ完形か一部欠け、他は1/4 ～ 1/2片。口径6.4 ～ 9.2cm、器高1.0 ～ 1.8cmを測る。調整は体部回転ナデ、外底部糸切り。**145・146・162**は口縁部の一部にススが付着し黒く、灯明皿として使用されてものであろう。**166**は小型の土師器の底部。底径3.5cmを測る。外面ススが付着し灯明皿の可能性があるが、別の器形の可能性もある。硬質で焼きは良い。**167** ～ **180**は坏。残存率は**175**が口縁部一部欠以外、1/4片～ 3/4片である。口径11.0 ～ 16.4cm、器高2.5 ～ 3.6cmを測る。**167**の口径が一番小さく、**180**の口径が最大である。調整は、体部はいずれも回転ナデ、**179**以外外底部は糸切り。**179**は丸底でケズリ後ナデ。**181**は丸底の坏か椀口縁部1/8片。復元口径16.0cmを測る。体部内外面ナデでミガキを行う。**182** ～ **184**は鍋の口縁部片。**182**は浅底の形態。**183・184**は口縁部が体部より屈折して外に開く形態。**184**は1/8片で、復元口径45.2cmを測る。いずれも内面は細かいハケ目、外面は**182**はナデでハケ目を加えるが、**183・184**はナデ。**183・184**の外面はススが付着する。**185**は土師質で小型の火舎。口縁部1/8片で復元口径19.6cmを測る。口縁部外面直下に直径3cmの菊花スタンプを連続して加える。器壁は1.4cmと厚い、色調は外面明褐色、内面は灰褐色を呈す。胎土に石英・長石粒子を若干含む。焼成は良好。**186**は土師質の擂鉢口縁部小片。内面使用で荒れるが4条の櫛目が残る。**187**は黒色土器（瓦器）椀。口縁部1/6片で復元口径16.2cmを測る。外面ヨコヘラミガキで表面炭素が付着する。**188・189**は瓦質土器。**188**は方形の火舎片。口縁部は内面に直角に折れる。外面直下四方襷文を連続してスタンプする。**189**は湯釜口縁部か。1/6片で復元口径12.6cmを測る。調整は回転ナデ。**190・191**はフイゴ羽口。復元径8.8cm・8.5 ～ 9.0cm、孔径2.0cmを測る。先端部は使用により黒色のガラス質に溶融し、表面も灰黄褐色から明黄褐色に変色している。

192 ～ **237**は中国産磁器。**192** ～ **197**は白磁皿。**192・193**はⅢ－2類皿。**192・193**は1/3片。**192**は復元口径8.8cm、器高2.3cmを測る。**193**は復元口径9.9cm、器高2.1cmを測る。体部内面から口縁部にかけて明青灰色釉がかかるが、見込輪状の釉剥ぎと高台部は露胎。**194**はⅥ－1b類の底部。底径4.0cmを測る。外底部は露胎。**195**はⅨ－3類か。1/4片で復元口径10.1cm、器高2.9cmを測る。灰白色釉がかかるが、外底部は露胎。**196・197**は僅かに高台が付く皿。**196**は底部1/2弱片で、復元底径6.5cmを測る。灰白色釉がかかるが、高台内は露胎。見込み線彫り文様が入る。**197**は復元底径6.0cmを測る。見込み線彫りによる文

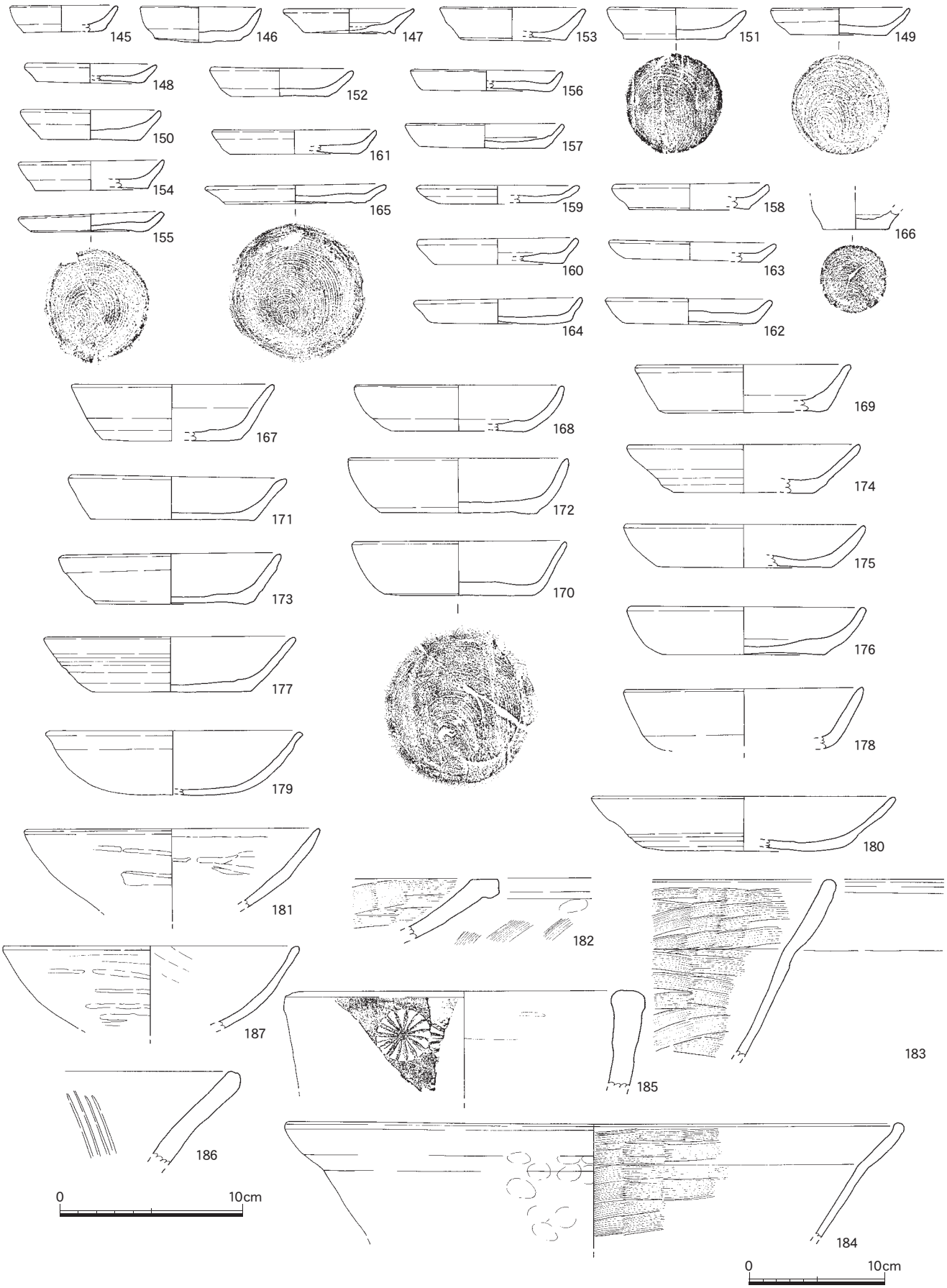


Fig.13　SX12 出土遺物 1 （1/3・1/4）

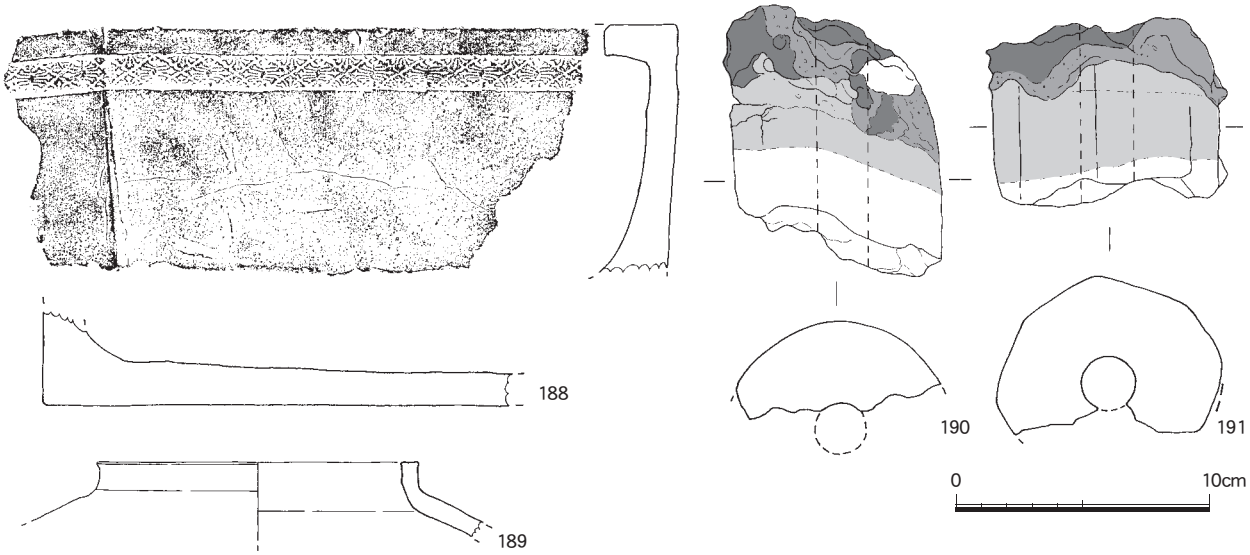


Fig.14　SX12 出土遺物２（1/3）

様が入る。**198** ～ **218**は白磁碗。**198**は小碗か。1/3片で復元口径9.2cmを測る。内外面灰白色の透明釉がかかる。**199**はⅧ－1類かⅧ－3類の口縁部1/6片。復元口径12.2cmを測る。釉は口剥げする。**200**はⅡ－1類。1/6片で復元口径15.0cmを測る。**201** ～ **203**はⅡ－5類。**201**は口縁1/4片、**202**は口縁部1/6欠、**203**は口縁破片と底部片から復元。口径15.0 ～ 15.4cm、器高5.6 ～ 6.0cmを測る。高台部以外施釉。**204** ～ **207**はⅣ－1a類。口縁部1/8 ～ 1/4片で、復元口径15.6 ～ 17.4cmを測る。**208**はⅤ－4a類、**209**はⅤ－4d類口縁部。1/10片・1/6片で復元口径16.2cm・16.4cmを測る。**210** ～ **218**は底部片。**210** ～ **213**はⅡ－1a類。底径5.6 ～ 5.9cmを測る。**213**は高台畳付に鉄漿を塗る。**214** ～ **217**はⅤ類。**214**は底径5.8cmを測る。**215** ～ **217**はⅤ－4a類。底径6.2 ～ 6.5cmを測る。**215**の高台内は花押と思われる墨書がある。**218**はⅣ－1a類。底径7.4cmを測る。**210** ～ **218**いずれも高台部は露胎。**219**は白磁鉢Ⅱ－1類の底部か。1/3欠で復元底径8.4cmを測る。全面施釉。**220** ～ **224**は青磁皿。**220**・**221**は龍泉窯系青磁皿。いずれもⅠ－1a類。**220**は1/6片で復元口径10.8cmを測る。内面1条の圏沈線が巡る。**221**は底径3.9cm。露胎の底部に「十」の墨書がある。**222**は中型の皿でⅣ類か。1/6片で復元口径14.2cmを測る。内面ヘラ切り文様がある。**223**は龍泉窯系青磁浅形碗1/8片。復元口径12.2cmを測る。**224**は高台部の形態から同安窯系碗か。底径5.0cmを測る。瓦玉か。**225**は平底の1/2片。底径4.1cmを測る。見込みは櫛描き文様。**226**は龍泉窯系青磁の鎬蓮弁の坏1/8片。復元口径12.4cmを測る。明緑灰色釉がかかる。**227**は束口碗1/2片。復元口径12.4cmを測る。**228**は龍泉窯系青磁鎬蓮弁碗。1/5片で復元口径15.0cmを測る。15世紀後半～ 16世紀にかけてのもの。**229**・**230**は同安窯系青磁碗。**229**はⅢ－2類か。1/8弱片で、復元口径18.0cmを測る。体外面粗いタテ櫛目文を入れる。**230**はⅠ－1b類。1/2片で復元口径16.4cmを測る。体外面タテ櫛目文、内面は櫛によるジグザグの点描文を入れる。**231**は碗底部。底径6.0cmを測る。見込みに「福」字の陽刻のスタンプが入る。**232**・**233**は同安窯系青磁碗底部。**232**はⅠ－1b類。1/2片で復元底径5.0cmを測る。外面タテの櫛目文、内面輪状の釉掻き取りと櫛描き文を入れる。**233**はⅢ－2類。底径6.2cmを測る。体外面タテ櫛描き文、見込みは輪状に釉を掻き取る。いずれも高台は露胎。**234**は龍泉窯系青磁碗底部。底径5.0cmを測る。見込みは輪状の釉掻き取り？。**235** ～ **237**は青白磁。**235**は碗。1/6片で復元口径11.0cmを測る。明青灰色釉がかかる。**236**は碗か皿の口縁部1/8片。復元口径14.2cmを測る。無文で薄手の作り。**237**は合子身。1/4片で復元口径6.0cmを測る。外面櫛描並行文が入る。**238**は中国産白磁四耳壺。Ⅲ－2類。頸部径12.2cmを測る。体部内面は露胎。**239**は中世須恵器甕頸部片。外面ヘラ描き文様がある。色調は暗青灰色を呈す。**240** ～ **242**は

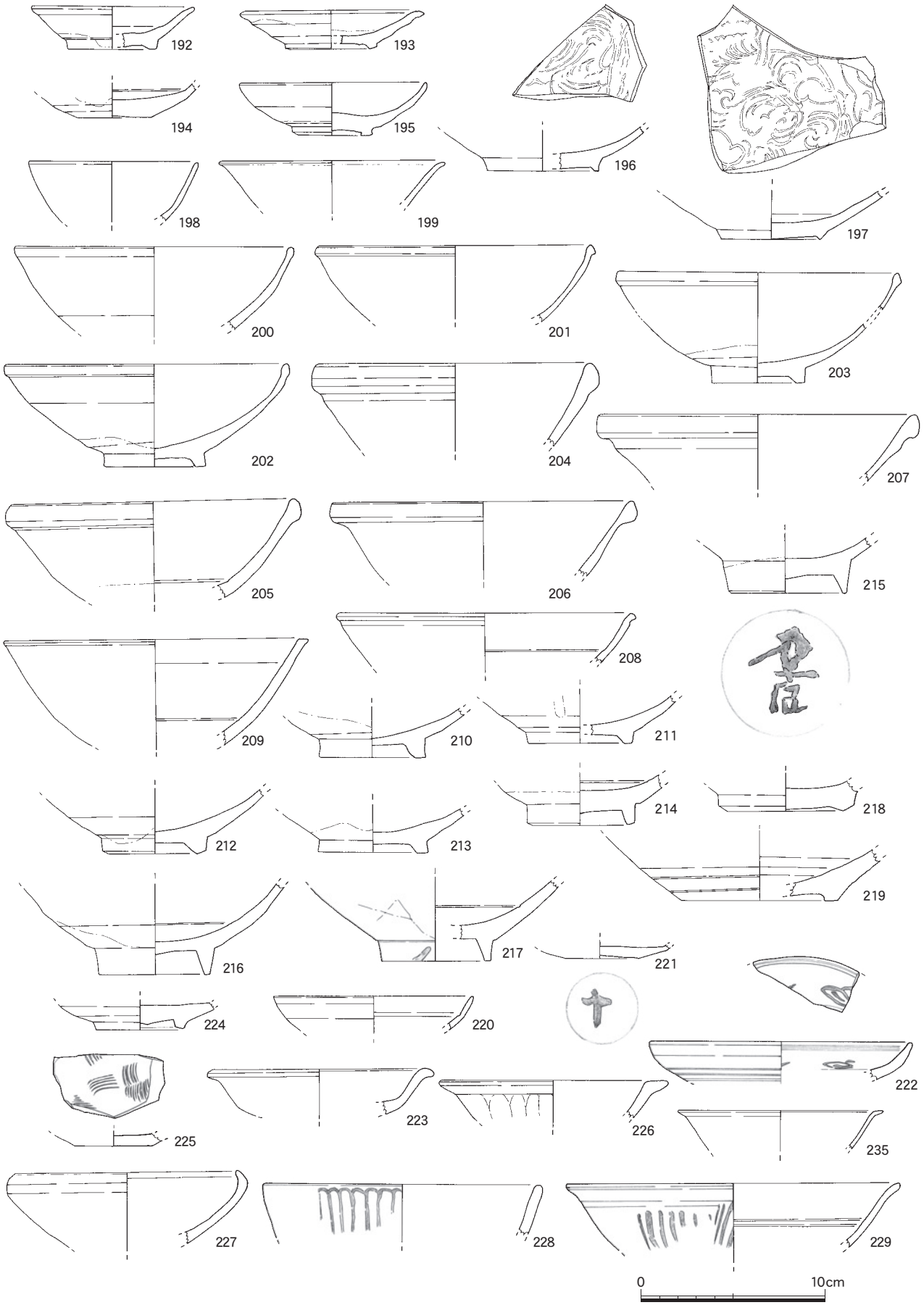


Fig.15　SX12 出土遺物 3 （1/3）

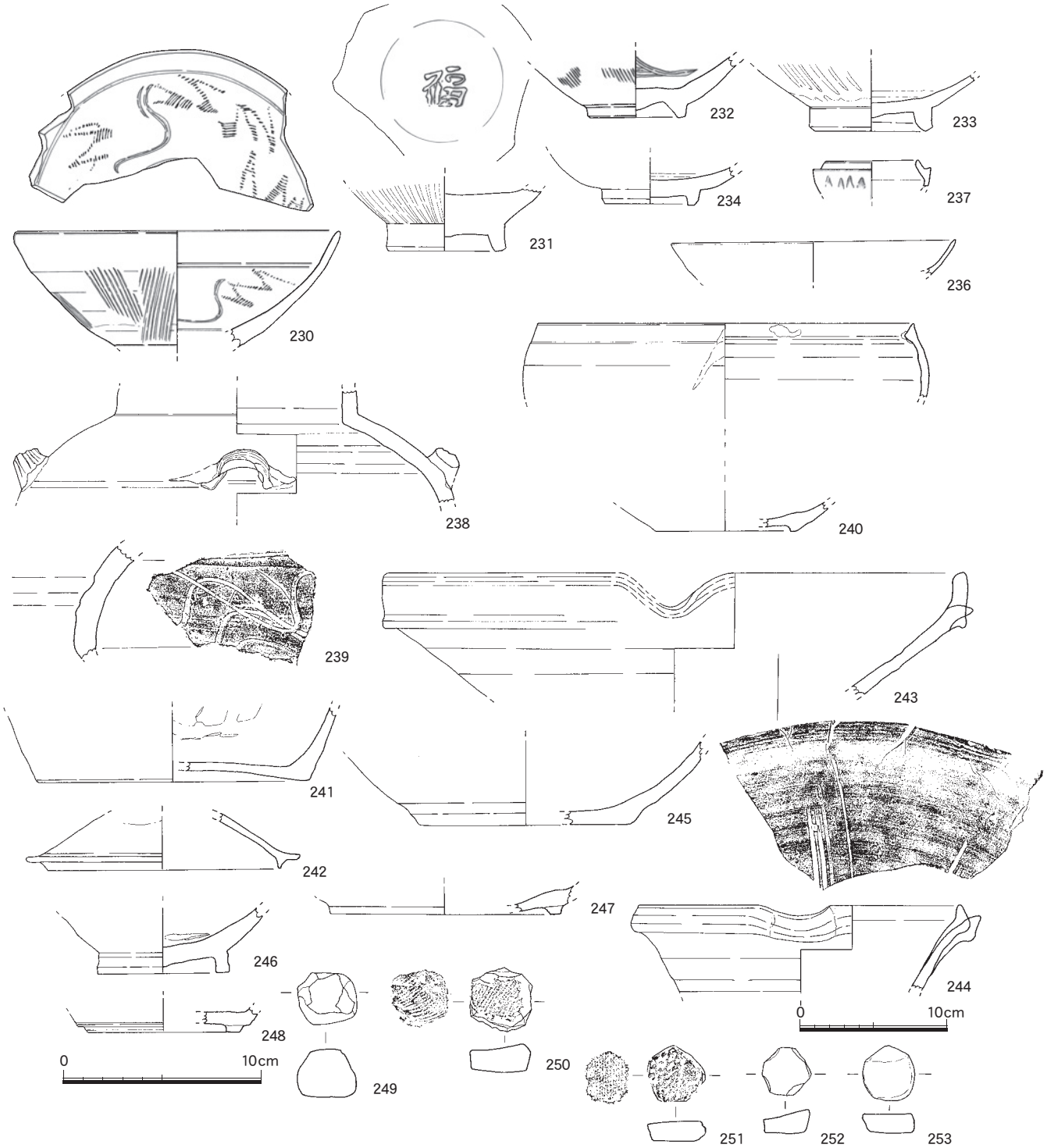


Fig.16　SX12 出土遺物 4 （1/3・1/4）

中国産陶器。**240**は鉢Ⅲ－1類の口縁部と底部。破片より復元。口径25.2㎝、器高14㎝を測る。内外面施釉。**241**は小盤Ⅱ－1a類底部1/3片。復元底径13.8㎝を測る。内外面施釉、外底部粘土目跡が残る。**242**は蓋1/5片。受部径15.8㎝を測る。頂部外面一部に施釉。磁灯窯系の蓋か。**243** ～ **245**は鉢。**243**は国産陶器の備前焼。Ⅳ期擂鉢口縁部1/6片。復元口径39.0㎝を測る。色調赤灰色を呈す。**244**は東播系須恵器の擂鉢。口縁部1/2片で、復元口径21.6㎝を測る。内面使用で摩耗する。**245**は底部1/4片。色調は赤褐色を呈す。**246**は初期高麗青磁底部1/2弱片。底径6.6㎝を測る。見込みと高台畳付に目跡粘土が残る。11世紀後半

～ 12世紀前半のもの。**247･248**は須恵器坏。1/4片で、復元高台径11.8cm･8.0cmを測る。8世後半のもの。**249** ～ **253**は瓦玉。**249**・**251**は瓦片、**250**・**252**は瓦質土器片、**253**は土器片を再利用したもの。法量は2×3cm程の大きさに収まる。

SX13出土遺物（Fig.9）

調査区南側、SK14とSD15に挟まれた部分で検出した。黄褐色砂と灰白色細砂の互層で整地面と考えた。中世の土師器・須恵器、瓦質土器、中国産陶磁器などが出土した。**254**は土師器の坏。口縁部一部欠損。復元口径11.6cm、器高3.0cmを測る。体部ナデ調整で、外底部糸切り。**255**は朝鮮王朝の青磁皿1/2片。高台部重ね焼き目跡粘土がある。

⑥　試掘トレンチ・攪乱出土遺物

SX01トレンチ出土遺物（Fig.17）

256 ～ **260**土師器。**256**は小皿1/2片。口径7.2cm。**257**・**258**は坏。1/5片・1/4片。口径12.8・14.9cm。**256**・**257**は外底部糸切り。**259**・**260**は土師質の鍋。いずれも口縁部片。**259**は口縁部1/2片。口径26.0cmを測る。**260**は小片。調整は外面ナデ、内面ヨコハケ目。外面ススが付着。**261**は鎬蓮弁の龍泉窯系青磁碗底部。見込みにスタンプ文あり。16世紀のもの。**262**は陶器瓶の底部。底径11.2cmを測る。外面黒褐色釉がかかる。外底部露胎で糸切り。**263**は朝鮮王朝陶器の甕胴部片。器壁内外面は叩きを加え、黒色釉がかかる。**264**は方形を呈す青磁香炉細片。**265**は龍泉窯系青磁碗底部を利用の瓦玉。直径4.0cm。底部は露胎。**266**・**267**はフイゴ羽口。直径8.2cm・8.3cm、孔径2.2cm・2.4cmを測る。先端は使用で溶融しガラス質化する。**268**は椀型滓。13.1×11.8cm、重さ650ｇを測る。

SX02攪乱出土遺物（Fig.17）　**269**は土師器小皿。口径5.8cmを測る。口縁部にススが付着する灯明皿である。**270**は同安窯系青磁皿Ⅰ－2b類底部片。**271**はお茶土瓶。体部に「ひろしま」と黒色で筆書きされている。**272**は無釉陶器。貯金箱で、体部に「大正二年四月六日柴田」の墨書がある。

SX03攪乱出土遺物（Fig.17）　**273**は龍泉窯系青磁碗底部であるが、瓦玉か。

SX21撹乱出土遺物（Fig.9）　**274**は土師器小皿。口径10.6cmを測る。

３．第２面の遺構

①　井戸

SE24（Fig.18 ～ 20、PL. ５－６・７，７－３，８）

調査区南壁にかかる井戸。SE31を切る。一部であるが上面平面形は半円形を呈す。安全上の配慮から完掘していない。確認規模は南壁部で2.9ｍを測る。上面より0.95ｍ下で楕円形状の井筒を確認した。井筒は上面で0.73×0.6ｍを測る。井筒内から焼けた割石などが多く出土した。投棄されたものであろう。

出土遺物　掘方を中心に中世土師器、瓦器、瓦質土器、中国産陶磁器、滑石製石鍋、瓦玉、鉄滓、釘、古代の土師器・須恵器などが多量出土。**275** ～ **281**は土師器。**275** ～ **278**は小皿。**276**は完形。他は1/3 ～ 4/5片。口径8.0 ～ 9.4cm、器高1.0 ～ 1.4cm。**279** ～ **281**は坏。1/5 ～ 1/2片で、口径12.6 ～ 16.8cm、器高2.6 ～ 2.9cmを測る。**275** ～ **281**は外底部糸切り。**281**は板状圧痕が残る。**282** ～ **289**は白磁碗。**282** ～ **288**はⅤ－4d類。**282･283**は1/6片。口径15.7cm･17.5cm。を測る、見込みに段が付き、高台部は露胎。**284**・**285**は口縁部1/6・1/4片。口径15.6cm・17.2cmを測る。釉は内面垂れる。**286** ～ **288**は底部。高台径5.6 ～ 5.8cm。高台部は露胎。**288**の高台内には『十二内○○(免)』と書かれた墨書がある。**289**はⅡ－5類の底部。1/3片で、高台径5.4cmを測る。**290**はⅢⅧ－1類か。1/4片で復元底径7.8cmを測る。見込

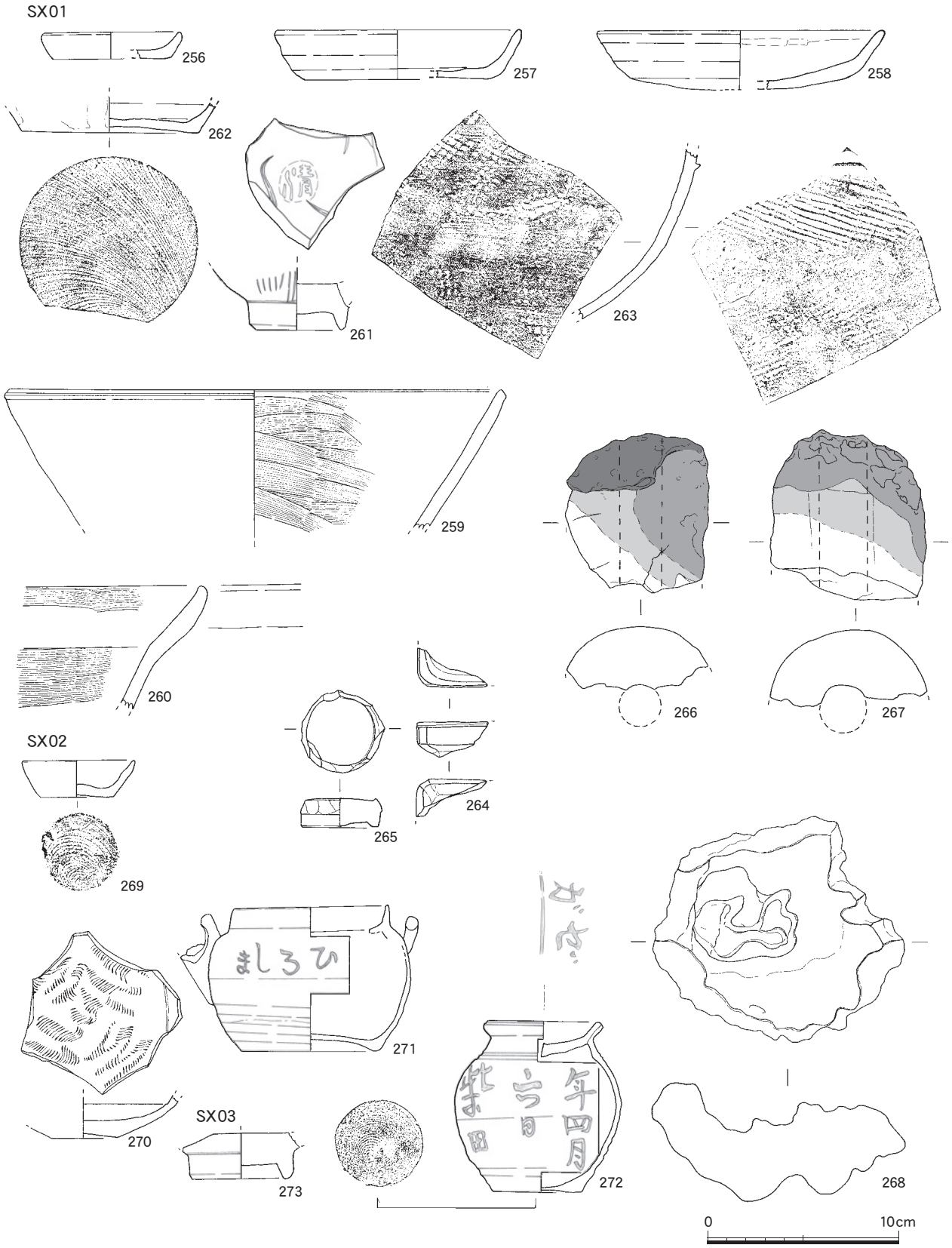


Fig.17　SX01 ～ 03 出土遺物（1/3）

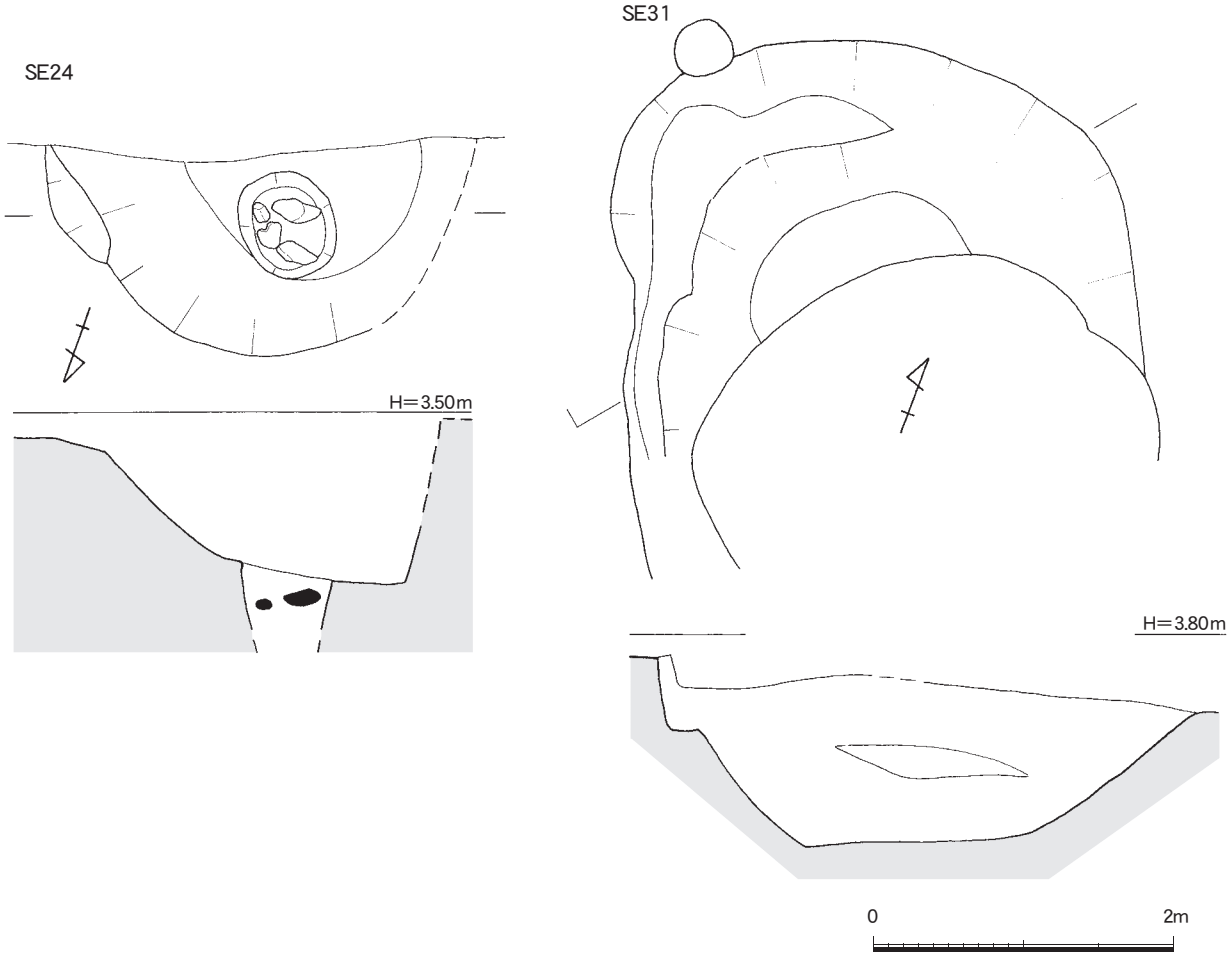


Fig.18　SE24・31（1/50）

み花文がある。釉がかかるが、外底部中央無釉で黒い部分あり。**291** ～ **298**は中国産青磁。**291**・**292**は皿。**291**は同安窯系Ⅲ－2b類。底部露胎。**292**は龍泉窯系の菊花皿。口径10cmを測る。底部は碁笥底で露胎。**293** ～ **298**は碗。**293**・**294**・**296** ～ **298**は同安窯系青磁。**293**・**294**はⅠ－1b類。**293**は2/3片で口径16.3cm、器高7.2cm、**294**は1/10片で、復元口径16.6cmを測る。**295**は内面ヘラによる花文と櫛描文が入る。**296**は同安窯系碗Ⅲ－1b類。**297**は龍泉窯系青磁碗Ⅲ－1c類。口縁部輪花で、内面白堆線が入る。高台部釉を掻き取る。**298**はⅡ類か。体部外面下半から高台部は露胎。**299**は白磁合子身小片。口径5.0cmを測る。**300**は龍泉窯系青磁碗底部を再利用した瓦玉。最大径7.3cmを測る。高台内は露胎。**301** ～ **304**は中国産陶器。**301**は褐釉陶器壺の耳。**302**は鉢Ⅵ－1類で、破片から復元。復元口径27.0cm、器高9.3cmを測る。全面暗灰黄色釉がかかるが、口縁上端は灰白色粘土、碁笥底部に他器の粘土が付着する。**303**は黄釉鉄絵盤Ⅰ類底部小片。内面はオリーブ黄から浅黄色釉がかかるが、外底部は露胎。見込みに鉄絵がある。磁灶窯系か。**304**は盤Ⅱ－1c類。1/6片で復元口径32.0cm、器高15.4cmを測る。外底部以外灰オリーブ色釉がかかる。磁灶窯系のものか。**305**は古代瓦。須恵質の薄手の作りで凹面布目痕が残る。**306**は須恵器坏身1/6片。復元口径12.0cmを測る。小田富士雄氏編年のⅣA期のもの。**277**・**278**・**281**・**284** ～ **287**・**290** ～ **294**・**296**・**297**・**301**・**303**・**306**は井筒内、他は掘り方出土。以上の遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

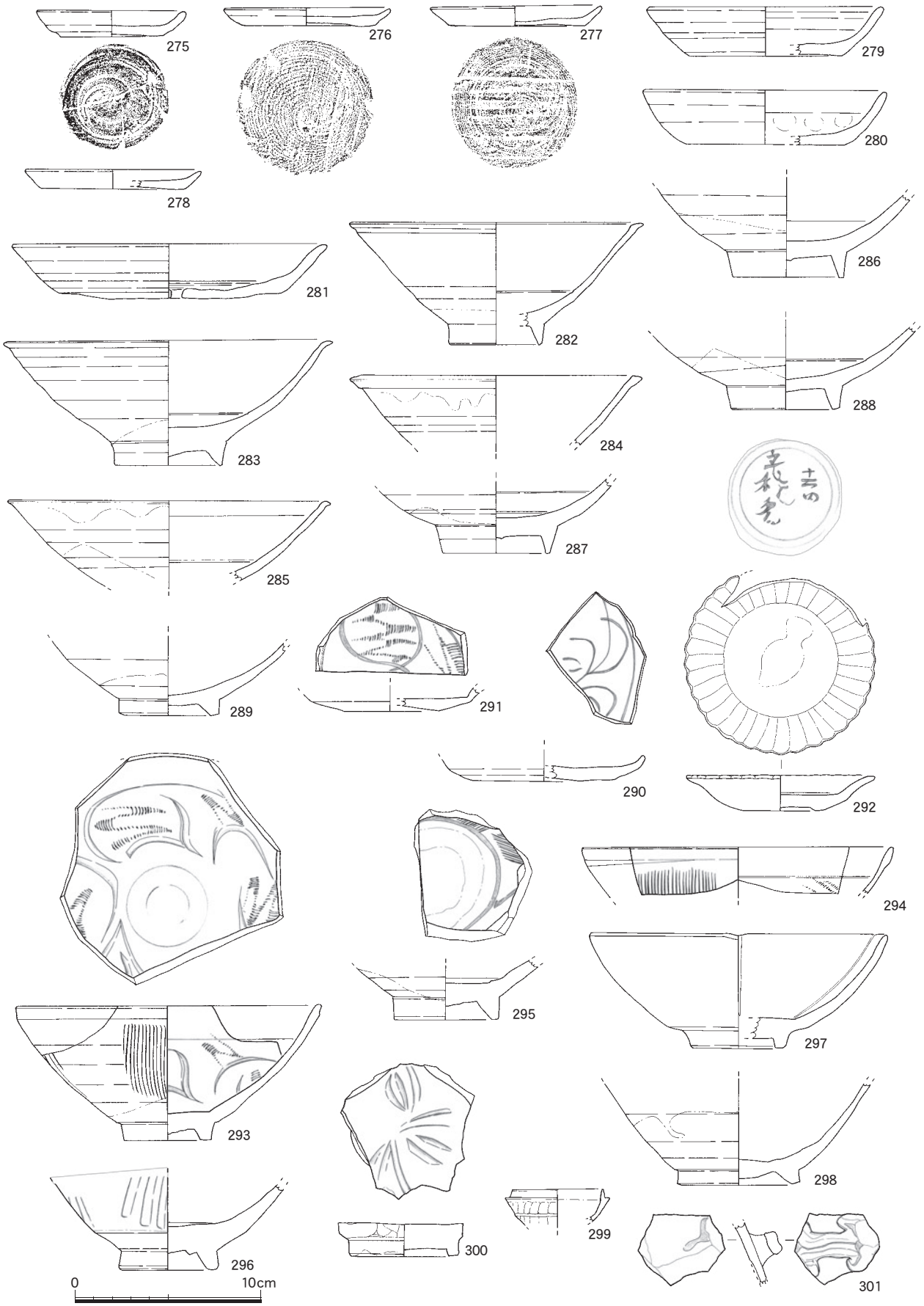


Fig.19　SE24 出土遺物 1 （1/3）

SE31（Fig.18・21、PL. 6 －1）

SE24に切られる井戸。円形の掘り方で、他遺構との切り合い、規模は不明。SE24の掘り方で、円形の井筒らしき痕跡を確認したが未調査である。

出土遺物　中世土師器、黒色土器、瓦器、中国産陶磁器、瓦、石鍋、炭化物、鉄滓などが出土。中国産陶磁器は白磁が多く、青磁は細片が2点と少ない。**307**は土師器の椀底部小片。**308**・**309**は黒色土器A類椀。**308**は底径7.2cmを測る。内面は黒い。**309**は1/4片で、底径9.0cmを測る。内面オリーブ黒色を呈す。**310** ～ **319**は白磁碗。**310** ～ **314**はⅡ－1類。**310**は1/3片で、口径14.9cm、器高5.4cmを測る。高台部は露胎。**311**・**312**は1/3片・1/8片で、口径13.4cm・15.2cmを測る。**313**・**314**は底部。**313**は1/2片で、底径5.8cm。**314**は底部片で底径5.5cmを測る。外底部は露胎、**313**の畳付は面を擦る。**315**はⅤ－2a類。1/5片で、口径16.2cmを測る。内面口縁下沈圏線が巡る。**316** ～ **318**は**316**がⅣ－1a類、**317**・**318**がⅣ－1b類。**316**・**317**は口縁1/3片・1/7片で、口径16.9cm・17.2cmを測る。**318**は底径6.9cmを測る。高台部は露胎。**319**は小碗。1/8片で口径11.4cmを測る。体部外面鎬蓮弁で青磁の文様であるが、釉色が明オリーブ灰色と白味が強く白磁とした。**320**は白磁Ⅱ－1類碗底部を打欠き再利用した瓦玉。直径5.6cmを測る。**321**は厚手の土師質の平瓦細片。凹面粗い工具ナデ、凸面は斜めの縄目叩き。胎土は1 ～ 2mm石英・長石粒子混入。以上の遺物から遺構の時期は11世紀後半～ 12世紀前半と考える。

② 土坑

SK26（Fig. 7 ・23、PL. 6 －2）

調査区東側で検出した北壁にかかる不整円形の土坑。底面は二段掘りを呈す。長軸長2.1m、深さ1.15

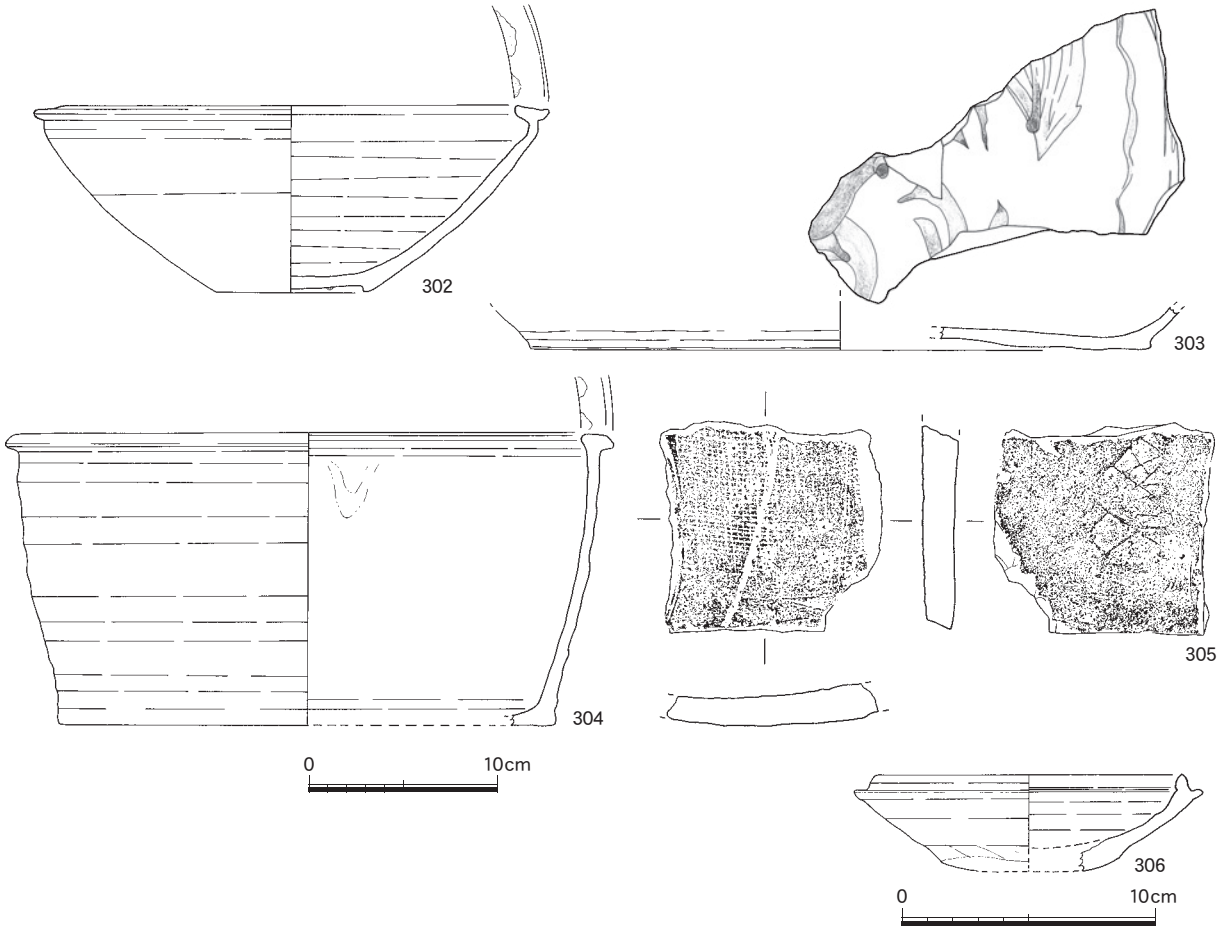


Fig.20　SE24 出土遺物２（1/3・1/4）

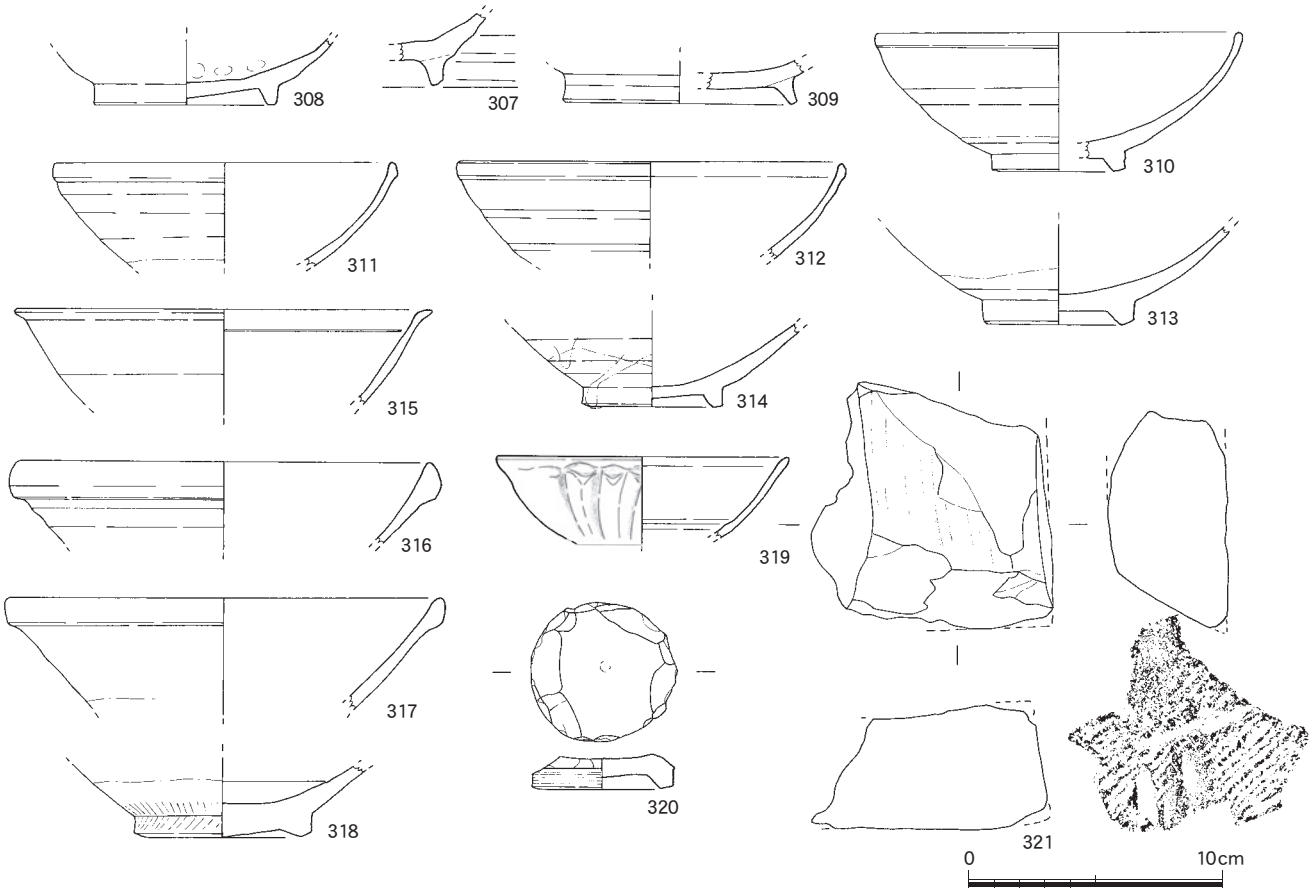


Fig.21　SE31 出土遺物（1/3）

mを測る。

出土遺物　古代土師器・須恵器、中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産陶磁器、滑石製石鍋、混入品の近世の遺物が出土。青磁は細片が2点出土。**322**は土師器皿1/3片。復元口径10.6cmを測る。体部回転ナデ、外底部もナデ。**323**は瓦質土器火鉢の深鉢。1/4片で脚が1か所付く。調整は外面丁寧ヘラミガキ、内面ヨコナデ。色調は黒色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。**324**は青磁碗か皿底部。底部はやや上げ底。底径4.6cmを測る。全面灰オリーブ釉がうすくかかる。他に土師器椀片がある。

SK27（Fig.23、PL. 6 －3）

調査区中央北側で検出した土坑。SK35に切られ全容は不明。土層断面では0.27mを測る。埋土は凹灰色砂質土で、炭化物の薄層を間に挟む。

出土遺物　中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、平瓦、焼土塊、釘、鉄滓などが出土。**325** ～ **328**は土師器。**325** ～ **327**は小皿。**326**は1/4片、**325**・**327**は1/2片。口径8.8 ～ 9.6cm、器高1.2 ～ 1.4cmを測る。**328**は坏1/4片。口径15.8cm、器高2.9cmを測る。いずれも調整は体部回転ナデ、外底部は糸切り。**329** ～ **333**は白磁。**329**はⅡ－1d類か。1/4片で口径10.6cmを測る。外底部は露胎。**330**はⅧ－1b類か。1/3片で口径10.0cmを測る。体部外面下半露胎。**331** ～ **333**はⅣ－1a類。**331**は1/8片で、口径17.8cmを測る。焼成不良で釉の発色が悪い。**332**・**333**は底部。**333**は1/2片。底径8.0cm・7.1cmを測る。高台部は露胎。**334**は青磁皿1/3片。口径10.4cmを測る。口縁部が湾曲して直立し、底部はやや段が付く。灰オリーブ釉がかかるが、底部は露胎。**335**は青白磁皿。1/4片で口径11.0cm、器高2.2cmを測る。青みがかった灰

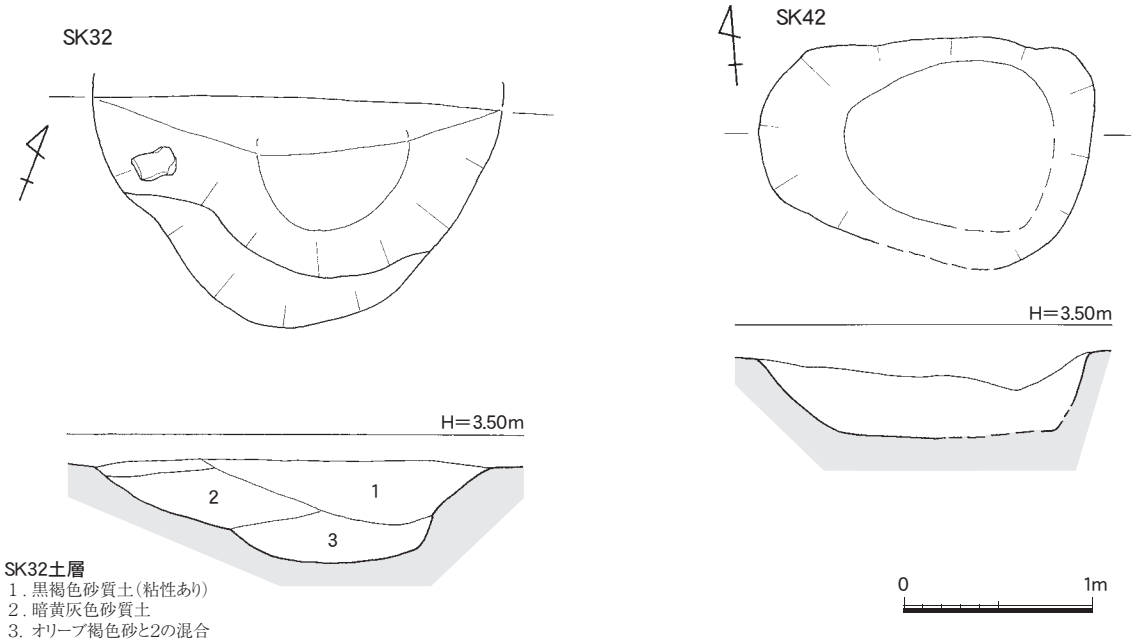


Fig.22　SK32・42（1/40）

白色釉がかかる。見込みにヘラと櫛による文様が入る。低い段が付く底部で露胎。

SK30（Fig. 7 ・23）

調査区東側で検出した不整楕円形を呈す土坑。東半は削平などで不明。規模は推定で長軸長1.7m、短軸幅1.26m、深さ0.25mを測る。底面中央部皿状に窪み、東寄りに焼土面がある。埋土はオリーブ黒色砂質土で、下層は淡黄色細砂である。

出土遺物　中世の土師器、中国産陶磁器、瓦、焼土塊などが出土。**336**～**338**は白磁。**336**はⅤ－4a類碗。口縁部1/5片で口径15.4cmを測る。内面釉が垂れている。見込み段が付く。**337**は底部2/3片。底径5.0cmを測る。体部の開きから皿か。見込み輪状の釉掻き取り。**338**は皿。Ⅶ－1c類。底部2/3片で底径3.6cmを測る。見込みヘラ切りと櫛による施文。**339**は同安窯系青磁碗底部。Ⅰ－1a類で底径4.9cmを測る。見込み櫛描文が入る。外底部はケズリで露胎、畳付は擦る。**340**は瓦玉。青磁底部を再利用したもの。直径2.3cmを測る。側面は打欠きで、下面は無施釉。

SK32（Fig.22・23、PL. 6 －4）

調査区東側北壁にかかる半円形土坑。最大径2.15m、深さ0.55mを測る。埋土は上層が黒褐色砂質土、下層は暗黄灰色砂質土からオリーブ褐色土で粘性が強い。

出土遺物　中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、平瓦、焼土塊、滑石製石鍋、鉄釘、鉄滓などが出土したが、小片が多く、図示出来たものは少ない。**341**・**342**は白磁碗。**341**はⅤ－2a類。1/4片で口径16.4cm、器高7.0cmを測る。見込みは砂粒が付着する。**342**は底部でⅧ－4類か。見込み輪状に釉を掻き取り。いずれも外底部は露胎、調整はケズリで畳付は擦る。

SK34（Fig. 9 ・23、PL. 6 －6）

調査区南西隅、SX09下で検出した土坑。完掘でなく、全容は不明。深さは土層で0.6mを測る。埋土は上層が黒褐色砂質土、下層で黒褐色からオリーブ黒色粘質土である。

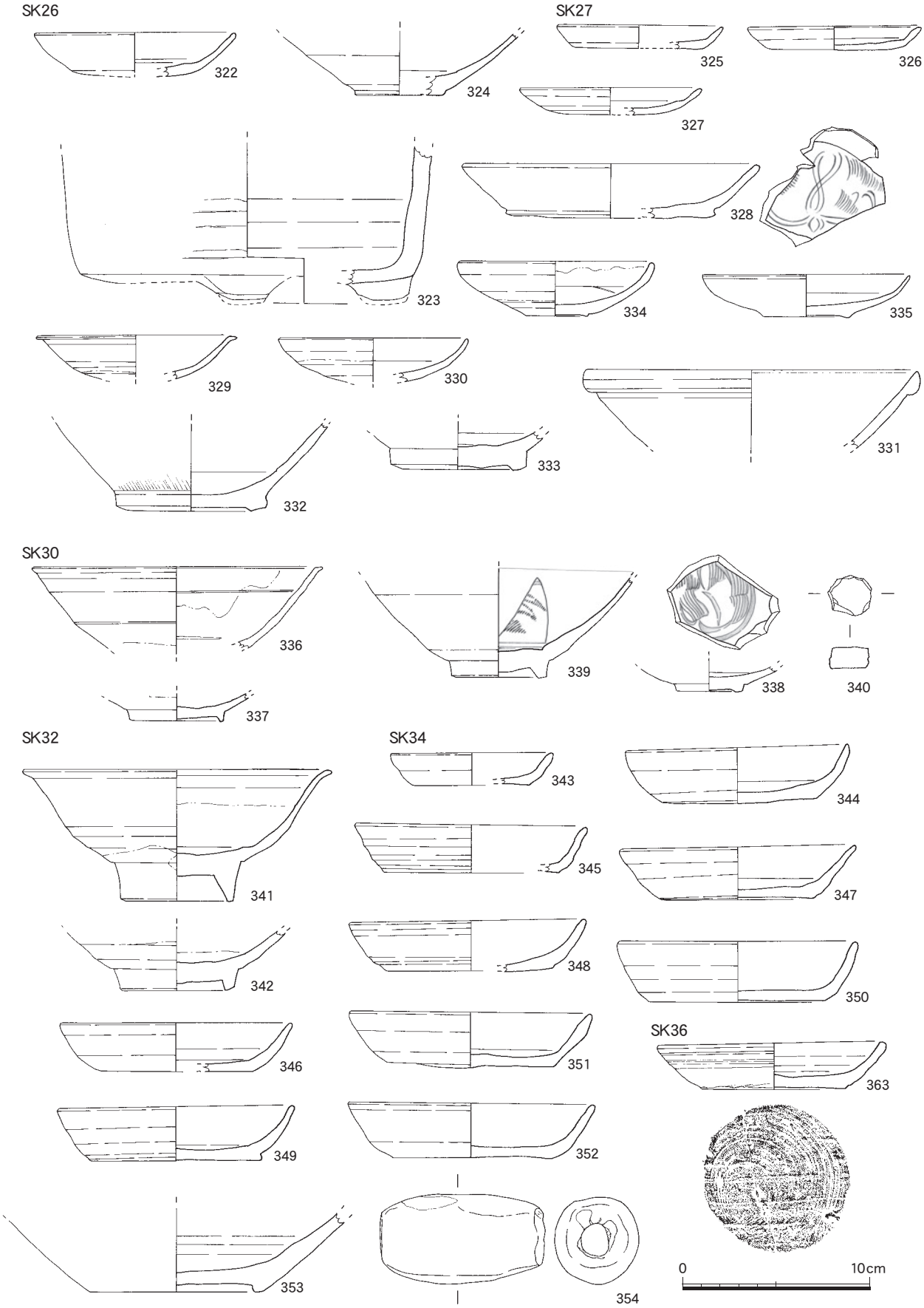


Fig.23　各土坑出土遺物（1/3）

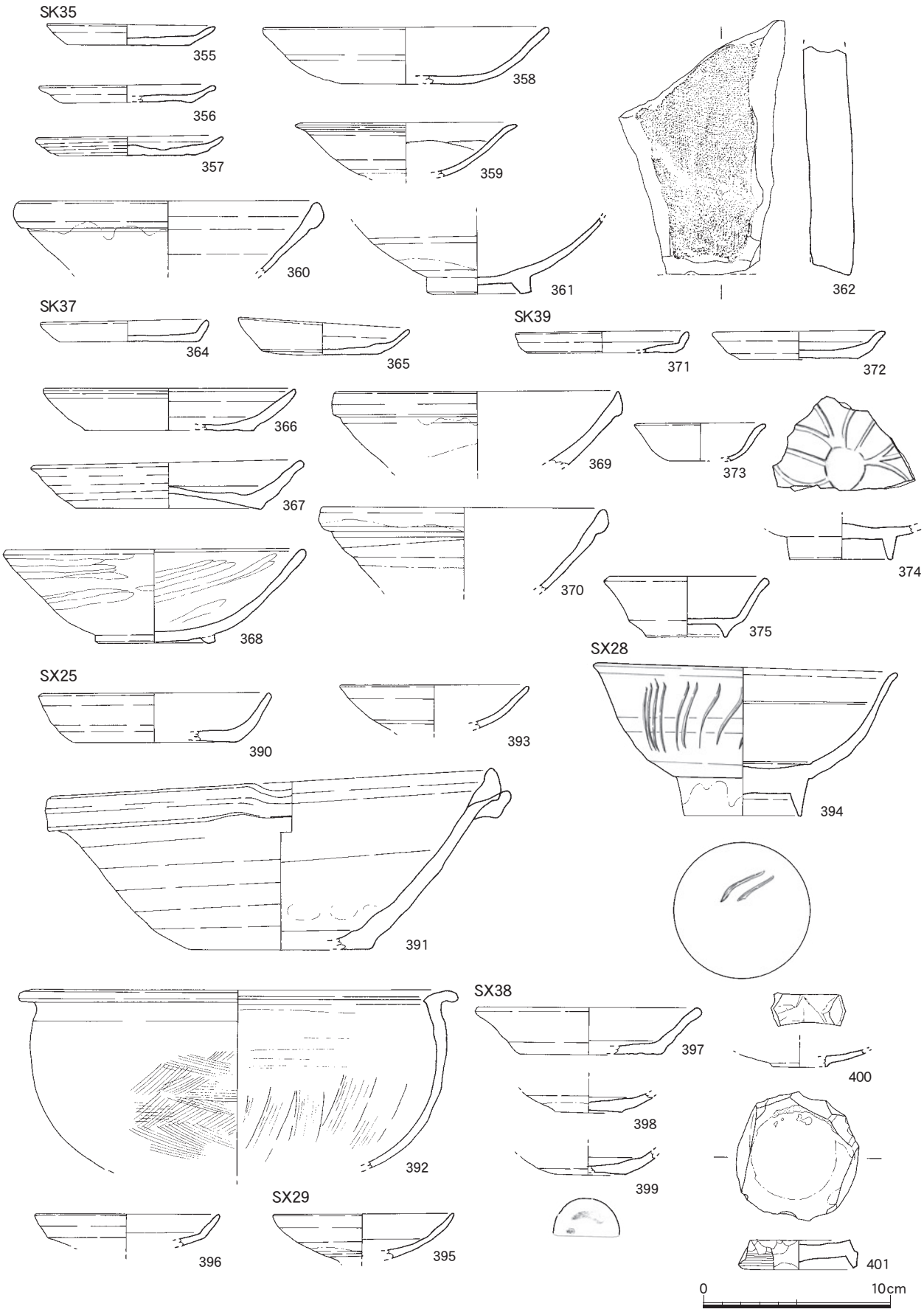


Fig.24　SK35・37・39、SX25・28・29・38 出土遺物（1/3）

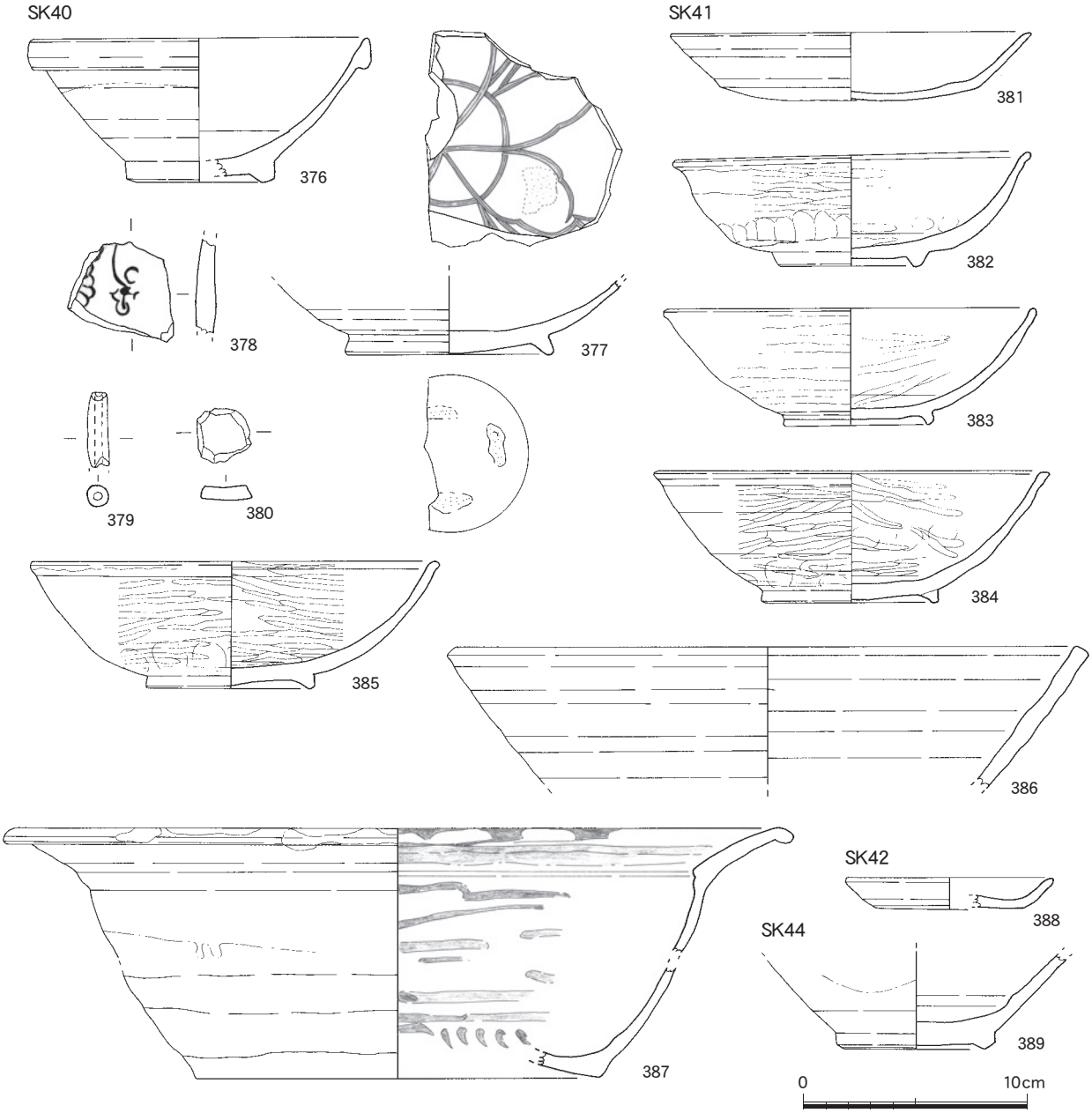


Fig.25　SK40 ～ 42・44 出土遺物（1/3）

出土遺物　中世の土師器、須恵器、中国産陶磁器、瓦、古代の須恵器、土錘、鉄釘、動物骨等が出土。**343** ～ **352**は土師器。**343**は1/3片で口径8.6㎝、器高1.7㎝を測る。**344** ～ **352**は坏。**344**はほぼ完形で、他は1/6 ～ 2/3片。口径11.8 ～ 13.0㎝、器高2.6 ～ 3.2㎝を測る。調整は体部回転ナデ、外底部糸切り。**344**は口縁内面ススが付着し、灯明皿の可能性がある。**353**は中国産褐釉陶器鉢底部。Ⅵ－1類。暗褐色釉がかかる。**354**は大型の管状土錘。長さ8.8㎝、最大径4.3㎝、孔径1.6㎝、重さ162.38gを測る。以上の遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SK35（Fig.24）

SK26の外側で検出した半円形の土坑。上面最大径3.45ｍを測る。完掘していないので、詳細は不明。井戸の可能性がある。

出土遺物　中世の土師器、中国産陶磁器、瓦器、平瓦、小割石などが出土。白磁が多く、青磁は細

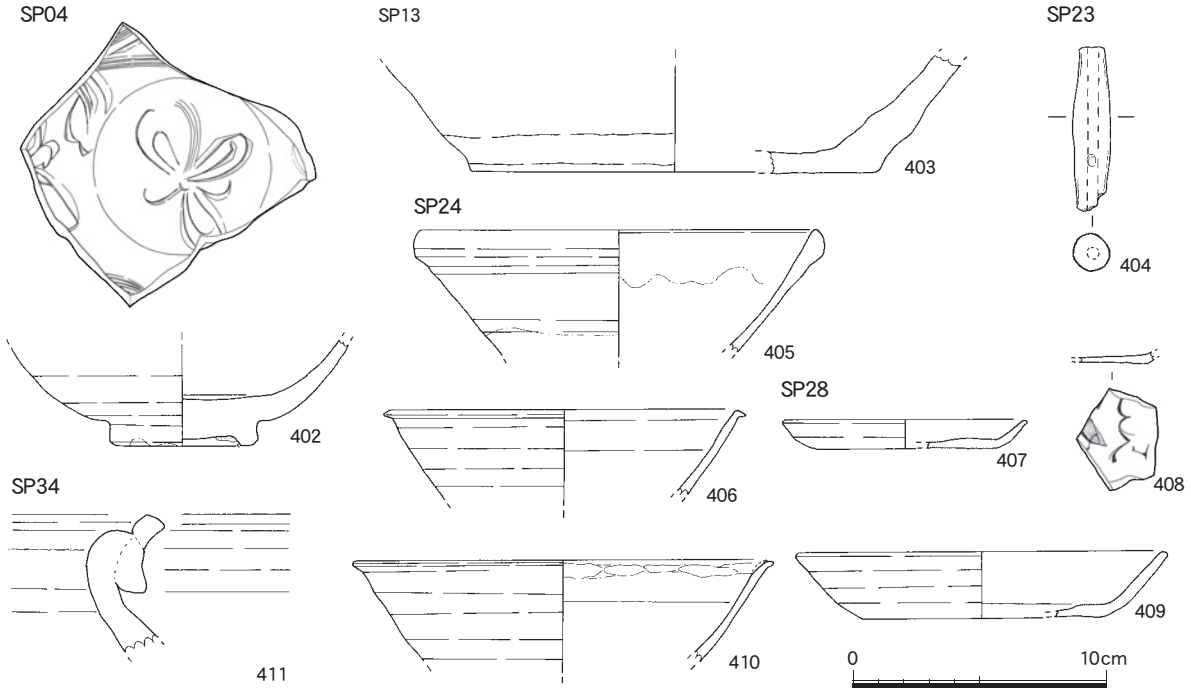


Fig.26　各ピット出土遺物（1/3）

片を1点含む。**355** ～ **358**は土師器。**355** ～ **357**は小皿。**355**・**357**は1/2片、**356**は1/3片。口径9.0 ～ 9.9㎝、器高0.9 ～ 1.2㎝を測る。**358**は坏1/3片。口径15.2㎝、器高3.0㎝を測る。調整は体部回転ナデ、外底部は**355** ～ **357**は糸切り、**358**はヘラ切りで、**356**・**357**は板状圧痕が残る。**359**は中国産白磁皿Ⅳ－1a類1/9片。復元口径11.8㎝を測る。見込みに線彫り文様あり。外面下半露胎。**360**は白磁碗Ⅳ－1a類。1/8片で、復元口径16.4㎝を測る。口縁部外面釉が垂れる。**361**は白磁碗Ⅱ－1類底部片。底径5.5㎝を測る。外底部露胎。**362**は須恵質の平瓦片。凹面細かい布目、凸面斜め格子目叩き。

SK36（Fig.23）

調査西壁にかかる小土坑。埋土は締らない黒灰色土。中世の土師器、中国産陶磁器などが出土。**363**は土師器坏一部欠。口径12.2㎝、器高2.6㎝を測る。

SK37（Fig.24、PL. 6 －5）

北壁にかかる円形土坑の一部。深さ0.75mを測る。埋土は黒褐色砂質土を主体とし、暗灰黄色粘質砂や炭化物を含む。

出土遺物　中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、瓦、焼けた割石、鉄釘と弥生土器や古代以前の土師器などが出土。**364** ～ **367**は土師器。**364**・**365**は小皿。5/6片・2/3片。口径9.0㎝、器高1.2㎝・1.9㎝を測る。**366**・**367**は坏。1/3片・7/8片で、口径13.4㎝・14.5㎝、器高2.2㎝・2.7㎝を測る。**367**は上げ底。いずれも外底部は糸切りで、**364**・**365**は板状圧痕がある。**368**は瓦器椀1/6片。口径16.0㎝、器高5.0㎝を測る。内外面ヘラミガキ、胎土・焼成は良好。**369**・**370**は白磁碗Ⅳ－1a類。1/6片で、口径15.2㎝、15.4㎝を測る。外面釉が垂れる。

SK39（Fig.24）

SE31に切られる土坑。埋土は黒褐色粘質土。

出土遺物　中世の土師器、黒色土器、瓦器、中国産陶磁器、鉄滓と古代の須恵器などが出土。**371**・**372**は土師器小皿。1/4・1/2片。口径9.2㎝、器高1.2㎝・1.5㎝を測る。底部は糸切り。**373**は瓦器小坏か。1/5片で復元口径7.0㎝を測る。色調は灰黄色から灰白色を呈す。**374**は白磁皿か浅形碗底部2/3片。底径5.5

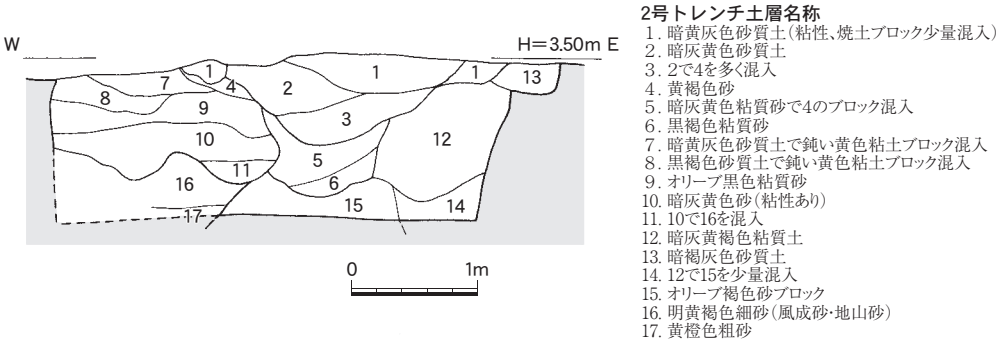


Fig.27　２号トレンチ土層（1/60）

cmを測る。見込み劃花文がある。灰白色釉がかかるが、高台部は露胎。**375**は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類。1/4片で口径8.3cm、器高3.2cmを測る。全面に明緑灰色釉がかかるが、畳付釉を掻き取る。

SK40（Fig.25）

調査区東側、SK30・SK32に切られる平面形が不整楕円形を呈する土坑。

出土遺物　中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、土製品、古代以前の土師器・須恵器、瓦などが出土したが小片が多い。**376**は白磁碗Ⅳ－1a類。1/3片で口径15.3cm、器高6.3cmを測る。体部外面から外底部は露胎。**377**は越州窯系青磁の皿か浅形碗底部。1/2片で底径9.2cmを測る。黄褐色釉がかかるが発色は悪い。見込みヘラ切りの花文で、見込みと外底部に粘土目痕が残る。**378**は陶器壺の胴部細片。ヘラ切りの花文で、暗オリーブ灰色釉がかかる。379は管状土錘。先端部欠損で残存長3.2cm、径0.9cm、孔径0.4cm、重さ260ｇを測る。**380**は瓦玉。径2.4×2.5cmで陶器片を再利用している。

SK41（Fig.25）

調査区西側、SE31に切られる土坑で全容は不明。埋土は浅黄色粘土ブロック、暗灰黄色粘質砂。

出土遺物　中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、滑石製石鍋、鉄釘、古代以前の土師器、瓦などが出土。**381**は土師器坏。1/4片で口径16.0cm、器高3.0cmを測る。底部はやや丸底であるが糸切りで板状圧痕がある。**382**～**385**は瓦器椀。2/3～3/4片で、**383**は口縁1/2欠。口径15.9～18.0cm、器高5.0～5.8cmを測る。体部の調整はヘラミガキ、高台部は回転ナデ。**382**・**385**は外底部近く指押え痕が残る。**383**は歪みがある。**386**は須恵器の擂鉢か捏ね鉢口縁1/10片。復元口径28.4cmを測る。口縁部は黒い。**387**は黄釉鉄絵盤Ⅰ－１b類。破片からの復元で口径35.0cmを測る。口縁部に重ね焼き痕跡が残る。

SK42・44出土遺物（Fig.22・25、PL. 6 －7）

388は**SK42**出土の土師器小皿1/3片。口径9.2cm、器高1.4cmを測る。底部糸切り。**389**は**SK44**出土の白磁碗Ⅳ－1b類底部。1/2片で底径6.0cmを測る。外底部は露胎。

③　その他の遺構

SX25出土遺物（Fig.24、PL. 8）

調査区東側で検出した焼土混じりで炭化物が集中する範囲。中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、石製品などの遺物が出土。**390**～**392**は土師器。**390**は坏。1/3で復元口径12.3cm、器高2.6cmを測る。体部回転ナデで、外底部糸切り。**391**は土師器の片口の捏ね鉢。5/6片で口径23.5cm、器高9.6cmを測る。調整はナデ。**392**は鍋。1/2弱片で口径23.2cmを測る。外面斜めハケ目、内面はタテ板ナデ。外面はススが厚く付着する。**393**は白磁皿1/7片。復元口径10.0cmを測る。外底部は露胎。

SX28（Fig.24、PL. 6 －8）　SK35上面で検出した焼土面。**394**は白磁碗Ⅴ－2b類。3/4片で口径15.8cm、器高8.1cmを測る。高台部まで施釉。見込みに２条のヘラ切り線が入る。

SX29出土遺物（Fig.24）

調査区東側で検出した焼土・炭化物が集中する範囲。厚さ5cm程の焼土層の下に厚さ5cmほどの灰層があった。中世の土師器・中国産陶磁器、鉄釘などが出土。**395**・**396**は白磁皿。**395**はⅥ－1a類、**396**はⅥ－2a類。1/4・1/5片で口径9.6cm・9.8cmを測る。**395**の外底部は露胎。

SX38出土遺物（Fig.24）

調査区東側、SK30近くで検出した浅い落込み。中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、鉄釘、鉄滓などが出土。**397**は土師器坏。1/5片で復元口径12.0cm、外底部糸切りで板状圧痕が残る、**398** ～ **400**は白磁皿。**398**・**399**はⅤ類の底部1/2片。外底部は露胎。**399**の底部には墨書痕跡がある。**400**は小片。**401**は白磁碗底部を打欠き、再利用した瓦玉。径6.5×6.9cmを測る。

④　ピット出土遺物（Fig.26）

402は**SP04**出土の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類底部片。見込みヘラ片彫り花文。**403**は**SP13**出土。陶器甕の底部１/5片か。無釉である。**404**は**SP23**出土の管状土錘。先端一部欠で長さ6.4cm、重さ13.28ｇを測る。**405**・**406**は**SP24**出土。**405**は白磁碗Ⅳ－1aか1b類の口縁部1/5片。**406**は白磁碗Ⅴ－4a類の口縁部1/10片。**407** ～ **410**は**SP28**出土。**407**は土師器小皿1/6片。外底部はナデ。**408**は土師器底部。墨書がある。**409**は土師器の坏1/4片。外底部は糸切りか。**410**は白磁碗Ⅴ－4a類。口縁部1/7片。**411**は**SP34**出土。常滑焼甕のN字状口縁細片。14 ～ 15世紀のもの。

⑤　遺構面・２号トレンチ出土遺物（Fig.27・29、PL. 7 － 1・2）

412 ～ **415**は**遺構面**出土。**412**は土師器坏1/4片。口径14.8cm、器高2.8cm。底部糸切り。**413**は白磁皿Ⅵ－1a類の底部。**414**は建窯系の天目碗底部。**415**は縁辺打欠いた白磁碗底部再利用の瓦玉。6.5×6.5cmを測る。**416** ～ **418**は**第2面掘下げ**出土。**416**は瓦器椀口縁1/6片。口径16.6cmを測る。**417**は白磁碗Ⅷ類底部1/4片。**418**は龍泉窯系青磁碗底部再利用の瓦玉。5.5×5.7cm。高台部は露胎。**419**は**SP35**出土の土師器小皿。外底部板状圧痕が残る。**420** ～ **436**は**２号トレンチ**出土。**420**は瓦器椀底部1/2片。表面ヨコナデ調整でススが付着。**421** ～ **427**は白磁碗。**421**はⅡ－1類1/9片。復元口径14.6cmを測る。**422**はⅣ－1a類口縁1/5片。口径15.0cmで内面沈線が巡る。**423**はⅤ－1a類口縁部1/8片。復元口径16.0cmを測る。**424**・**425**はⅣ－1a類底部。1/3片・1/2片で高台径8.0cm・7.2cmを測る。外底部は露胎。**426**はⅧ類1/2片。見込み輪状の釉剥ぎで、高台は露胎。**427**は碗か皿の底部。高台径5.3cmを測る。高台部は露胎。**428**は越州窯系青磁碗Ⅰ－2a類底部。見込みに粘土目痕が残る。**429**・**430**は陶器。**429**は皿

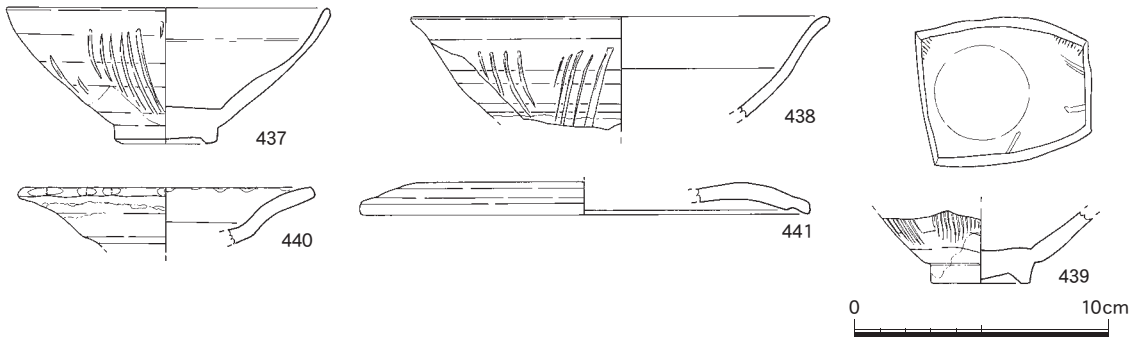


Fig.28　SE43 出土遺物（1/3）

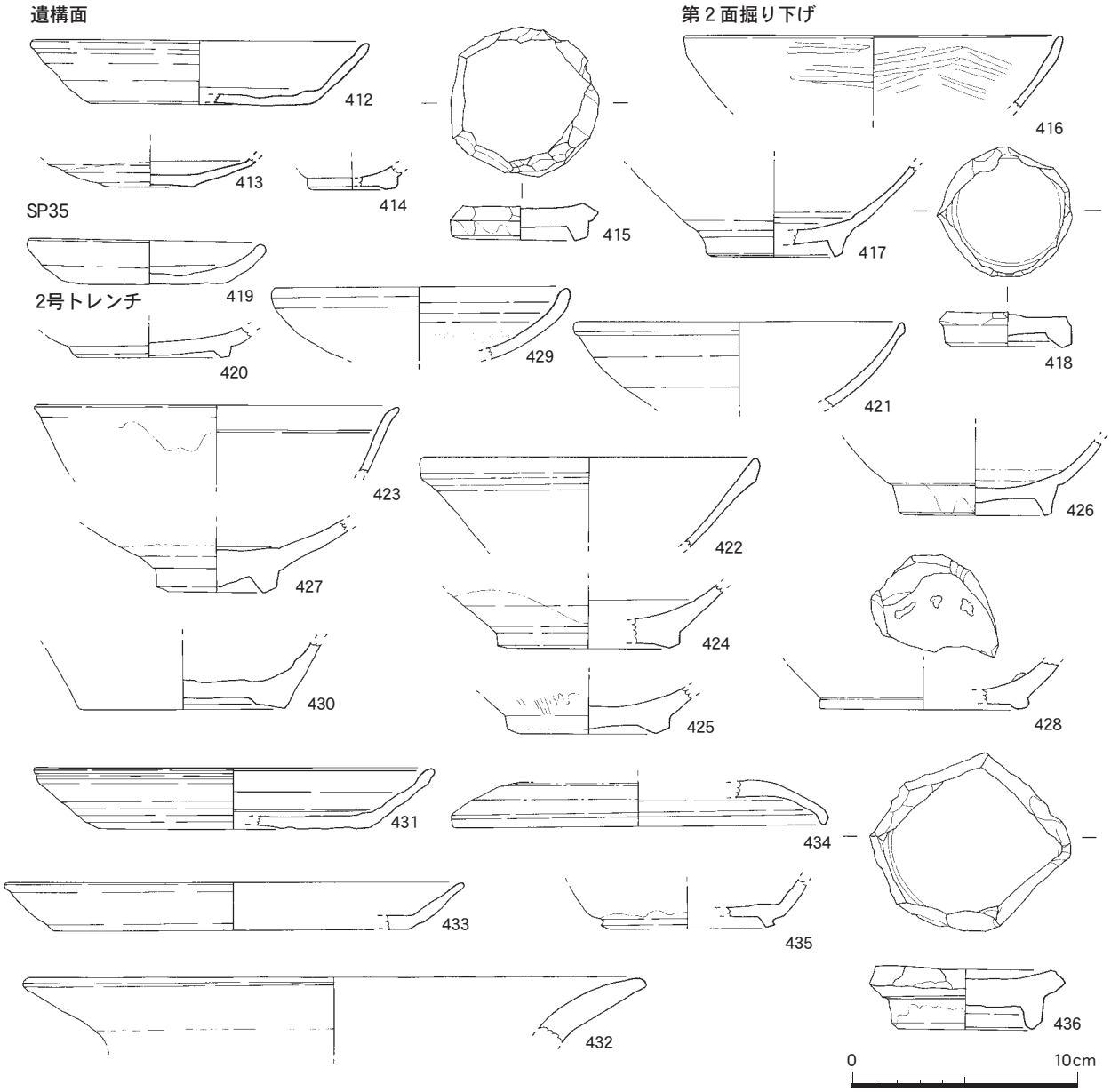


Fig.29　遺構面・２号トレンチ出土遺物（1/3）

口縁1/6片。口径13.0㎝を測る。灰オリーブ色釉がかかり、胎土は灰色で精良。**430**は底部1/2片。底径9.0㎝で内面浅黄色釉がかかる。**431**は土師器皿1/4片。外底部はヘラ切りで板状厚痕が残る。**432**は土師器甕口縁部1/4片。８世紀のもの。**433** ～ **435**は須恵器。**433**は皿1/10片。８世紀後半のもの。**434**は須恵器蓋1/6片。８世紀前半頃のもの。**435**は坏底部1/4片。８世紀前半のもの。**436**は白磁碗底部利用の瓦玉。高台部黒色顔料が付着。

⑥　第２トレンチ検出遺構

SE43（Fig.4・27・28、PL. ７－１，８）

２号トレンチで検出した素掘りの井戸。第３面の遺構である。遺構面より－1.3m程下の面で円形の井筒痕跡を確認した。

Fig.30　各遺構出土石器（1/3）

出土遺物　**437** ～ **440**は青磁。**437** ～ **439**は同安窯系碗。**437**はⅠ－1b類の形態であるが見込みは無文。口径12.6cm、器高5.3cmを測る。高台部は露胎。**438**・**439**はⅢ－2類。**438**は口縁部1/3片。口径16.4cmを測る。

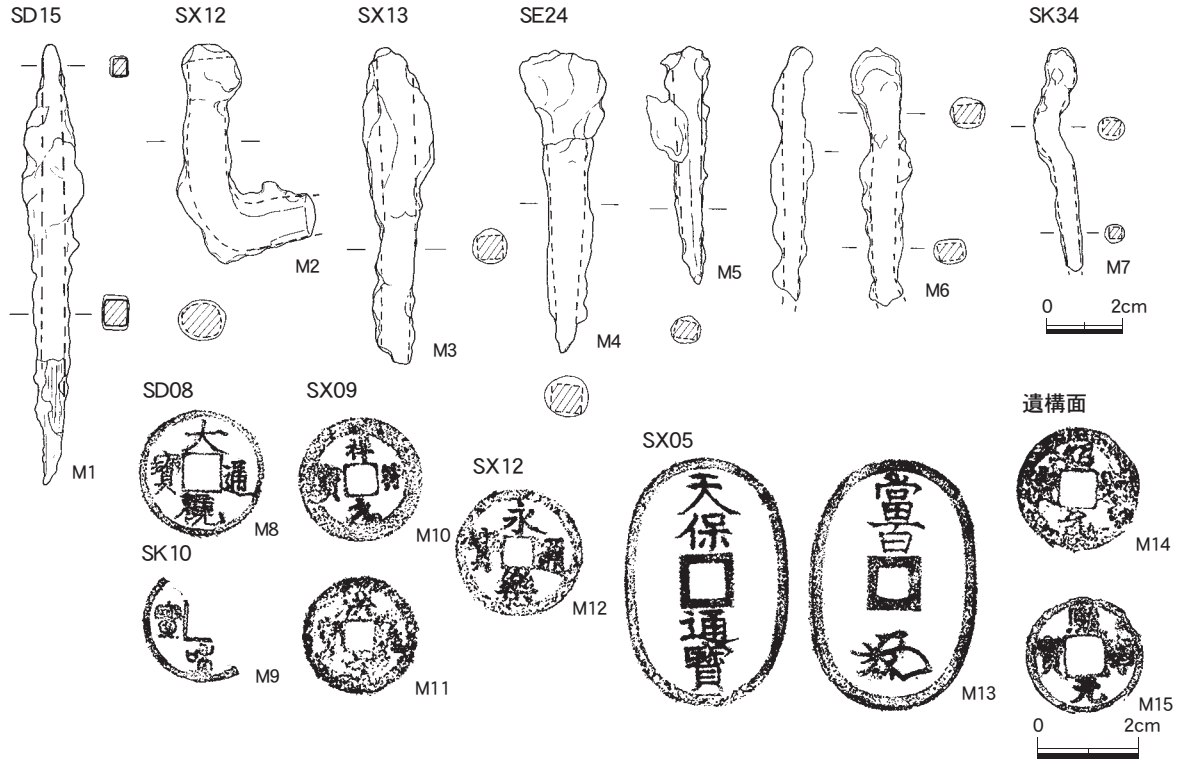


Fig.31　各遺構出土金属製品（2/3・1/2）

439は底部片。底径4.0cm。高台部は露胎。**440**は稜花皿1/6片。復元口径11.6cmを測る。**441**は須恵器蓋1/6片。口径17.6cm。８世紀頃のものか。以上の遺物から遺構の時期は12世紀頃と考える。

⑦　各遺構出土石製品・鉄製品（Fig.30・31）

S1は**SD08**出土の赤間硯片。残存長9.0cmを測る。**S2** ～ **S4**は**SD15**出土。**S2**は茶臼下臼1/6片。上面径15.8cmを測る。石材は砂岩。**S3**は砥石片。残存長8.1cmを測る。頁岩質の石材で焼けたのか表面は赤変する。**S4**は碁石。色調はオリーブ黒色を呈す。直径2.2cm、最大厚0.65cmを測る。**S5**・**S6**は**SK10**出土。**S5**は砥石片の再利用品か。粘板岩質石材である。**S6**は滑石製石鍋転用品。鍔部片を再利用。5.3×4.3×1.0cmを測る。**S7**は**SK16**出土の滑石製石鍋の転用品。6×2×2cmを測る。**S8**は**SK17**出土の滑石製石鍋口縁部片の割面を磨った転用品。2.4×4.2×0.8cmを測る。**S9**は**SX05**攪乱出土の板材。表面擦られており、砥石と思われる。16.0×5.4×1.9cmで粘板岩質か。**S10**は**SX09**出土の滑石製有溝石錘。最大長5.7cm、重さ47.2ｇを量る。**S11**は**SX11**出土。砂岩の瓦玉の様な石製品か。3.3×3.6×1.8cm。**S12** ～ **S14**は**SX12**出土。**S12**は扁平な楕円形の磨石か敲き石。上面使用擦痕と側面打撃痕が残る。13.6×9.3×3.3cm。**S13**･**S14**は砂岩の石球。**S13**は破片で4.1×3.8×3.0cmを測る。**S14**は3.1×2.9×2.5cmで、石材は緑泥片岩か。**S15**は小型の滑石製石鍋1/3片。口径8.4cmを測る。**S16** ～ **S19**は**SE24**出土。**S16**は滑石製石鍋の転用品。全長10.8cmを測る。2か所孔があり、1か所溝が切ってあることから石錘に使われた可能性がある。**S17**・**S18**は石球か。径2.3 ～ 2.7cm。**S18**の石材は砂岩。**S19**は黒碁石。2.1×1.6×0.6cmを測る。**S20**は**SE31**出土。下半が欠損するが滑石製石錘か。上部に孔がある。残存長5.2cm、重さ54.09ｇを測る。**S21**は**SK35**出土。敲き石で11.8×10.0×5.5cm。上部に使用による窪みがある。側面は磨りで表面ススが付着する。石材は安山岩か。**S22**は**SX29**出土の滑石製石鍋不明転用品。4.2×3.6×2.2cm。破片を方形に研磨整形しなおしたもので、用途は不明。

M1は**SD15**出土。釘か。残存長11.5㎝。断面長方形で先端は曲がる。**M2**は**SX12**出土。先端が曲がった釘。**M3**は**SX13**出土の釘。残存長8.3㎝を測る。**M4** ～ **M6**は**SE24**井筒出土。いずれも釘で残存長7.9㎝・6.3㎝・6.7㎝を測る。**M7**は**SK34**出土。釘で曲がる残存長5.8㎝を測る。**M8** ～ **M15**は銭貨。**M8**は**SD08**出土の中国北宋の「大観通寶」の小平銭（初鋳1107年）。銭径2.5㎝、重さ3.49ｇを測る。**M9**は「□和□寶」1/2片。**M10**・**M11**は**SX09**出土。**M10**は北宋の「祥符元寶」（初鋳1009年）。銭径2.5㎝、重さ3.64ｇを測る。**M11**は明の「洪武通寶」（初鋳1368年）か。錆がひどい。銭径2.3㎝、重さ3.44ｇを測る。**M12**は**SX12**上層出土。錆がひどいが明の「永楽通寶」（初鋳1408年）である。銭径2.5㎝、重さ2.96ｇを測る。**M13**は**SX05**出土。「天保通寶　当百銭」（初鋳1835年）の百文銭。重さ19.87ｇを測る。**M14**･**M15**は**遺構面**出土。**M14**は錆がひどいが北宋の「紹聖元寶」（初鋳1094年）、銭径2.5㎝、重さ2.83ｇを測る。**M15**は北宋の「熙寧元寶」（初鋳1068年）である。銭径2.3㎝、重さ3.00ｇを測る。

４．まとめ

今回の調査は狭い調査区で、安全対策上の問題から第２面までの調査であったが、基盤までの試掘トレンチでは下層でも遺構が確認出来ているので、基盤面まで遺構は存在する。

今回の遺構の時期を再整理する。上面の第1面は14 ～ 16世紀頃の遺構である。注目される遺構はSD08とSD15である。並行し東西方向よりやや南に触れる２条の溝であるが、間の幅は２m強を測り、町割りの道路の側溝の可能性が強い。溝の時期は14 ～ 15世紀頃である。中世博多遺跡では13世紀中頃から道が整備され始め、14世紀から本格的に道路整備が行われるという。本調査区の溝も該期のものである。周辺の調査区では、本調査区東の第115次調査区でも道路側溝らしき溝が検出されているが、主軸がやや異なる。また本調査区南西隅で検出した鉄滓が多量に廃棄された遺構であるが、これは調査区隣接地に鍛冶関係遺構の存在が想定される。過去の調査例では周辺一帯に鋳造関係の遺構・遺物が多く検出されている。鉄滓廃棄遺構には16世紀の遺物を含み、16世紀まで生産が続けられている。この遺構はSD15溝を埋めており、道の側溝とすれば道路自体は16世紀には機能の失っている可能性がある。

第２面は12～13世紀である。この時期は礎石を持つ建物や井戸･土坑などの生活遺構が中心である。

第３面以下については古墳時代後期頃の須恵器などが出土しているので、古墳時代後期の遺構までは存在する可能性がある。

５．第 146 次調査出土動物遺存体について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課　　屋山　洋

第146次調査の概要

博多遺跡群第146次調査地点は冷泉公園の130m程北東に位置し、南側の砂丘列である博多浜の北端近くに位置する。現在の標高は5m前後を測る。調査は建物基礎で破壊される地表下約2.2mまでの調査で、それから下の調査は行っていない。第1面はGL－1.7m前後を検出面とし、時期は15世紀以降で道路側溝や土坑、鍛冶遺構、柱穴群が出土した。第2面はGL－2.2m前後で12～13世紀を主とし、井戸や焼土坑、土坑、柱穴群、礎石列などを検出した。

第２面から下は基礎が及ばないため、調査を行わず保存することとなったが、トレンチ調査では基盤の砂丘面の間に遺構が良好な状態で遺存しているのが判明した。

動物遺存体について

動物遺存体は62点出土した。近代攪乱から出土した3点を除くと59点で、内訳は陸棲哺乳類が21点、海棲哺乳類が20点、哺乳類（不明）が12点、魚類が6点である。動物遺存体の採取には土壌の篩選別やフローテーション等は行っておらず、遺構の掘り下げ中に目についた物を取り上げたもので、小～中型魚類や小型哺乳類の骨は見逃しているものと思われる。

動物遺存体が出土した遺構の時期はおおよそⅠ期（12世紀後半～13世紀）、Ⅱ期（14～15世紀）、Ⅲ期（16世紀）の３時期に別けられ、Ⅰ期が18点、Ⅱ期が25点、Ⅲ期が７点を数え、その他に12～16世紀の包含層から出土したため細かな時期区分ができない骨が9点を数える。

出土した動物遺存体のうち哺乳類はイノシシが２点、シカが4点、イヌが１点、ウマが4点、小型のイルカ類が8点、クジラ類が５点、大きさからイルカ･クジラの区別がつかないものが8点、イノシシ･シカが８点、ウシ･ウマが２点出土した。時期別ではⅠ期はイノシシ･シカ（１点）、イルカ類（2点）、シカ（３点）、ウマ（１点）、イヌ（1点）、Ⅱ期がウシ・ウマ（２点）、ウマ（1点）、イノシシ・シカ（６点）、イノシシ（２点）、シカ（１点）、クジラ類（3点）、イルカ･クジラ類（6点）、Ⅲ期がウマ（1点）、イルカ類（２点）、大型歯クジラ類（１点）、イルカ・クジラ類（１点）を数える。Ⅰ期は肉を目的に捕獲されるイノシシ・シカを合わせて4点、家畜であるウシ、ウマ、イヌが2点、海棲哺乳類が2点、Ⅱ期はイノシシ・シカで9点、ウシ・ウマが3点、海棲哺乳類が9点を測る。Ⅲ期はイノシシ・シカが0点、ウシ・ウマが1点、海棲哺乳類4点である。Ⅱ期で9点と多く出土したイノシシ、シカはⅢ期では出土していない。

出土数が少なく詳細な分析を行うのには不適ではあるが、これまでの博多遺跡群から出土した哺乳類の傾向として古墳時代後期～古代はイノシシ・シカがほとんどで、古代～中世前半はイノシシ、シカに加えてウシ、ウマなどの割合が増加する。その後13世紀に入るとイルカ・クジラ類の海棲哺乳類が目立ちはじめ、14世紀以降は哺乳類の中で海棲哺乳類の割合が陸棲哺乳類を超える傾向があり、146次調査の出土傾向もそれに沿ったものと言える。14世紀以降に海棲哺乳類の割合が増える理由はいろいろと考えられるが、捕獲技術の改良（数十から数百頭の群れを囲い込むための大型網の出現）などが要因のひとつと考えられる。また、Ⅲ期で出土したウマの部位は中手骨もしくは中足骨であるが、これは長さ20㎝強の直線的な骨で中世後半から近世ではウシの中手骨、中足骨と共に骨角器の素材として多く利用される部位であり、今回出土した骨も骨角器の素材として利用することを目的として持ち込まれた可能性がある。

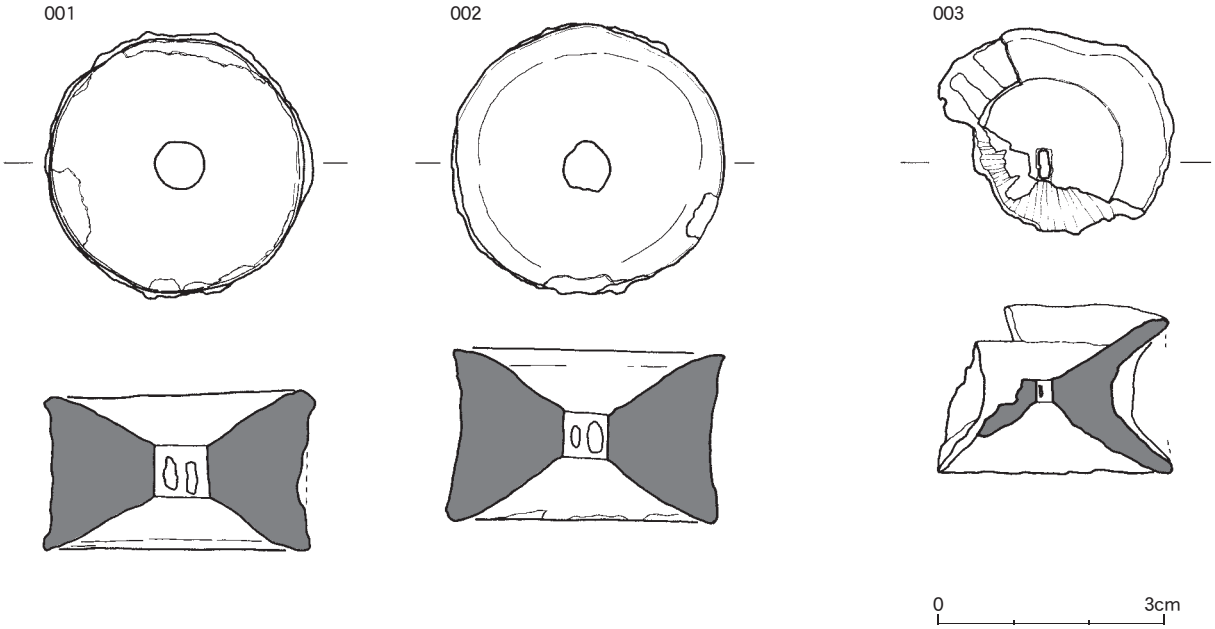
鳥類は近代攪乱からの出土である。遺存状態が悪く風化が進んでいるため、遺構からの紛れ込みの

可能性がある。残りが悪く種の特定は出来ないが、部位は仙骨の遠位側で、近位側とは刃物で切断されている。大きさはニワトリ程度である。

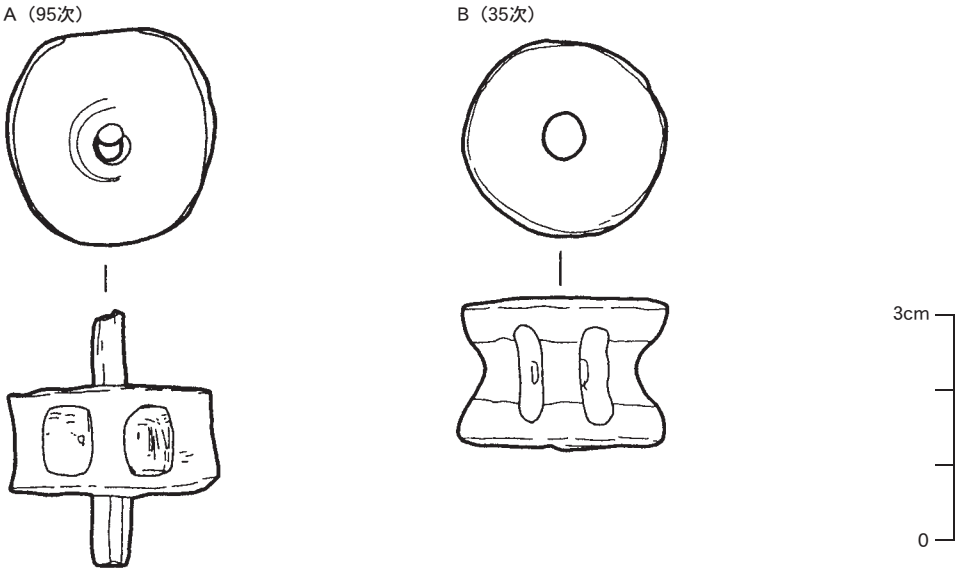
魚類はサメ・エイ類（4点）、フグ類（2点）が出土した。マグロ類と推定される大型魚類の椎骨は近代攪乱から出土しており、遺存状態からも新しいと思われることから統計から除外する。その他の魚骨はすべてⅡ期の14 ～ 15世紀に属する。フグ類は歯骨と前上顎骨が1点ずつで同じ土坑からの出土である。フグ類は博多遺跡では多く出土する魚類の一種である。出土するフグ類の前上顎骨や歯骨の大きさは大小様々なものがみられ、多様な種を食用にしていたものを思われるが、今回出土したのは遺存長が2.3㎝と大形である。出土した土坑は鉄滓廃棄土坑とされる。鉄滓と動物遺存体が混在しているのか、鉄滓廃棄後食料残滓を廃棄したのかは不明であるが、同じ土坑からは他にもウマ、イルカ類、大型クジラ類の下顎等も出土しており、製鉄関連の工房と生活空間が近接していたものと考えられる。他にはサメ・エイ類の椎骨が14 ～ 15世紀の溝（SD08）から3点、12 ～ 16世紀の土坑（SX12）から1点出土した。このうちSD08から出土した3点の椎骨は軸の中心に穿孔を施しており、骨角器として利用したものである。（第１図001 ～ 003）。孔の大きさは001が円形で径6.8㎜、002はやや五角形を呈す円形で径6.6㎜を測る。003は長方形を呈し、長辺が3.5㎜、短辺が2.1㎜を測る。穿孔には小型の鑿等を使用したと思われ、孔の縁は鋭く擦れなどによる摩滅はみられない。このように中心軸部分に穿孔したサメ・エイ類の椎骨はこれまでの博多遺跡群の調査で数点出土している（第２図A・B）が、用途としては博多遺跡第95次調査地点で出土したAの穿孔部分に長さ3.3㎝、径4.5㎜の木の棒が差し込まれた状態で出土したことから、玩具の独楽として使用されたと推定されている。003は軸孔が長方形を呈し、孔の径も小さい。この穿孔タイプは現在まで他に例をみない。他の用途に使用されたものか。

小結　出土点数が少なく詳細は不明であるが、これまでの博多遺跡群の動物遺存体の出土傾向と似た様相を示す。穿孔されたサメ・エイ類の椎骨は現在の所独楽と考えているが、すべてが同じ用途とは限らないため、今後も出土状況や形状、穿孔部の摩滅等を細かく観察していく必要がある。

※動物遺存体の同定には独立行政法人奈良文化財研究所環境考古学研究室の現生資料を使用した。
※新修『福岡市史　資料編考古３』 2011年3月31日　福岡市



第１図　第 146 次調査出土骨角器実測図（1/1）



第２図　博多遺跡出土 サメ・エイ椎骨製骨角器実測図（1/1）

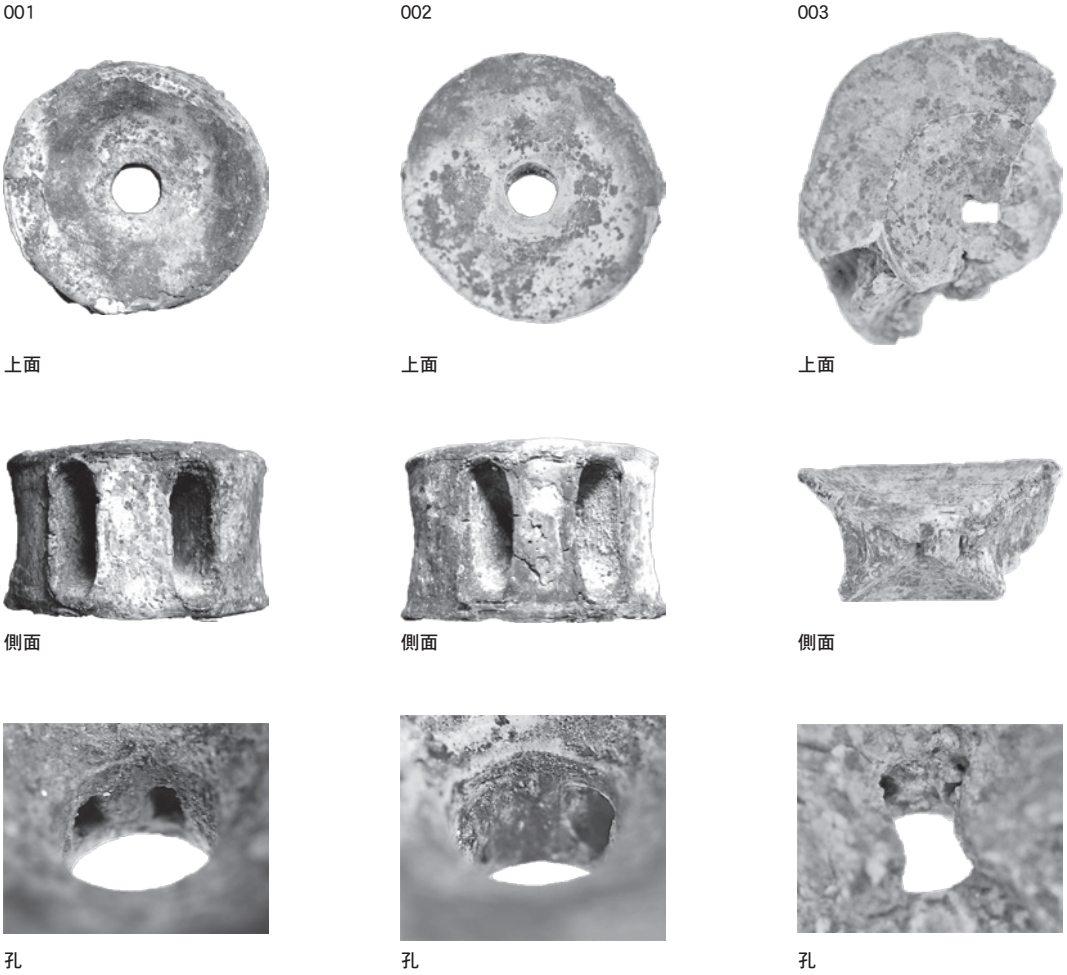
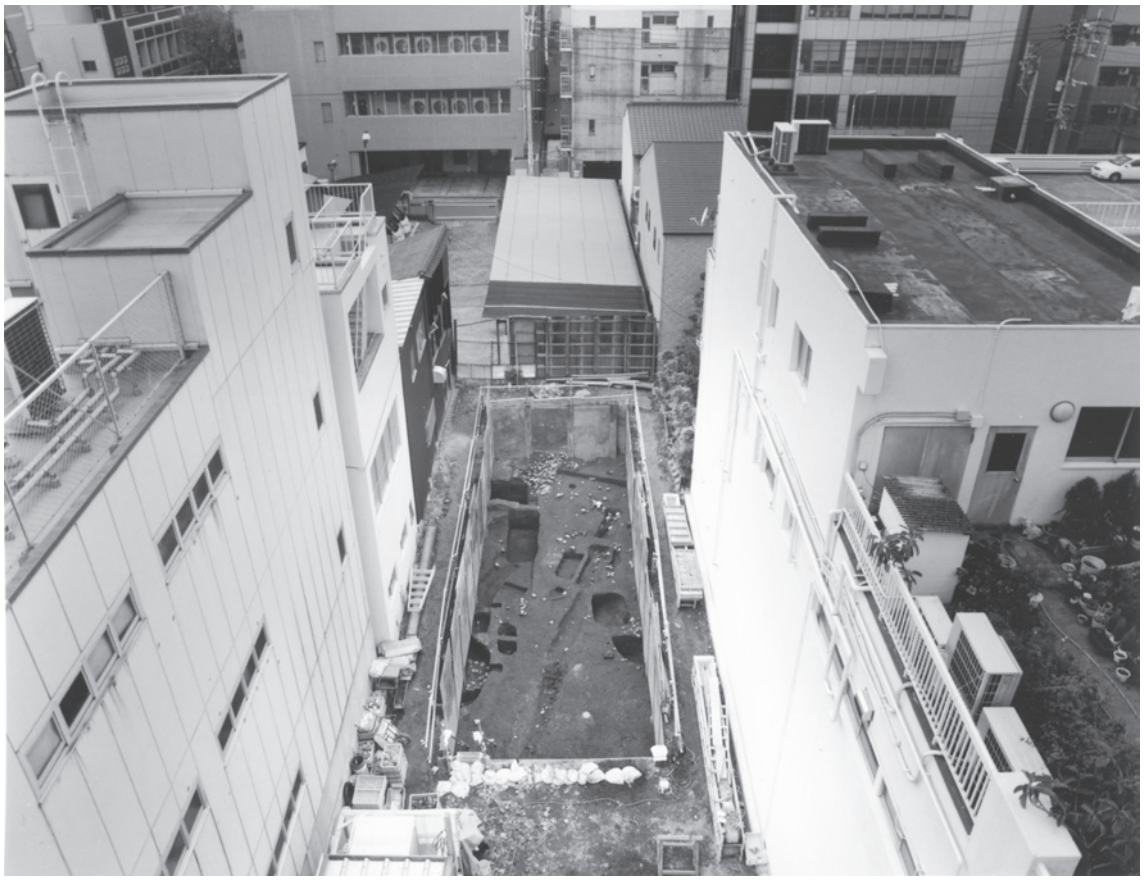


写真　第 146 次調査出土骨角器

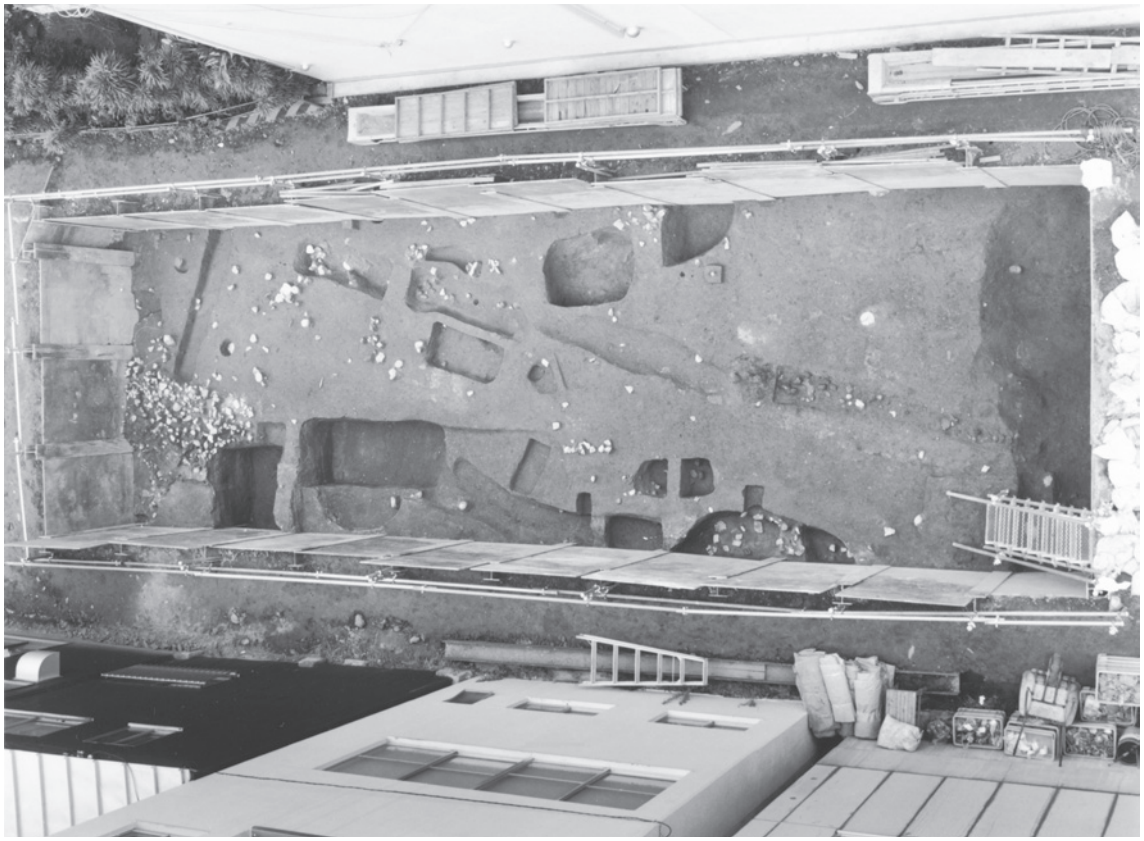
報告番号	地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分１	部分２	成長度	切　　痕	火　熱	備考	時代	取上げ番号	同定番号	
001	1面 SD08-1区	下層	魚類	サメ・エイ類	椎骨		径3.5cm	長さ2.16cm	不明	中心に径6.8mmの穿孔	黒色化	骨角器	14 ～ 15C	1	027	
002	1面 SD08-1区	下層	魚類	サメ・エイ類	椎骨		径3.34cm	長さ2.0cm	不明	中心に径6.6mmの穿孔	黒色化	骨角器	14 ～ 15C	1	028	
003	1面 SD08-1区	下層	魚類	サメ・エイ類	椎骨		破片		径3cm強	中心に長方形の穿孔	なし	骨角器	14 ～ 15C	1	042	
004	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	ウシ・ウマ	上腕骨		骨頭関節面小片		未骨化	なし	不明		14 ～ 15C	1	029	
005	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	イノシシ	上腕骨		遠端滑車の一部		骨化済み	なし	なし		14 ～ 15C	1	045	
006	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	イノシシ・シカ	大腿骨		骨頭小片		化骨化済み	なし	なし		14 ～ 15C	1	043	
007	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		端部		未骨化	あり	なし		14 ～ 15C	1	044	
008	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	イノシシ・シカ	大腿骨		骨頭部関節面		未骨化	ナタ痕あり	なし		14 ～ 15C	1	046	
009	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		骨端		未骨化	なし	なし		14 ～ 15C	1	047	
010	1面 SD08-1区	下層	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		骨端		未骨化	なし	なし		14 ～ 15C	1	048	
011	1面 SD08-1区	下層溝　R4	哺乳類	シカ	脛骨	右	近端関節面のみ	後側欠損	未骨化	なし	なし		14 ～ 15C	2	031	
012	1面 SD08	ベルト東	哺乳類	不明	長骨小片				不明	不明	白色化	表面にネズミ等の引っ掻き傷あり	14 ～ 15C	19	004	
013	1面 SD08	ベルト西	哺乳類	不明	骨小片		不明		不明	不明	不明	細片化	14 ～ 15C	20	005	
014	1面 SD15-1区		哺乳類	クジラ類	椎骨		横突起の一部か		不明			扁平な板状	14 ～ 15C	21	006	
015	1面 SD15-2区	ベルト底	哺乳類	クジラ類	不明				不明	ナタ痕あり	なし	大型	14 ～ 15C	3	050	
016	1面 SD15-3区	上面SX13	哺乳類	イルカ・クジラ類	骨小片		不明		不明	不明	不明		14 ～ 15C	22	007	
017	1面 SX05	攪乱	鳥類	不明	仙骨		遠位部		不明	上側は刃物による切断	不明	遺存不良	近代攪乱	7	054	
018	1面 SX05	攪乱	魚類	マグロ類	椎骨		椎体の一部欠損		不明	あり	なし	椎体長5.6cm以上	近代攪乱	7	055	
019	1面 SX05	攪乱	哺乳類	イルカ類	椎骨		椎体の一部		化骨化済み	なし	なし		近代攪乱	28	014	
020	1面 SK07		哺乳類	イルカ･クジラ類			不明		不明	端部に刃物痕	一部黒色化	円形に加工か	15C	23	008	
021	1面 SK07		哺乳類	イルカ･クジラ類	頭骨		上顎吻部	小片	不明	新しい？	なし		15C	24	009	
022	1面 SX09		哺乳類	ウマ	中手(足)骨		近位部	径の1/2欠損	化骨化済み	不明	なし		16C	8	049	鉄滓廃棄遺構
023	1面 SX09		哺乳類	イルカ類	肋骨小片				不明	なし	不明		16C	9	034	鉄滓廃棄遺構
024	1面 SX09	西側	哺乳類	大型歯クジラ類	下顎		遠端のみ		不明	ナタによる切断	不明	歯茎孔径2.6cm	16C	10	035	鉄滓廃棄遺構
025	1面 SX09	西側	哺乳類	イルカ類	椎骨		椎体のみ		椎端板未化骨化	なし	なし	椎体径3.5cm	16C	10	036	
026	1面 SX09	内	哺乳類	イルカ・クジラ類	椎骨		椎頭窩関節板の一部		未化骨化	なし	なし		16C	29	015	鉄滓廃棄遺構
027	1面 SX09	内	魚類	フグ類	前上顎骨	左？						遺存不良	16C	29	016	鉄滓廃棄遺構
028	1面 SX09	内	魚類	フグ類	指骨	左？						遺存不良	16C	29	016	鉄滓廃棄遺構
029	1面 SK10		哺乳類	クジラ類	椎骨？				不明	なし	なし		15C	25	010	
030	1面 SK10		哺乳類	イルカ・クジラ類？	不明				不明	なし	不明		15C	25	011	
031	1面 SK10		哺乳類	ウシ・ウマ	上腕骨		遠端関節面の一部		不明	なし	不明		15C	25	012	
032	1面 SK10	R4	哺乳類	イノシシ	尺骨	左	近位部	近位肘頭隆起欠損	化骨化済み	半月欠損部に外側からナタ痕	なし		15C	4	041	
033	1面 SX12-1区	上層	哺乳類	不明	小片		髄部のみ						12 ～ 16C	30	017	第1面下包含層
034	1面下 SX12-1区	中層	哺乳類	イルカ類	椎骨		椎体のみ		椎端板未化骨化	なし	不明	椎体径　3.6cm前後	12 ～ 16C	11	032	第1面下包含層
035	1面 SX12-2区	上層	哺乳類	ウマ	上顎歯 1本	左			老獣			歯冠高21.4mm、L=24.0mm　小型	12 ～ 16C	33	019	第1面下包含層
036	1面下 SX12-2区	中層	魚類	サメ・エイ類	椎骨		径の1/2欠損		径35cm以上	なし	なし		12 ～ 16C	34	020	第1面下包含層
037	1面下 SX12-3区	中層	哺乳類	不明	小片		髄部のみ						12 ～ 16C	36	023	第1面下包含層
038	1面 SX12	上層黒灰色砂質土（中1面下遺構面）	哺乳類	ウマ	切歯片							遺存不良	12 ～ 16C	37	024	第1面下包含層
039	1面 SX13	整地面？	哺乳類	イルカ・クジラ類	不明				不明			緻密質の厚さは1cm弱	12 ～ 16C	38	025	第1面下整地面か
040	1面 SK14		哺乳類	イルカ・クジラ類	小片				不明	不明	不明		14 ～ 15C	26	013	
041	1面下 SK14		哺乳類	イルカ・クジラ類	頸椎？		小片		不明	なし	不明		14 ～ 15C	5	033	
042	1面 SK19	骨1	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		幹部		不明	不明	不明	取り上げ後細片化	15C	6	040	
043	1面下 包含層	SX12-1中層	哺乳類	イルカ類	頭骨		吻部小片		不明	なし	なし		12 ～ 16C	31	018	
044	1面 遺構面掘下中	SX01南側	哺乳類	イルカ類	椎骨		椎体の一部	と横突起の一部	椎端板未化骨化	不明	不明		12 ～ 16C	39	026	
045	2面 SE24	井筒	哺乳類	イノシシ・シカ？	長骨		幹部		不明	あり	なし	割れ口ややスパイラルを呈す	12C後半	12	037	
046	2面 SE24	井筒	哺乳類	不明	長骨		幹部		不明	なし			12C後半	12	038	
047	2面 SK34	R3	哺乳類	イルカ類	下顎		小片		不明	なし	なし		12C後半	13	039	
048	2面 SK34	R4	哺乳類	イルカ類	頭骨		頭頂から後頭部		吻部未骨化	なし	不明		12C後半	14	030	
049	2面 SK34	上層　R6	哺乳類	シカ	脛骨	右	遠位部		化骨化済み	なし	なし	Bd33.4mm　、Dd25.5mm	12C後半	15	051	
050	2面 SK34	上層　R6	哺乳類	シカ？	脛骨	左	遠位部		未骨化	なし	なし		12C後半	15	052	
051	2面 SK34	上層　R6	哺乳類	イノシシ・シカ	脛骨	左	近位部	近端関節面欠損	不明	不明	不明	表面遺存不良	12C後半	15	053	
052	2面 SK34	R8	哺乳類	クジラ類	椎骨		椎体のみ		化骨化済み	あり	なし	棘突起、横突起（右）は刃物による切断	12C後半	16	003	
053	2面 SK34	東側	哺乳類	ウマ	上腕骨	左	遠端	外側半分が欠損	化骨化済み	不明			12C後半	17	001	
054	2面 SK34	土層面	哺乳類	シカ	脛骨	右	遠位端欠損	中央部細片化	化骨化済み	あり	なし	近端関節面にナタ痕、側面に切痕	12C後半	18	002	
055	2面 遺構検出	SX12-2区	哺乳類	イヌ	大腿骨	右	遠位部欠損	骨頭部	化骨化済み				12 ～ 13C	35	021	
056	2面 遺構検出	SX12-2区	哺乳類	不明	小片 7点								12 ～ 13C	35	022	

表１　第 146 次調査出土動物遺存体一覧

PL. 1



（1） 第 146 次調査区全景（東から）



（2） 第 1 面調査区全景近接（東から）

PL. 2

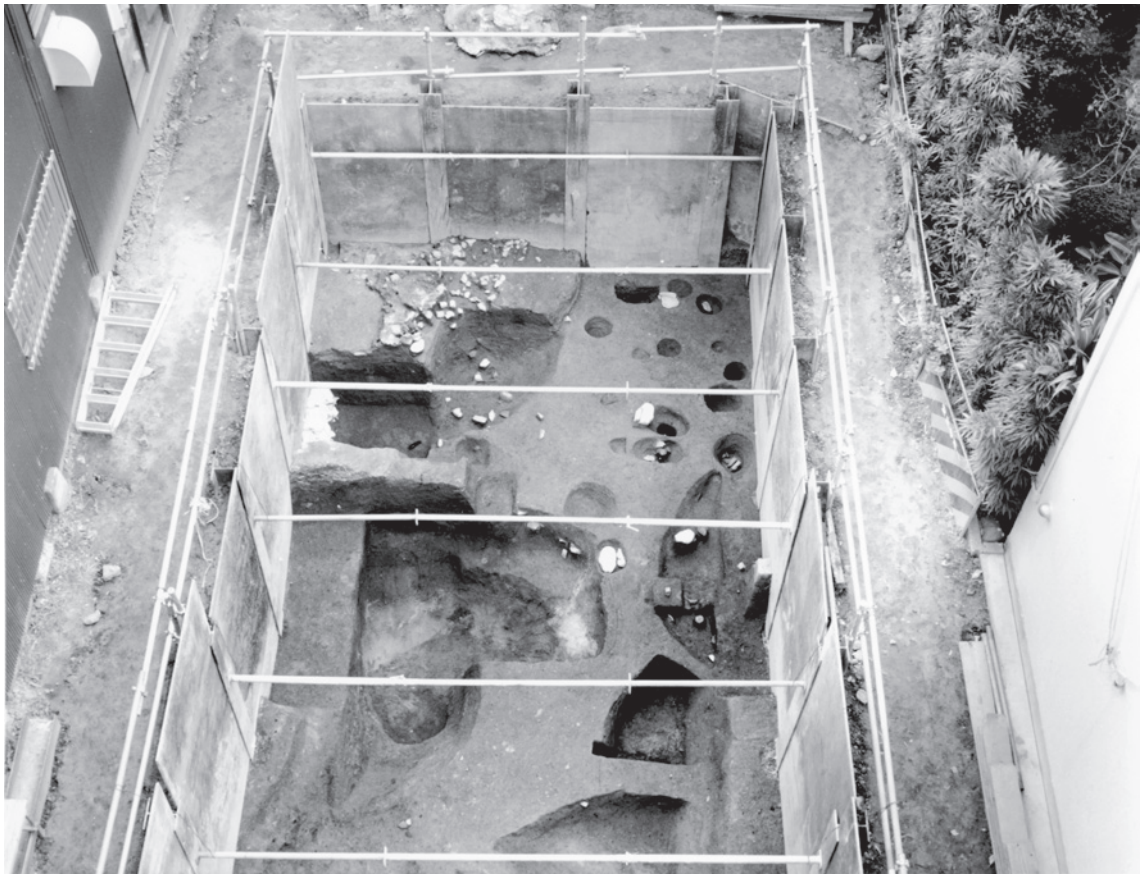
（1） 第 1 面調査区西側（東から）

（2） 第 1 面調査区東側（東から）

（3） SD08 東側完掘（東から）

PL. 3

（1） 第２面全景（東から）

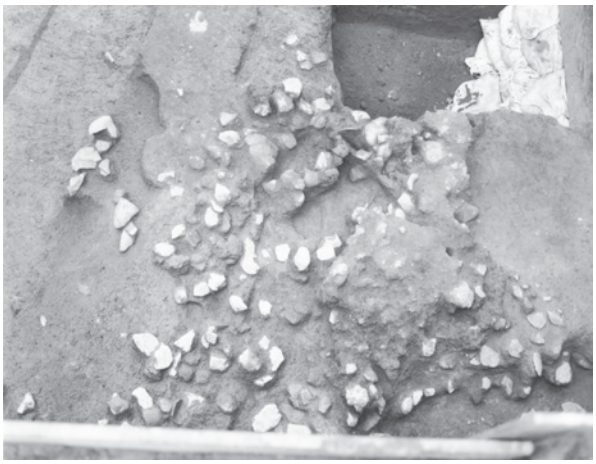


（2） 第２面調査区西側（東から）

PL. 4

（1） 第 2 面西側ピット群（南東から）

（2） 第 1 面 SX09 近接（北から）



（3） SX09（西から）

（4） SD15（SX09 下）（西から）

（5） SX09、SK34 土層断面（東から）

PL. 5

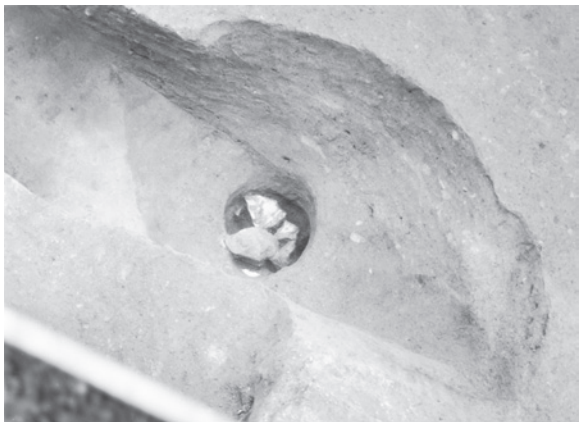
（1） SD15（北西から）

（4） SX11（東から）

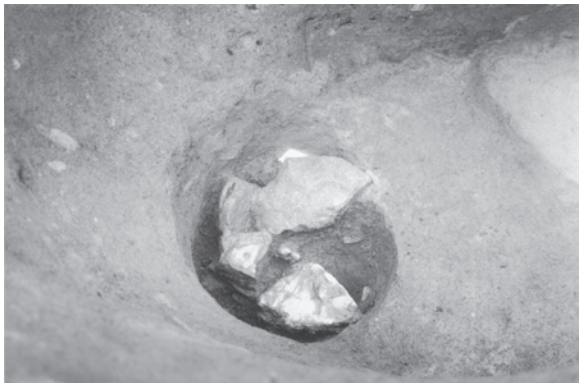
（5） SP18・25・26 礎石建物か（東から）

（2） SK19（東から）

（3） SK22（南東から）

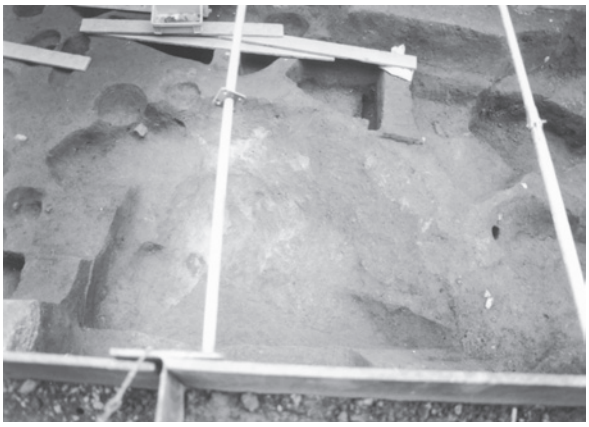


（6） SE24（南から）



（7） SE24 井筒（北から）

PL. 6



（1） SE31（南から）

（2） SK26（南から）

（3） SK27（北から）

（4） SK32（南から）

（5） SK37（北から）

（6） SK34（南東から）

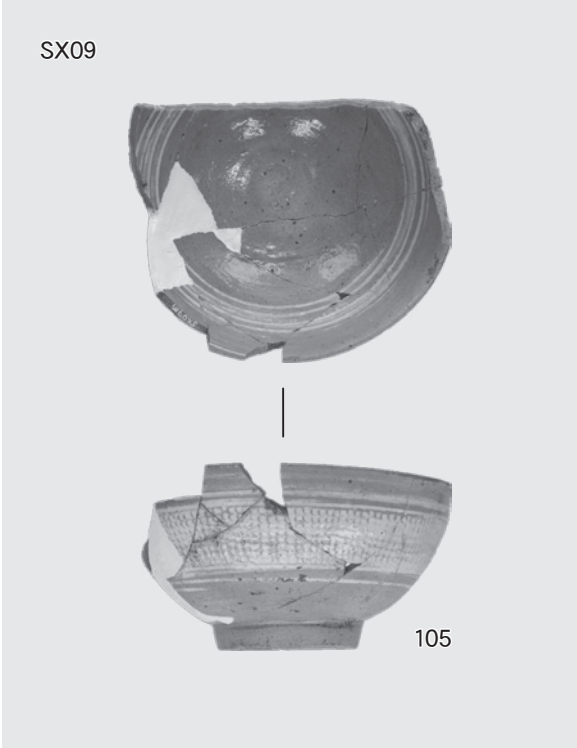
（7） SK42（南東から）

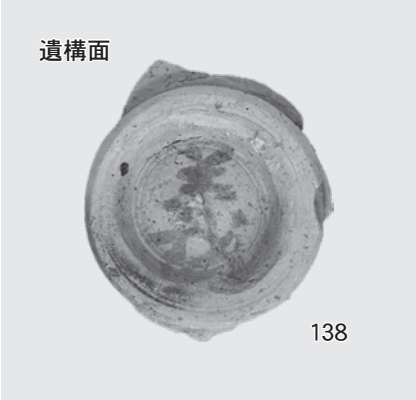
（8） SX28（西から）

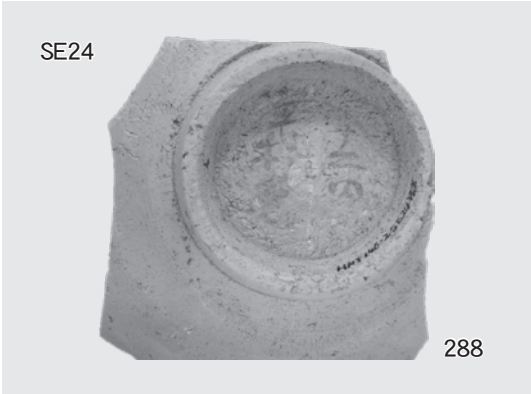
PL. 7

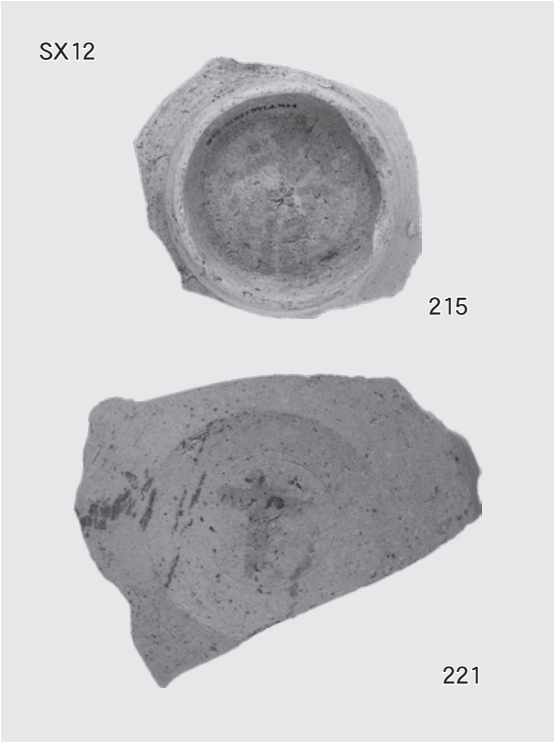
（1） 第２面２トレンチ出土遺構（東から）

（2） 第２トレンチ北壁土層断面（南から）



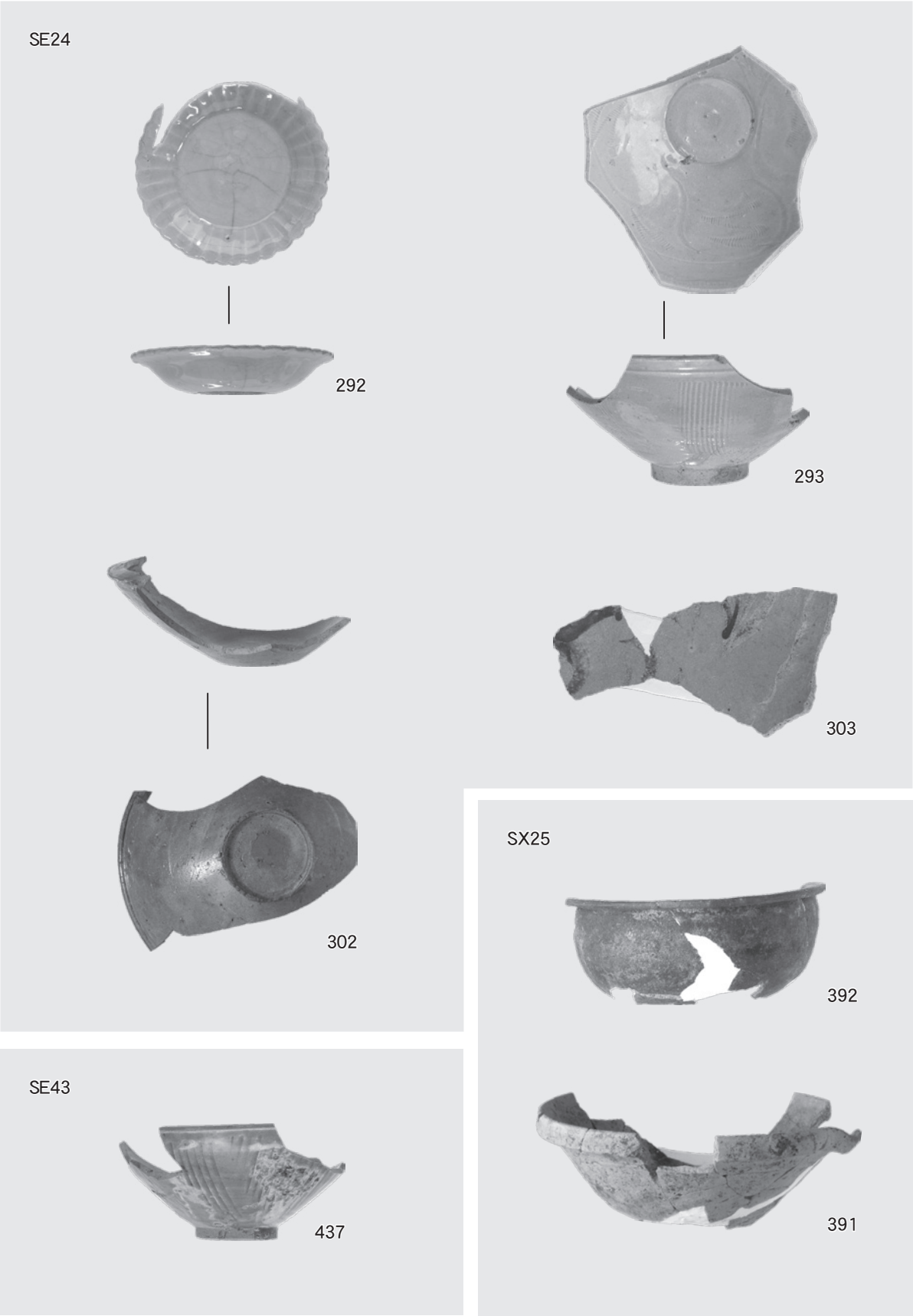






（3） 各遺構出土遺物１

PL. 8



各遺構出土遺物 2

麦野Ａ遺跡第２次調査

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

昭和 58(1983)年、福岡市博多区麦野５丁目 24・42・81 に共同住宅建設の事前審査の申請が提出されたので、事前調査を行った結果、埋蔵文化財を確認した。個人による開発で、施工業者も既に決定しており、緊急性を要することから、事前審査担当職員が調査を担当して実施した。調査費用は調査期間も短期であったので、国庫補助金を適用した。調査にあたっては、施工業者の現場事務所を借りるなど現物の協力を得た。本調査は昭和 58 年７月 15 日～７月 25 日まで実施した。調査にあたっては、申請者及び施工業者の皆様に多大な協力を受けました。記して感謝の意をします。

２　調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　昭和58年度：文化課長　生田征生　埋蔵文化財第２係長　折尾　学

平成23年度：埋蔵文化財第２課長　田中壽夫　調査第２係長　菅波正人

調査庶務担当　平成23年度：埋蔵文化財第１課管理係　井上幸江

調査担当　文化課埋蔵文化財第２係事前審査担当　山崎龍雄（現 埋蔵文化財センター）

田中壽夫（現 埋蔵文化財第２課長）

整理担当　山崎龍雄　**整理作業**　橋本博子

３　立地と歴史的環境

調査地が立地する麦野 A 遺跡は春日丘陵から博多区比恵・那珂まで続く低丘陵上に立地する。現在麦野Ａ遺跡での調査件数は21か所を測る。本遺跡の周辺には麦野Ｂ遺跡や麦野Ｃ遺跡、南八幡遺跡、高畑遺跡などが分布し、旧石器時代からの遺跡が連綿と続く歴史的環境がある。地形や歴史的環境の詳細については既刊の麦野 A 遺跡の報告書などに記述されているので参照されたい。

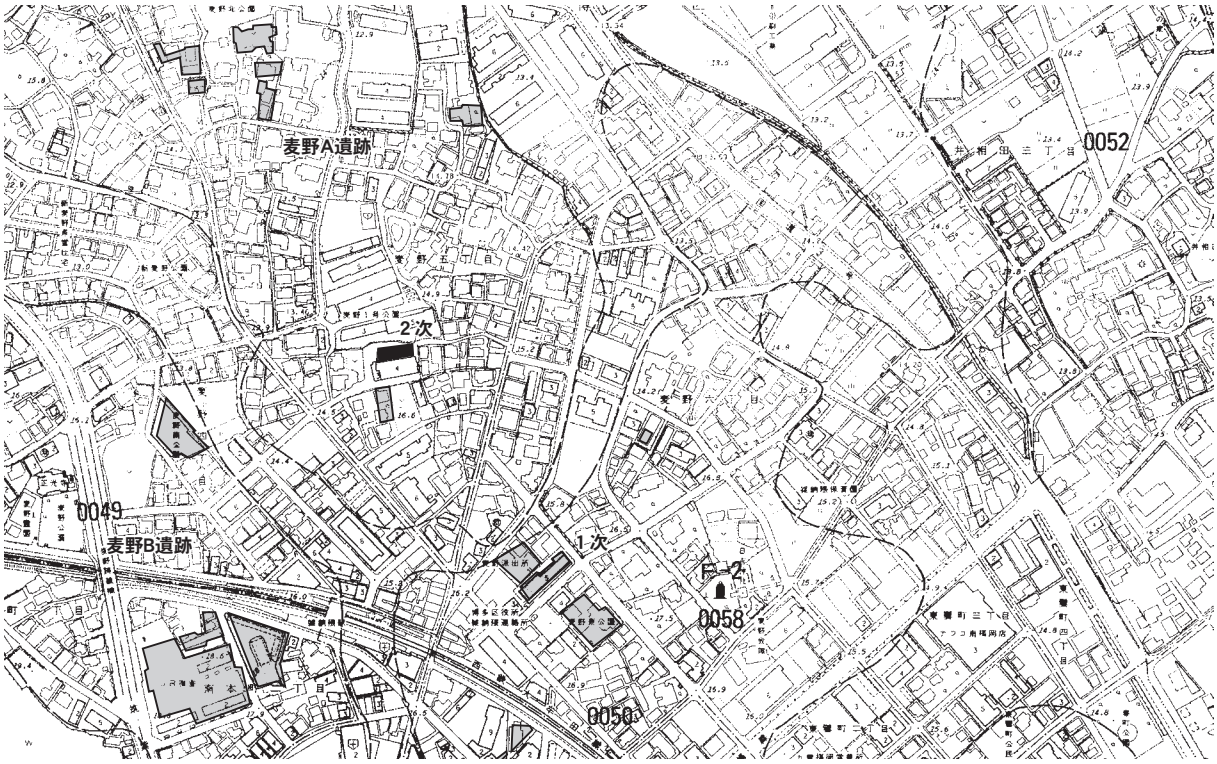


Fig.1　麦野 A 遺跡第２次調査地点位置図（1/6,000）

第２章　調査の記録

１．調査の概要（Fig. ２・３、PL. １・２）

調査地は博多区麦野５丁目 24・42・81 に所在する。調査区は２区に分かれ、西側をⅠ区、東側をⅡ区とする。遺構面は表土直下の八女粘土面で検出した。Ⅰ区は５×６ｍの方形の調査区。この区では溝２条を検出した。Ⅱ区は調査地東側の 6.7 × 16.8 ｍの長方形の調査区。溝３条、井戸４基、土坑４基以上、ピットなどである。遺構の時期は江戸時代が中心であるが、古代８世紀の遺物も多く含み、奈良時代の遺構もあったと思われる。

２．Ⅰ区の調査

①　溝状遺構

SD01（Fig. ３・４・６、PL. ３－１，４－１・３）　Ⅰ区南西から北東方向に延びる溝。北側で SD02 を切る。溝幅は西側で 1.5 ｍ、東側で 3.5 ｍ、深さは西側で 0.5 ｍを測る。溝断面は緩やかな箱薬研堀形を呈す。埋土は上層暗褐色粘質土、下層茶褐色粘質土で、炭化物粒を含みパサパサしていた。

出土遺物　近世の陶磁器、土師器・瓦質土器など日常雑器が中心であるが、古代の須恵器も少量出土した。出土遺物の中心は 18 世紀前半頃である。**１**は上層出土。瓦質土器鉢の口縁部小片。内面は細かいハケ目、外面はナデで指押え痕が残る。外面灰色を呈す。**２**は肥前磁器の染付大皿。1/3 片で口径 31.8㎝、器高 5.1㎝、底径 17.0㎝。呉須で見込みに草花文、外面唐草を描く。全体に薄透明釉がかかり焼成は良好。肥前磁器Ⅳ期 18 世紀前半のもの。**３**は楕円形の輪花状に型打した白磁小皿 1/2 片。長軸長 5.6㎝、器高 1.9㎝。紅皿か、肥前磁器Ⅲ～Ⅳ期のもの。**４**は染付の瓶 1/2 片。口縁部は欠損。Ⅳ期 18 世紀前半のもの。**５**は陶器小皿で高台部を一部欠く。口径 9.6㎝、器高 2.9㎝。灰赤から暗赤褐色釉の施釉。**６**は土鈴。ほぼ完形で全長 3.7㎝、幅 2.9㎝、厚さ 2.4㎝。色調鈍い橙色を呈す。

SD02（Fig. ３・４・６、PL. ３－１・２）　SD01 に切られる東西溝。溝幅は 1.3 ～ 1.6 ｍ、深さ 0.95 ｍを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘質土、中層が暗茶褐色粘質土から褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土である。

出土遺物　近世陶磁器、中国輸入磁器の同安窯系青磁、古代の土師器・須恵器が少量出土。**７**は青磁皿 1/2 片。口径 14.2㎝、器高 3.1㎝。畳付は露胎。**８**は須恵器壺底部 1/2 弱片。高台径 10.8㎝。外面はケズリ、内面は回転ナデ。大宰府編年Ｂ -1 期で８世紀前半。**７・８**いずれも下層出土。

３．Ⅱ区の調査（Fig. ３、PL. ２－１・２）

①　溝状遺構

SD03（Fig. ４・６、PL. ３－５）　調査区北西側、SE02 と切り合う溝の一部。詳細は不明。埋土は暗褐色粘質土が主体か。

出土遺物　古代の土師器・須恵器が出土。**９**は土師器坏。1/3 片で復元底径 7.6㎝。外底部はヘラ切り。**10** は黒色（内黒）土器Ａ類椀。底部 1/2 片で高台径 8.6㎝。調整は高台部ナデ、内面はミガキ。大宰府 C－２期で９世紀後半か。**11・12** は土師器の甕。口縁部 1/6 片・1/8 片で口径 17.0㎝・19.0㎝。胴部外面はナデで **11** はハケ目が残り、内面はケズリ。**12** はススが内面に付着する。**13** は土師器把手片。扁平な形状で外面指ナデ、内面ケズリ。**14** は須恵器坏。1/2 片で口径 12.2㎝、器高 3.9㎝。底部には高台が付く。体部調整は回転ナデ、底部はケズリ。

SD04（Fig. ３・７、PL. ３－３）　調査区北東側南西に延びる溝。確認規模は長さ６ｍ、最大幅１ｍ、深さ 0.2 ｍ。埋土は黒褐色粘質土で地山粒子を含む。

出土遺物　近世の陶磁器などと古代の土師器・須恵器などが少量出土。**15** は江戸後期の陶器土瓶蓋か。1/4 弱欠損。受部径 7.3㎝。外面は灰褐色釉で、受け部内は露胎。**16** は土師器坏か椀。直立し内傾する口縁を持つ。1/4 片で口径 12.0㎝。器壁は傷みが激しい。**17** は瓦質土器火鉢底部。脚が付く。**18** ～ **22** は土師器。**18** ～ **20** は甕。1/6 片弱・1/6 片・1/2 弱片、口径 14.2㎝・26.0㎝・24.0㎝。いずれも器壁の傷みがひどいが、胴部内面はケズリ。色調は鈍い橙色か橙色。古代８世紀前半頃のもの。**21** は扁平な把手片。幅 4.3㎝、厚さ 0.9㎝。調整不明。**22** は甑口縁部 1/6 片。復元口径 24.0㎝。調整は内面ケズリ。**23** ～ **26** は須恵器。**23** は高台が付く坏底部 1/4 片。高台径 9.0㎝。底部ケズリ、体部はナデ。**24**・**25** は蓋。**24** は摘みが付く。天井部外面はケズリ、体部内外面はナデ。**25** は 1/6 片で口径 15.4㎝を測る。天井部外面へラケズリ、口縁部・体部から内面はナデ。**26** は長頸壺の体部 1/3 片。外面自然釉がかかる。いずれも８世紀前半頃か。**27** は砥石片。石材は砂岩。残存長 9.6㎝、幅 4.4㎝、厚さ 5.8㎝。使用面は４面。

SD05（Fig. ３・７、PL. ３－３，４－３）　調査区中央で検出した南北溝。確認長６ｍ、幅 0.4 ｍ、深さ 0.1 ～ 0.25 ｍを測る。埋土は暗茶褐色土である。

出土遺物　国産陶器と砥石など少量出土。**28** は肥前陶器の角皿。口縁部が 1/4 残り、口径 17.2㎝、器高 5.2㎝。オリーブ灰色の藁灰釉がかかるが、高台部は兜巾状に削りだし露胎。見込みは４か所胎土目痕が残り、灰褐色から乳白色釉で文様を描く。16 世紀末か。**29** は砥石片。残存長 7.6㎝、幅 4.0㎝。石材は花崗岩質。３面使用している。

SD06（Fig. ３、PL. ３－４）　調査区東壁際で検出した溝。埋土は暗茶褐色粘質土で、炭化物を含みパサパサする。**出土遺物**は中世から近世の陶磁器、古代土師器片などが少量出土。

②　井戸

SE01（Fig. ３・８・９、PL. ３－５，４－３）　調査区西側で検出した不整円形土坑。長軸長 2.8 ｍ、短軸幅 2.45 ｍを測る。調査期間の関係から未掘で、0.9 ｍ程掘下げている。埋土は黒褐色粘土と黄灰色八女粘土ブロックの混合で、下部礫石を含む。

出土遺物　近世の陶磁器、土師質土器、瓦類が少量出土。**30**・**31** は肥前磁器染付。**30** は蓋か。1/2 片で口径 9.9㎝、器高 3.0㎝。18 世紀代のもの。**31** は碗。1/3 片で復元口径 9.0㎝。18 世紀末頃か。**32** はヒョウソク。口径 6.5㎝、器高 3.7㎝。暗赤褐色釉がかかるが、外底部露胎。18 世紀のもの。いずれも上層出土であり、遺構は 18 世紀末以降に埋没したのであろう。**60** は碾臼の下臼 1/2 片で直径 30.3㎝、厚さ 8.2㎝。６区画の臼で溝は使用により磨り減るが、最大９条残る。**61** は凹石。長さ 8.1㎝、幅 11.2㎝、厚さ 4.5㎝。上面使用により大きく窪む。**60** と **61** の石材は砂岩。**62**・**63** は砥石片。残存長 10.6㎝、15.0㎝。いずれも石材は花崗岩。**64** は鉄製の角釘。先端破損するが残存長 13.8㎝を測る。**60** 以外は上層出土。

SE02（Fig. ３、PL. ３－５）　SE01 に切られる井戸で未掘。埋土は SE01 より暗く、黒褐色粘土を多く混入する。**出土遺物**は近世の陶磁器などが少量出土した。遺物から近世の時期であろう。

SE03（Fig. ３・５・８、PL. ３－６，４－３）　SE04 に切られる円形井戸。規模は長軸長 3.5 ｍ、短軸幅 3.2 ｍ、深さ 1.1 ｍを測る。未掘であり、井筒の状況は不明。埋土は暗茶褐色粘質土から黒褐色粘質土、黒色砂混じり土で、炭化物を多く含む。

出土遺物　古代から中世にかけての遺物が出土。**33** ～ **36** は土師器皿。**33** は 1/4 片で復元口径 12.0㎝、器高 1.7㎝。底部は丸味を持つ。**34** は 1/6 片。口径 13.0㎝、器高 1.5㎝。**35** は 1/2 弱片で口径 13.6㎝、器高 1.4㎝。**36** は 1/6 片。口径 17.4㎝、器高 2.2㎝。**33** ～ **36** の器壁は摩滅し調整不明だが、**36** はナデ、**34**・**36** の外底部は回転ケズリ。**37** は坏 1/4 弱片。口径 16.2㎝、器高 2.7㎝。体部調整はナデ、外

底部ケズリ。形態から９世紀前半頃の時期か。**38** は甕口縁部 1/3 片。口径 24.2cm。調整は外面ナデで、内面はケズリ、胴部外面には把手が外れた痕跡が残る。**39** ～ **43** は須恵器。**39** は蓋 1/8 片。復元口径 15.0cm。調整はナデ。**40** ～ **42** は高台の付く坏。**40**・**41** はいずれも 1/2 弱片で、口径 13.3cm・13.0cm、器高 3.9cm・3.5cm。**42** は底部 1/2 弱片で復元高台径 7.6cmを測る。体部調整は回転ナデ、外底部回転ヘラケズリ。８世紀前半のもの。**43** は高台が付く壺の底部。1/2 弱片で、高台径 10.0cm。体部調整は回転ナデ、外底部回転ヘラケズリ。**44** は土師質の鍋。1/2 弱片で口径 35.3cmを測る。調整は外面ナデとハケ目、内面ヨコのハケ目が密に入る。内外面使用によるススが付着する。破片が SE04 部分からも出土している。**45**・**46** は土師器甕。いずれも 1/8 片で、口径 18.6cm・21.9cm。調整は、**45** はナデで内面指押え痕残る。**46** は外面ナデで内面ヘラケズリ。**47** は把手片。断面円形を呈す。調整はケズリで傷みがある。**48** ～ **52** は須恵器。**48** は摘みの付く蓋 1/2 片。口径 11.6cm、器高 1.8cmを測る。調整はナデ、天井部は回転ヘラケズリ。８世紀後半のもの **49** ～ **52** は高台付坏。**49**・**50** は口縁から底部 1/2 片・1/6 片で、口径 10.6cm・14.0cm、器高 3.7cm・3.5cm。調整は体部回転ナデ、**49** の外底部は回転ケズリ。**51**・**52** は底部 1/3 片・1/6 片で、高台径 8.6cm・10.4cm。高台部は貼付け。古代の遺物が多いが遺構の時期は中世末土鍋の時期である。

SE04（Fig. ３・５・９、PL. ３－６，４－２・３） SE03 を切る円形井戸。未掘であるが、規模は長軸長 3.2 m、短軸幅 2.6 m、深さ 1.5 mを測る。埋土は上層は褐色粘質土から灰褐色粘質土・暗茶褐色粘質土が主体、中･下層は明黄褐色地山粘土ブロックで、埋土に炭化物･焼土粒子などを混入する。

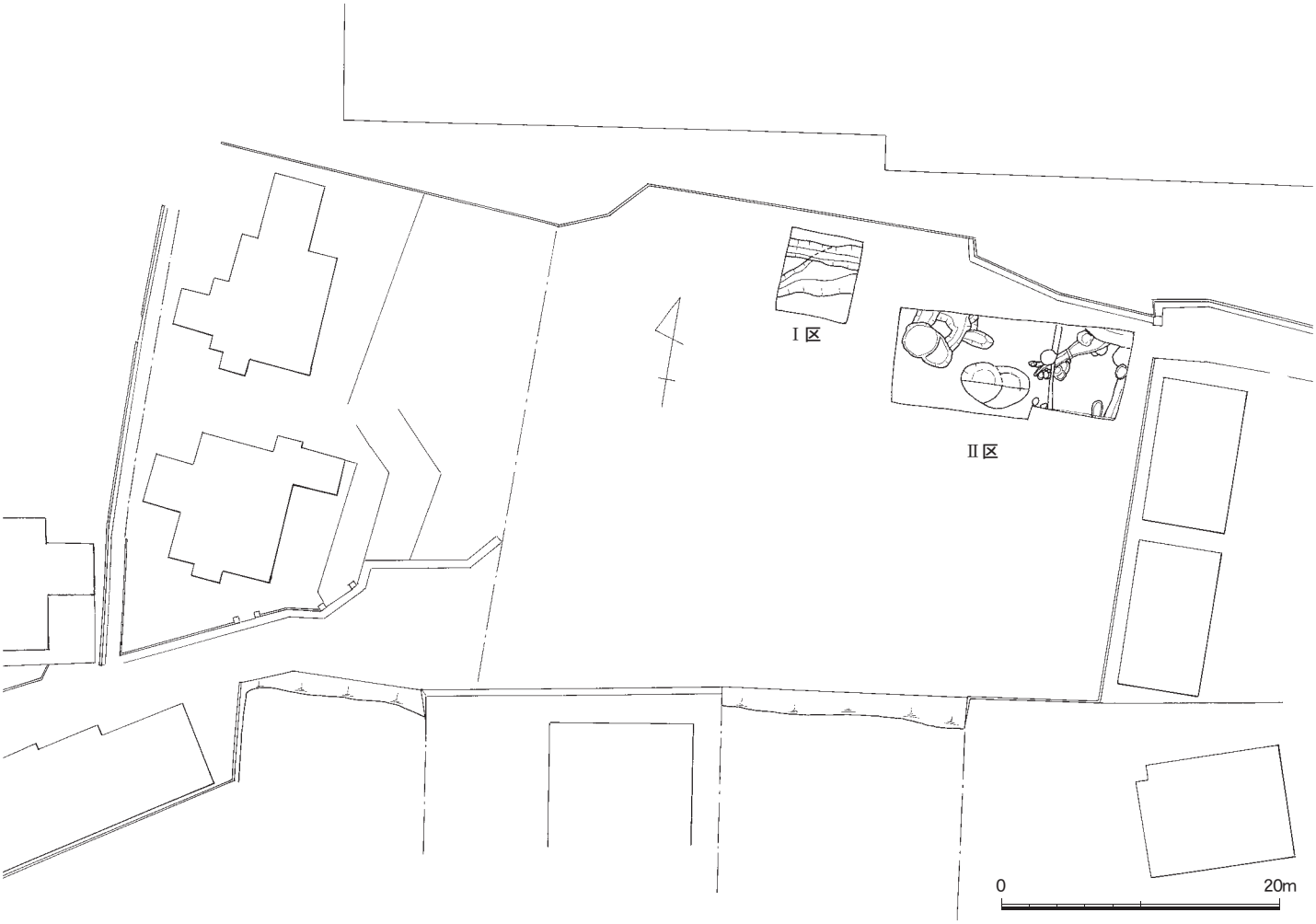


Fig.2　調査地点現況図（1/500）

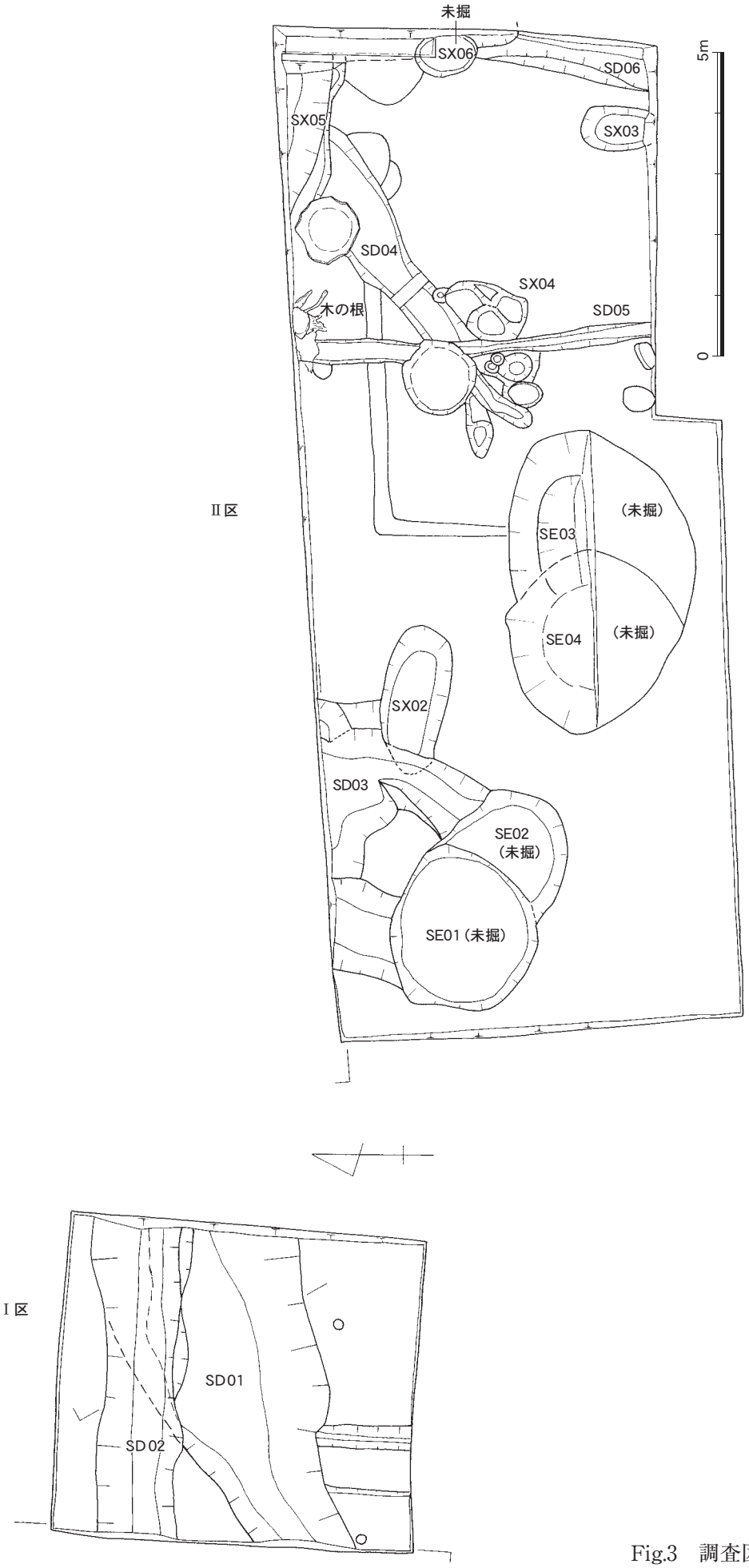
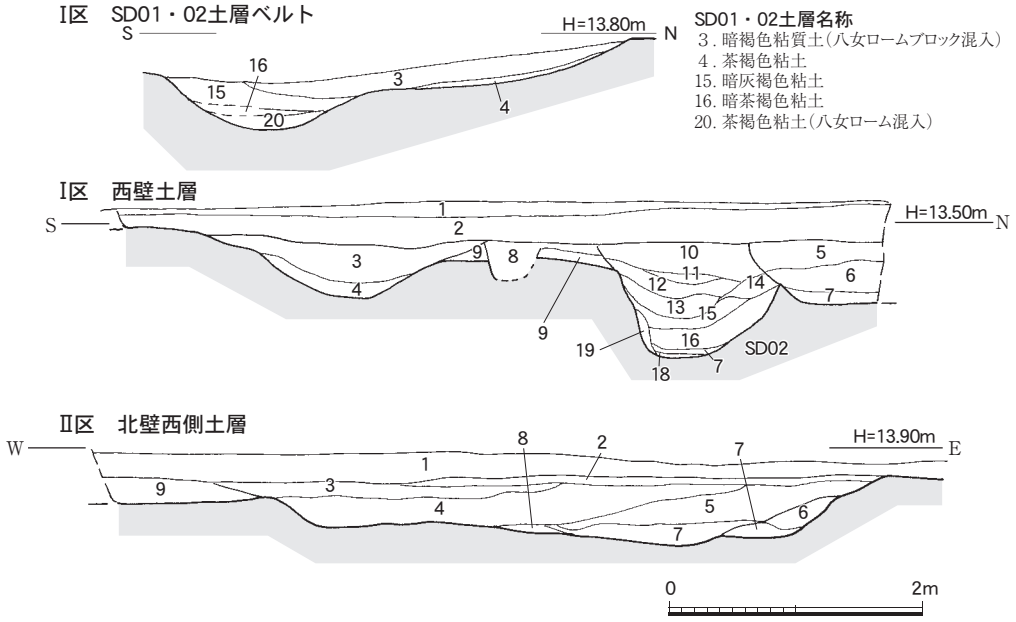


Fig.3　調査区遺構全体図（1/100）



SD01・02土層名称
3．暗褐色粘質土（八女ロームブロック混入）
4．茶褐色粘土
15. 暗灰褐色粘土
16. 暗茶褐色粘土
20. 茶褐色粘土（八女ローム混入）

I区西壁・各溝土層名称
1．表土
2．明茶褐色粘質土
3．暗褐色粘質土
4．茶褐色粘土
5．茶褐色粘質土（軟質）
6．茶褐色粘質土（黄褐色ロームブロック混入）
7．灰褐色粘質土
8．明茶褐色粘質土
9．黄褐色ロームで茶褐色粘質土
10. 暗灰褐色粘質土（木炭片の混入）
11. 明褐色粘質土
12. 黄褐色ロームと褐色粘質土
13. 暗茶褐色粘質土
14. 褐色粘質土
15. 灰褐色粘質土（木炭片若干混入）
16. 灰黄褐色粘質土
17. 黄褐色粘土
18. 黄褐色粘土
19. 暗褐色粘土ブロック

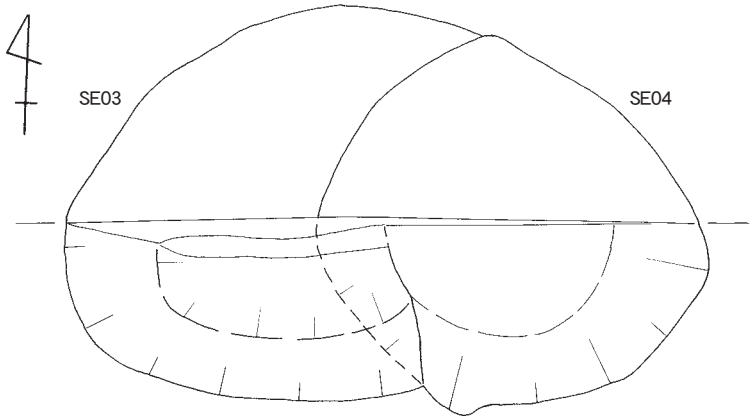
II区北壁西側土層名称
1．旧耕作土（地表土）
2．やや明るい褐色粘質土
3．明褐色粘質土（木炭片が多い）
4．明褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロックかなり混入
5．4に比べ若干暗い褐色土（土質ほぼ同質）
6．暗褐色粘質土
7．灰褐色粘質土と黄褐色粘土ブロックの混合
8．暗灰褐色粘質土と黄褐色粘土ブロックの混合
9．褐色粘質土
10. 黄褐色粘質土

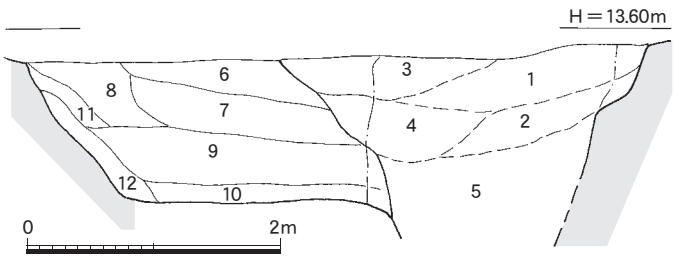
Fig.4　Ⅰ区溝・Ⅰ区西壁、Ⅱ区北壁土層図（1/60）

出土遺物　遺物の出土は少ないが下層から須恵器壺胴底部が出土。**53** は長頸壺。高台径 10.9㎝、残存高 14㎝。胴部外面下半はケズリで、高台部と胴部は回転ナデ。外面部分的に自然釉がかかる。

③　各土坑出土遺物（Fig. 3・9、PL 3－7・8）

54 は **SX02** 出土。SX02 は調査区北西隅 SD03 に切られる長楕円形状の土坑。規模は長軸長 2.1 m、幅 1.1 m、深さ 0.3 mを測る。埋土の色調は黒褐色である。**出土遺物**は古代の土師器・須恵器片が少量出土。**54** は下層出土。須恵器の高台付坏底部 1/4 弱片。復元高台径 8.0㎝を測る。高台は貼付けである。調整は回転ナデ、外底部回転ヘラケズリ。**55** は **SX04** 出土。SX04 は SD04 に切られる平面





SE03・04土層名称
1．褐色粘質土に黄褐色地山ブロック混入
2．明黄褐色粘土（地山）に褐色土少量混入
3．暗灰褐色粘質土に焼土粒･黒褐色粘質土混入
4．暗茶褐色粘質土（灰を交える）
5．明黄褐色地山粘土ブロックに茶褐色粘土少量混入
6．3より暗い暗黄褐色粘質土
7．黒褐色粘質土（軟質、粒子が細かく土器片多く含む）
8．黒色粘質土（軟質で炭化物混じり）
9．黒褐色粘土（軟質で土器片混じり）
10. 黒色砂混じり土
11. 黒色粘質土に黄褐色地山小ブロック混入
12. 黒褐色粘質土と灰黄褐色地山粘土の混合

Fig.5　Ⅱ区 SE03・04（1/60）

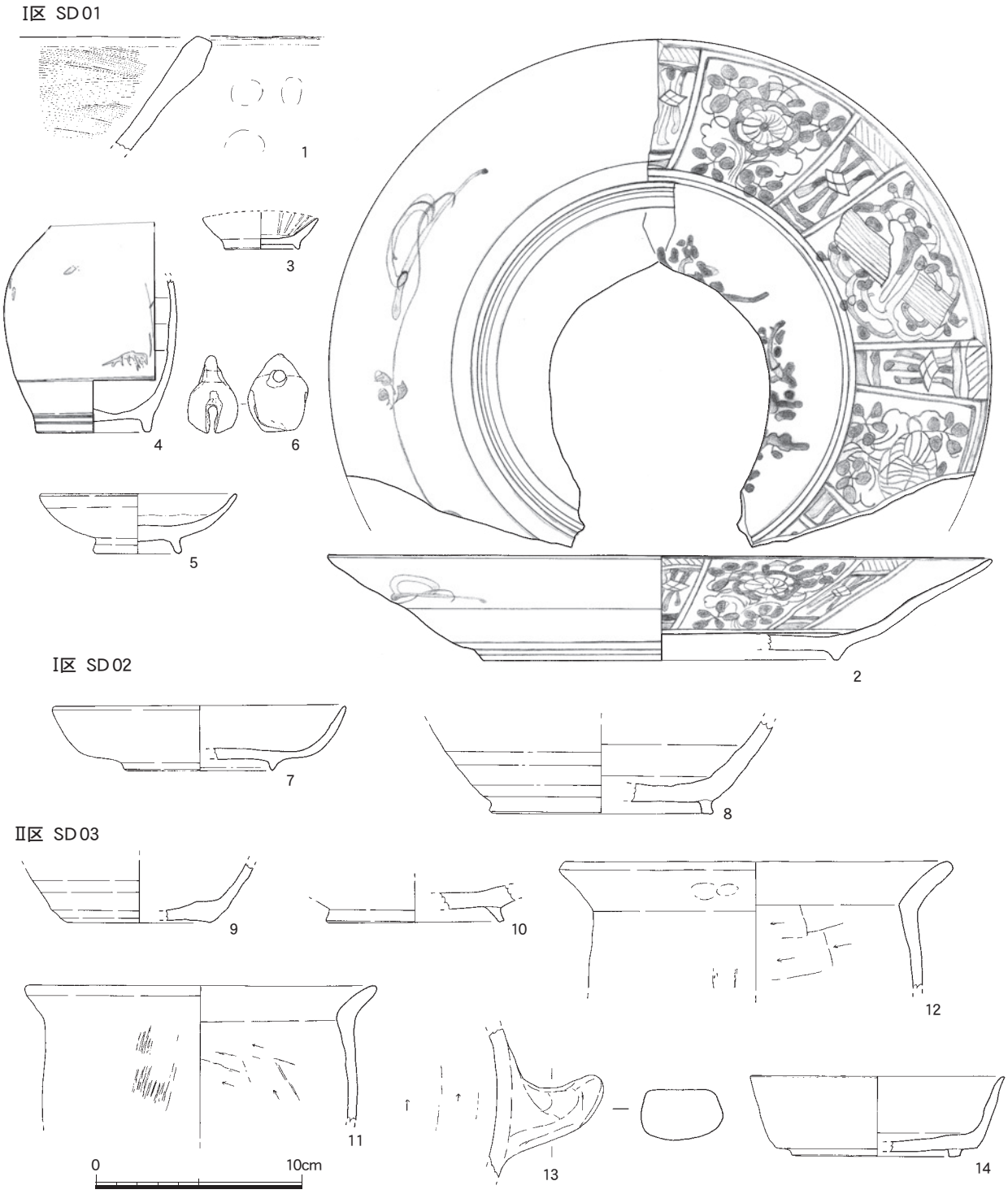


Fig.6　Ⅰ区 SD01・02、Ⅱ区 SD03 出土遺物（1/3）

不定形の土坑。1.4 × 0.9 mの規模で、深さ 0.1 ～ 0.15 mと浅い。残りは悪く焼土を含む。**56** ～ **58** は **SX05** 出土。**SX05** は北東壁で検出した不定形の落込み。埋土は黒褐色粘質土。**出土遺物**は古代の土師器・須恵器や、中世の中国産青磁・白磁、近世の肥前陶磁器片などが少量出土。**55** は須恵器坏口縁 1/4 片。復元口径 11.4cmを測る。**56** は肥前の陶器皿底部 1/2 弱片。高台径 4.8cm。鈍い赤褐色釉がかかるが、外底部は露胎。16 世紀末から 17 世紀初めのもの。**57** は土師器高台付坏 1/3 強片。高台径 9.5cm。器壁は荒れ調整不明。**58** は土師器甕口縁部 1/6 片。口径 13.5cm。器壁は荒れ調整不明。**59** は

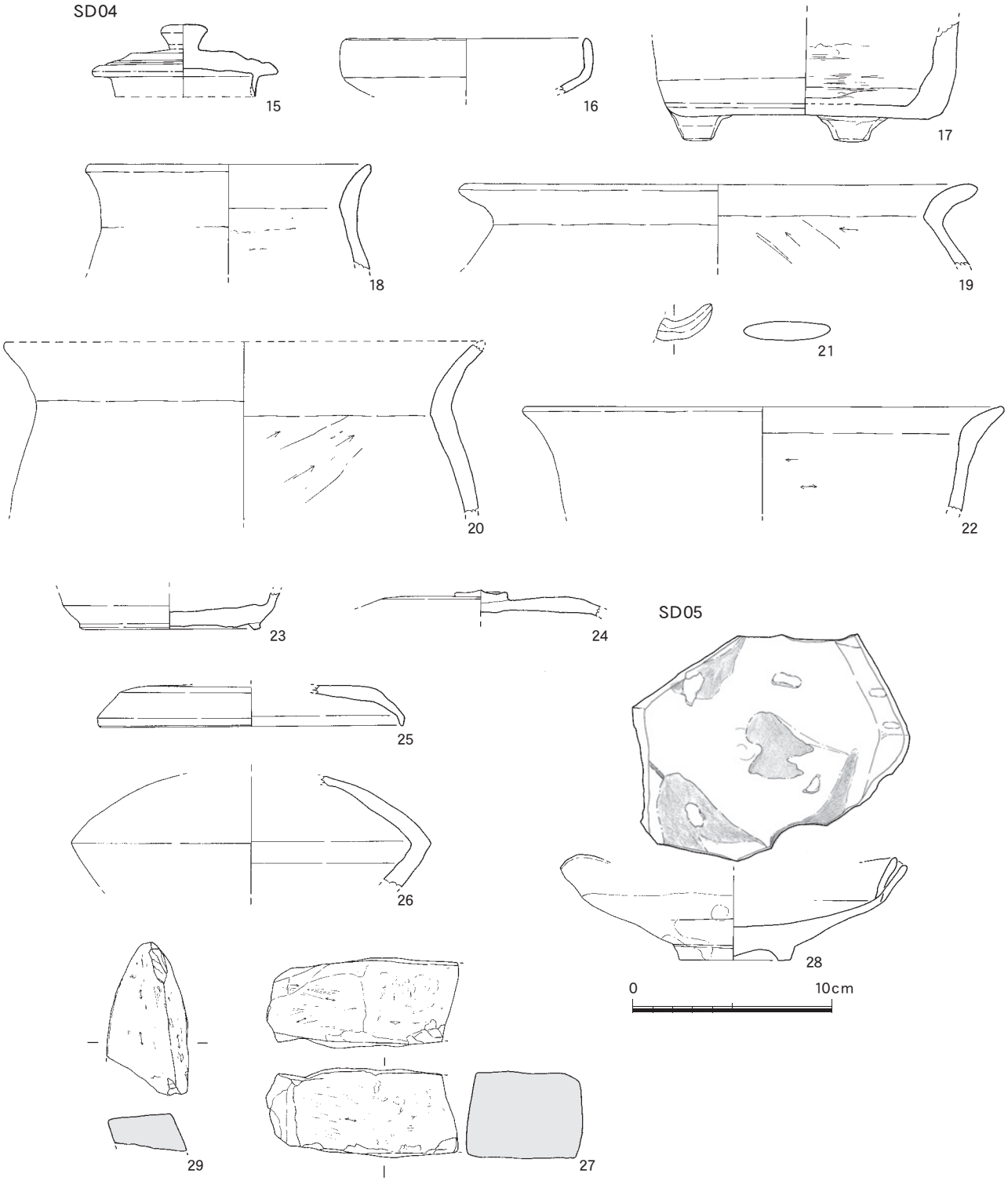


Fig.7　Ⅱ区 SD04・05 出土遺物（1/3）

P-2 出土の須恵器壺胴部片。**SX03** は調査区南東隅で検出した楕円形状の土坑。古代から中世の遺物が少量出土。

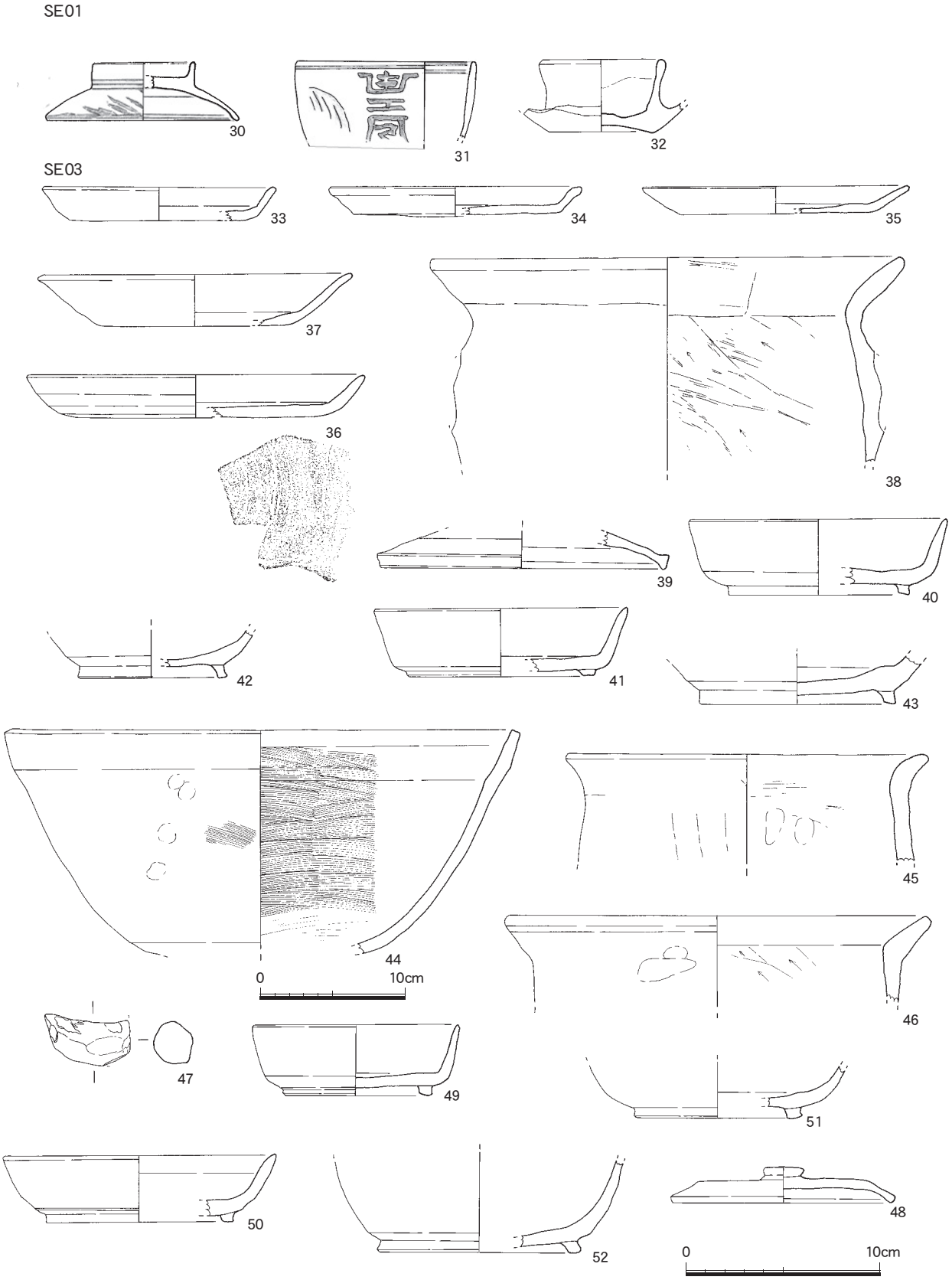


Fig.8　Ⅱ区 SE01・03 出土遺物（1/3・1/4）

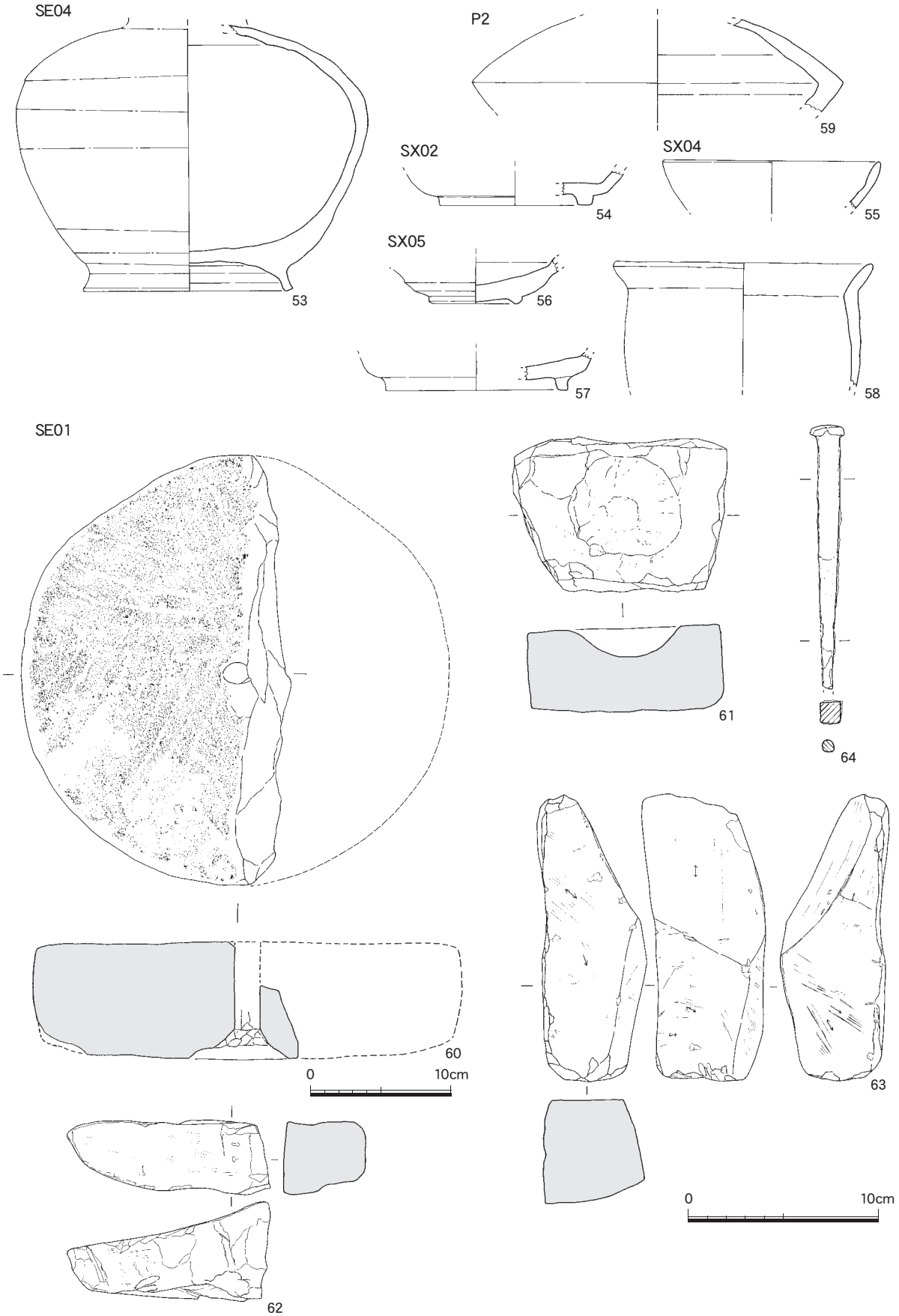


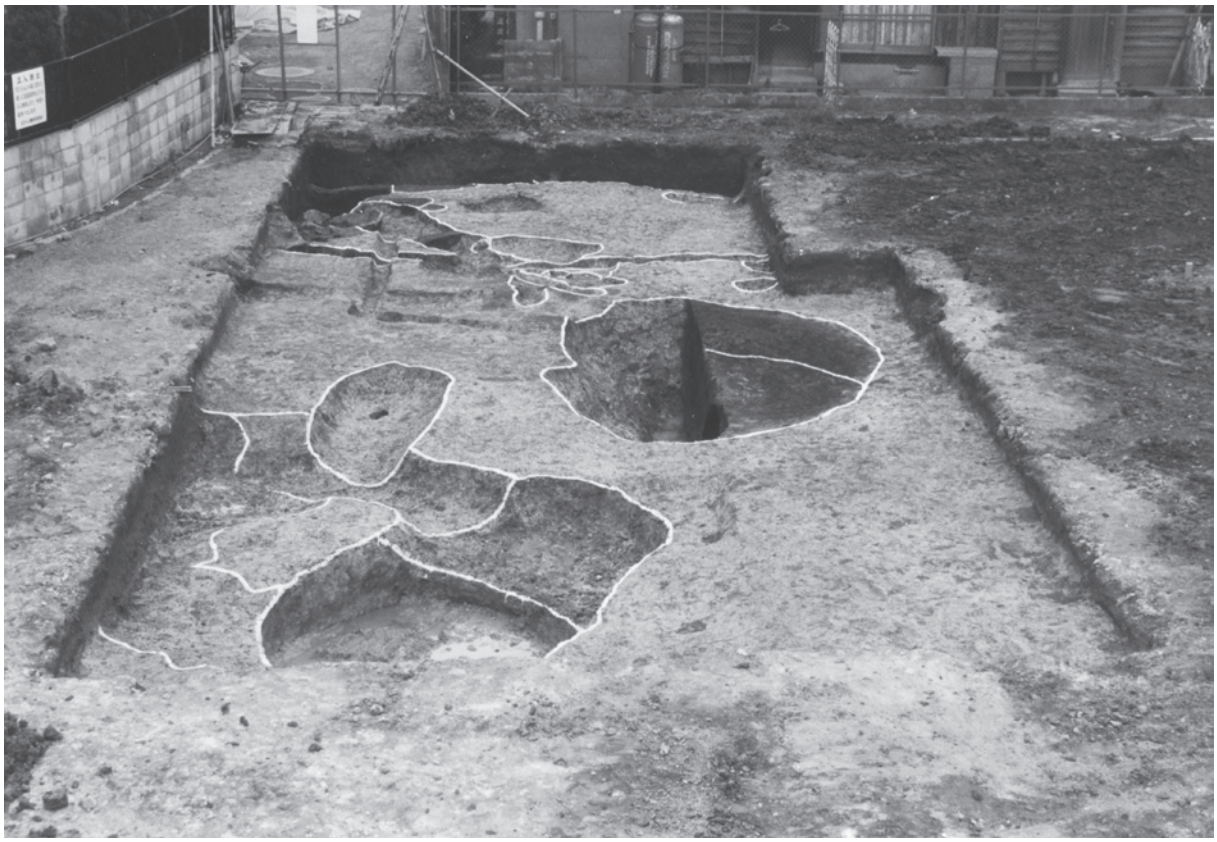
Fig.9　Ⅱ区 SE01・04、各土坑出土遺物（1/3・1/4）

PL. 1

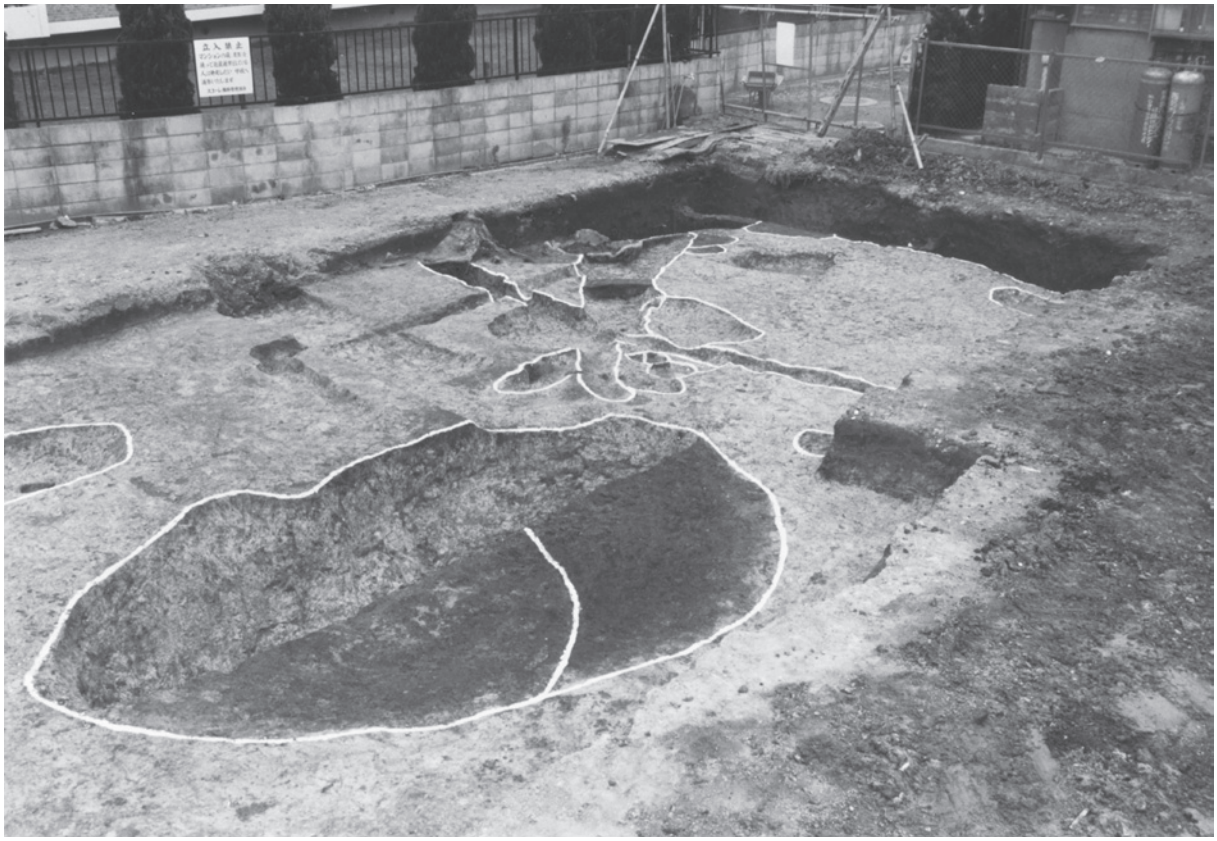
（１） 調査区全景（西から）

（２） Ⅰ区全景（南から）

PL. 2



（1）　Ⅱ区全景（西から）



（2）　Ⅱ区東側（南西から）

PL. 3

（１）　Ⅰ区 SD01・02（東から）

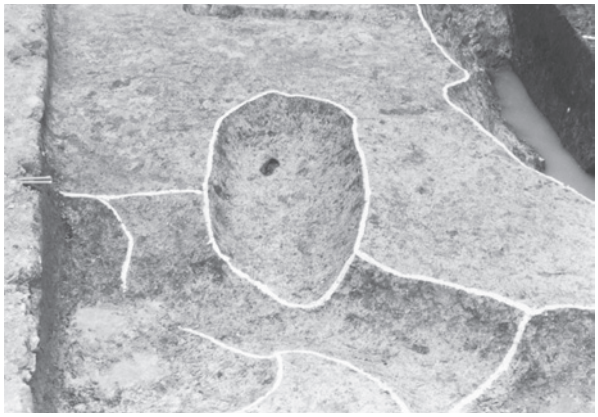
（２）　Ⅰ区 SD02 西壁土層（東から）

（３）　Ⅱ区 SD04・05（南から）

（４）　Ⅱ区 SD06（南から）

（５）　Ⅱ区 SE01・02、SD03（南から）

（６）　Ⅱ区 SE03・04（東から）

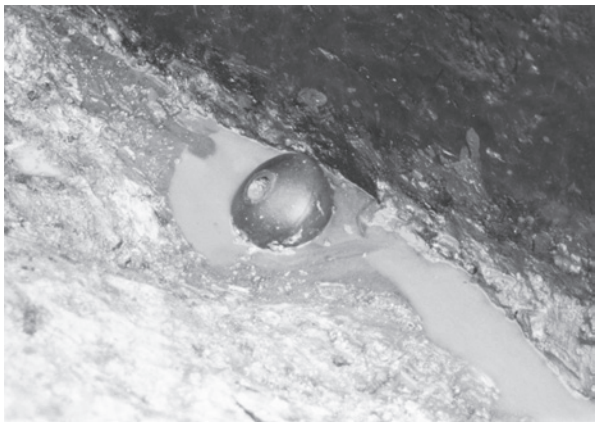


（７）　Ⅱ区 SX02（西から）

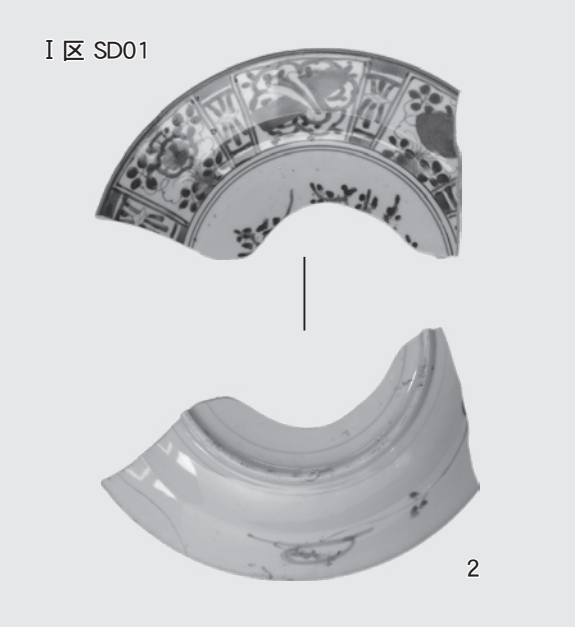
（８）　Ⅱ区 SX03（南から）

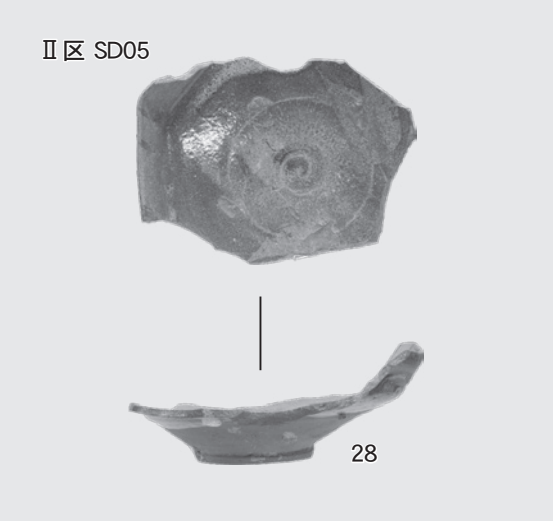
PL. 4

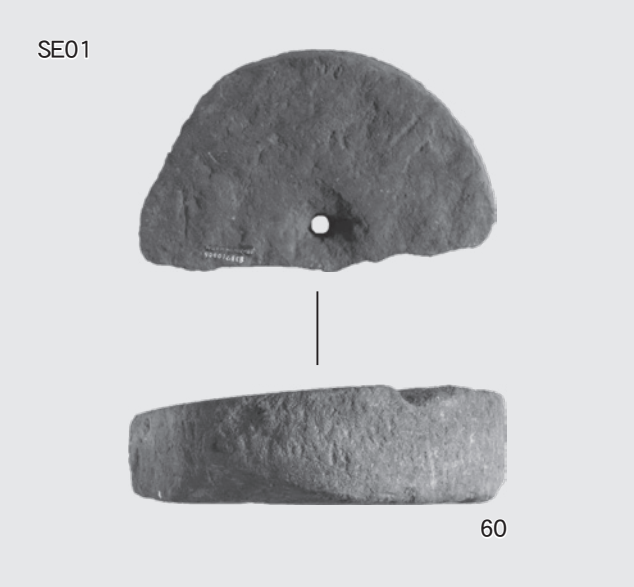
（1） Ⅰ区 SD01 遺物出土状況



（2） Ⅱ区 SE04 遺物出土状況







（3） 各遺構出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうなんぶ
書名	中南部10
副書名	博多遺跡群第146次調査報告、麦野A遺跡第2次調査報告
巻次	10
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1162
編著者名	山崎龍雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621 福岡市中央区天神1丁目8－1 TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2012年3月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐん 博多遺跡群 第146次調査	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 てんやまち 店屋町125･126番地	40130	0121	33度 35分 43秒	130度 24分 37秒	20031126 ～ 20040113	79×2面	専用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第146次調査	集落・生産遺構	中世	井戸・溝・土坑	古代土師器･須恵器＋中世土師器･輸入陶磁器	

要約	安全上の問題から、基盤面まで行っていない。調査した2面の遺構の時期は12世紀から16世紀であった。第1面では並行する2条の溝があり、道の側溝の可能性がある。遺物は古代以前の古い時期のものがあり、下層ではより古い時期の遺構があるものと思われる。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むぎのAいせき 麦野A遺跡 第2次調査	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 むぎの 麦野5丁目24･42・81	40130	0048	33度 32分 50秒	130度 27分 46秒	19830715 ～ 19830725	142.6	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
麦野A遺跡 第2次調査	集落	古代・中世・近世	井戸、土坑、溝	古代土師器･須恵器＋中世土師器･中国産輸入磁器・石臼＋近世国産陶磁器	

要約	遺構の中心は中世末から近世が主体であったが、それらの遺構内から多くの古代の7～8世紀の遺物が出土している。周辺の調査でも該期の遺構が調査されているので、本地点でも近世の段階で破壊されてしまったが、遺構が存在したものと思われる。

中南部10

― 博多遺跡群第146次調査報告・麦野A遺跡第2次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1162集

平成 24 年 3 月 16 日

発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
電話（０９２）７１１－４６６７

印　刷　　田堀印刷有限会社
福岡市中央区草香江１丁目８番 24 号
電話（０９２）７５１－１７８５